

タニシヨに
出会いは求めるのは
間違えるだろうか

大森藤ノ

OMORI FUJINO

イラスト ヤスダスズヒト
YASUDA SUZUHITO

5周年記念

書き下ろし付き
スペシャルストーリー集

[本編編]

チュートリアル

「いいか、ベル。出会いを求めろよ」

頭の上から頻りに聞かされていたのは、そんな言葉。

「男は可愛い娘と出会わなけりや何も始まらん。いや出会ってこそ本懐を遂げる」

キイコ、キイコ、と全身を包んでいた素朴で優しいリズム。

壊れた大地で一人の娘のため怪物と死闘を繰り広げる英雄の物語、お気に入りのお伽噺に没頭する自分胸の中に抱えながら、あの人は揺り椅子をゆつくり漕いで木を音を奏でていた。

「ぶっちゃけ、僕も女の子とムフフなことしてえ」

祖父の言葉は、今でも心に刻み付いている。

「いいか、ベル。必ず出会いを求めろ。男だったら、ハーレムだ」

「……はーれむ?」

絵本から顔を上げ真上を仰げば、いつだってそこにあつた大きな顔は、くしゃくしゃと皺を作り、清々しい笑みを浮かべていた。

白い歯を光らせ、これでもかという清らかな笑みを、満面に。

「そう。男の浪漫、男の理想、英雄になるための長く険しい道程……」

「……出会いをもとめれば、はーれむになって、英雄になれる?」

「うむ!」

それがきくと、原点。

「よし、ベル、僕に続け。——男だったらハーレムだ!」

「おとこだったらハーレムだ!」

「いよいよお! 男だったらハーレムだあ!」

「ハーレムだあー!」

ギイコ、ギイコ、大きく漕がれて大きな音を鳴らす揺り椅子と一緒に。

世界で一番楽しそうな二つの声は、古ぼけた追憶の中、どこまでも響いてくのだ。

「おじいちゃん」

「む?」

「ハーレムって、なに?」

「……なん、じゃと……」



見上げるのは、巨大な神殿だった。

白い石柱と壁で造られた神聖な大神殿……いや万神殿の前に、僕はごくりと喉を鳴らす。出入りの激しい門からは僕と比べ物にならない体格の偉丈夫達が次々と姿を表し、大剣や戦斧を揺らしながらすぐ真横を通り過ぎていく。僕はもう一度、喉を大きく転がした。

ギルド本部。この迷宮都市を管理する巨大機関、『ギルド』の本拠地。

ダンジョンにもぐる全ての冒険者がこの門をくぐり、そして全てがここから始まる。

冒険の始まり。出会の、一歩。

僕は大きく震え続けている鼓動を抑え、深呼吸、次にはぐつと下顎に力をこめて、万神殿へと一歩足を踏み出した。

(す、す……)

前庭を突っ切って門をくぐった先は、白大理石で造られた広大なロビーだった。

屋内を行き交う沢山の冒険者達に圧倒されながら、僕は案内板を見つけ出し窓口へ向かう。

まず最初にやることは冒険者の登録だ。

複数ある窓口、そこから伸びる列の一つに並び、体を頻りに揺らしながら順番がやって来るのを待ち続け、そしてその時が訪れた瞬間。

目の前の係の人が口を開く前に、僕は勢いよく身を乗り出した。

「ほ、僕っ、冒険者になりたいんです！」

大きな声を張った僕に、受付の人は身を軽く引き、啞然とするように瞬きを数度繰り返す。

その綺麗な緑玉色の瞳の中に、目を盛大に燃やしている僕が映り込んでいた。

「……か、確認しますが、新規の冒険者、登録の方でお間違いないですね？」

「はいっ！」

すぐに微笑を浮かべ尋ねてくるその受付嬢の人に、僕は昂った心持ちのまま頷き返した。

彼女は隣の受付嬢に何かを話すと、席を立て僕に付いてくるよう笑いかけてくる。そこでようやく僕は彼女がはつとするような美人だと気づき、頬を紅潮させた。

「それでは、この用紙に必要な事項の記入をお願いします」

誘導された人気のないカウンターで本名諸々を緊張しながら書き記し、提出する。

尖った耳を生やすエルフ、いやハーフェルフの彼女は、年齢の項目を見たところで僕の顔をちらと窺ってその柳眉を沈痛そうに落としたけれど、すぐに職員用の笑みを纏い直す。

「あらためまして、オラリオへようこそ、ベル・クラネル氏。ギルドともども私達は貴方を歓迎します」

恐らくは定例の文句だったにもかかわらず、僕はその彼女の言葉に震えるものを覚え、胸の奥を熱くした。この時、たった今から、僕は冒険者になったのだ。

荘厳な白大理石のホールと雑多な喧騒に包まれながら、僕の瞳はきつと輝いていた筈だ。

「迷宮内での被害、損失に関してギルドは一切の責任を負いません。また伴ってご自身のお命の保障もしかねます。やり直しなどは存在しないことを、くれぐれもご自覚ください」

「は、はいっ」

「注意事項になりますが、度の超えた違法行為は罰則の対象になります。それに際して冒険者の登録が抹消された場合、ギルドの一切のサポートが受けられないのは勿論、ダンジョンから持ち帰った『魔石』や『ドロップアイテム』は全て強制没収となりますので、ゆめゆめお忘れなきようお願いします」

冒険者として活動する上での契約内容、諸注意を言い渡された僕は何度も頷きを返す。

やがて一通り確認を終えると、彼女——エイナ・チュールさんは一つの質問を投じた。

「迷宮探索アドバイザーはお付けになりますか？」

「アドバイザー……？」

「はい。ダンジョンを探索する上で全面バックアップを務める個人専用の担当官を、ギルドの方から冒険者の方々に提供しています。こちらはご任意です」

迷宮探索を始めて日が浅い、あるいは発足直後の【ファミリア】というのは迷宮に関する知識が往々にして乏しい。そこでダンジョンの情報を蓄積するギルド側から冒険者達をサポートするというのが、このアドバイザーという制度らしい。

何も知らない素人の僕にとっては願ってもない申し出だ。受け入れることを即決する。

「わかりました。それでは、担当するアドバイザーの性別にご要望はありますか？」

「え、えっと……じよ、女性の方、で……？」

「かしこまりました。では、こちらの中からご希望する種族をお選びください」

そこまできて、僕はとうとう目を剝いた。

希望する担当官の性別を聞かれただけでも恥ずかしかったのに、種族にまで言及されたら……ここ、個人の嗜好が丸わかりになってしまっ。

何でも、種族間に存在するトラブルを避けるための措置であるらしい。確かにエルフやドワーフなんかは古代から続く種族同士の対立が潜在的にあつて、円滑なコミュニケーション今でも難しいことがあるのかもしれないけど……。

僕はいくつもある種族項目の中で『エルフ』の欄を何度も盗み見てしまう。顔を真っ赤にして、ちら、と目の前の彼女のそのほっそりとした耳も窺ってしまった。

羞恥と懊惱で僕がいつまで経っても動けないでいると、チュールさんはくすりと苦笑を漏らし、羽ペンでさらっと用紙の『エルフ』の項に丸をつける。「あ」と僕が呟いた時には、彼女は全ての書類をまどめながら、ウインクをした。

「人気のある種族はご希望が通らないことがありますので、ご理解のほどをよろしく願います。今日はこれからダンジョンにもぐられるご予約はありますか？」

「い、いえ」

「それでは明日のこの時間にまた本部を訪れてください。アドバイザーの顔合わせと、その他の準備を行いますので」

チュールさんにそう告げられ僕はぎこちなく席を立った。しばらく歩いて後ろを振り向くと、彼女はこちらに微笑^{ほほえ}んで、美しい所作^{しよさく}で腰を折る。

「再び顔を赤らめた僕は、慌てて頭を下げ返し、足早にギルド本部を後にした。」



「昨日から心ここにあらず、って状態が続いてるね、ベル君」

翌朝。

バイトへ向かう神様と途中まで一緒にギルド本部へ向かっていると、そんなことを言われた。「そ、そうですか？」

「ああ。何だかぼーっとしているよ。そんなに冒険者になれたことが嬉しいのかい？」

確かにそれもあると思う。ただ、今一番気になっていることは、僕を担当してくれるアドバイザーがどんな人なのかということだ。

笑いかけてくる神様に、僕は頬をかいて苦笑しながら誤魔化^{ごまか}した。

「今のボク達の【ファミリア】は君だけが頼りだ。どうか頑張ってくれよ、ベル君」

「はい！」

神様に応援され胸が温かくなった僕は大きく応える。

神様と別れた後は、胸の熱に促されるようにギルド本部へ走り出していた。到着して窓口に向かうと面談用ボックスに待機しているよう係の人に言われ、素直に指示に従う。

設けられている椅子に座りながら緊張を覚えていると、やがてボックスのドアが開かれた。

「——あ」

「本日から貴方のアドバイザーを務めることになりました、エイナ・チュールです。今日からよろしく願います」

ブラウンの髪^{かみ}を揺らしながら入室してきたのは、紛れもなく昨日お世話になった彼女だった。眼鏡^{めがね}の奥でその緑玉色^{ラルド}の瞳を柔和に曲げるチュールさんは、明るい笑みを湛^たえる。

期待していなかったと言えば嘘になる。この人が自分の担当をしてくれたらな、と。

浮かれてしまった感情を必死に隠しながら、僕は「こ、こちらこそ!？」と声を上擦らせた。

「では、これから打ち合わせを進めていききたいと思いますが…その前に、クラネル氏」

「は、はい」

「これは提案なのですが…話し方を砕けさせてもらってもよろしいでしょうか？」

書類の詰まったファイルを両手で胸に抱えながら、すつと顔を近づけてくるチュールさん。

どこか人懐こい笑みを浮かべる彼女に、軽く目を見開いた僕は、気が付けば、こくこくと頷くことをしていた。

「ふふっ、ありがとう。これから二人三脚^{にんさんきやく}をしていくからね、気軽で良好な関係を作ってい

きたいんだ。あらためて、よろしくね、ベル君?」

「よ、よろしくお願います! え、えっと……チュ、チュールさん?」

「エイナ、でいいよ」

差し出された手を、僕はおずおずと握り、エイナさんと笑みを交わした。

「それじゃあ、これが支給品の軽装と短刀。サイズは問題ないと思うけど、違和感があるから言ってるね? 使いつつ前だったら取り替えてもらうこともできるから」

「わ、わかりました」

昨日の続きの際に申し込んでおいた武装の支給品を差し出される。

先日、僕が神様と契りを結び旗上げされたばかりの【ヘステリア・ファミリア】には自前の装備を用意するお金もないので、ここでもギルドのお世話になることにしたのだ。勿論費用は借金をするから、注文した装備一式は支給品の中でも最低ランクの軽装短刀。

麻袋に詰まったこの装備品が今後の生活の元手だ、僕はエイナさんからしっかりと武器と防具を受け取った。

「それと、これも。バックバックにレッグホルスター」

「え……これも支給品なんですか?」

「んんつと、本当は含まれていないんだけど……キミは結成されたばかりの【ファミリア】の

所属だしね。倉庫の隅で埃を被っていたものだし、私の方から、ちよつとおまけ」

内緒だよ、とエイナさんは人差し指を唇の前に立てて小さく笑う。

資金に余裕のない僕達の【ファミリア】を配慮してのことらしい。申し訳ない気持ちもあつたけれど、彼女の純粋な厚意があがたくて、僕は迷宮探索における必需品を感謝しながら頂戴する。

手に入った冒険者の持ち物の数々に何だか興奮を覚える一方で、エイナさんはどうやら気さくで優しい性格の持ち主のようだ。

会ってから今までどこか愛嬌のある言動をちらつかせている彼女を見て、僕はそう感じるようになっていた。

「じゃあ、渡すものも渡したし……ベル君、これからダンジョンについて勉強してもらおうよ」

「勉強、ですか?」

テーブルを挟んでお互い椅子に座る中。

エイナさんは眼鏡をかけ直して「うん」と頷く。

「命懸けでダンジョンにもぐって生計を立てていくんだから、しつかりダンジョンそのものやモンスター達のことも知っておかなきゃ。言っておくけど、これははっきり強制だからね」

語気を若干強められながらも、もつともだと思つた。

凶暴なモンスターが巣くう危険地帯に飛び込む真似をするのだ、無知でいることは命を放り

捨てることに等しい。危機的な場面に直面した際、知識があるのとないのではまるで違う。

「この勉強はギルドの方針なんですか？」

「ううん、私が担当する冒険者達に自主的にやっているだけ。知っていることがあれば、どこかで必ず役に立つ時が来る筈だから」

冒険者達に死んで欲しくない、というエイナさんの真摯な思いがはつきりと感じ取れて、僕は思わず嬉しくなってしまった。

この人の気持ちをしっかりと受け止めようと、にわかになる気を含みながら。

「わかりました、よろしくお願いします！」

「ありがとう、ベル君。それじゃあ……」

僕の返事にエイナさんもまた嬉しそうに笑い、それから教材らしきものを取り出した。

鞆かばねに入れておいた本を……僕が一度もお目にかかったことのないような極厚の本を……三冊、ズンッとテーブルの上に置く。

「今日のところはこれだけ覚えよう」

「えっ」

「大丈夫。日付が変わる頃には終わるから」

「えっ」

「さあ、頑張ろう！」

……これは後になって知ったことだけど。

エイナさんは、ギルドでも有名なスバルタ指導員らしい。

冒険者の身を心から案じ、せめて彼等が迷宮から帰還する確率を高めようと。

その膨大なタンジョンの知識を親身になって徹底的に叩き込む、担当された冒険者が思わず泣き叫びながら喜んでしまうほどの、善人ハーフエルフなのだ。

一連の徹底指導は、冒険者達の間から『妖精の試練』と、そう恐れられている。

「復習。ウォーシャドウの戦闘時における能力の特徴は？」

「こ、攻撃が強くて、そ、速度が高い……？」

「一つ抜け落ちてる。耐久力はゴプリンやコボルト並。はい、もう一度最初から全部やり直し」

「ううっ……」

僕の冒険者人生は、まだ始まったばかりだ……。

神サポーター

「ねえ、ベル君。やつぱり、サポーターは雇えそうにない?」

「……ふえ?」

僕はかじり付いていた極厚の本から顔を上げ、問抜けな声を出した。

テーブルを挟んで目の前にいるエイナさんは、心配そうな吐息をつく。

「前も言ったけど、ソロでダンジョンにもぐって欲しくないなあ、っていう話。……あ、その間違えてる。パープル・モス戦の注意点は、常に位置取りを意識すること、だよ。覚え直し」

「はいい……」

ギルド本部の資料室。ダンジョンに関する膨大な知識が詰まる図書館然とした広い空間で、僕は明日を生き残るための勉強に励んでいた。

冒険者になつて一週間と少し。エイナさんが行う迷宮攻略に関しての勉強会——という名のありがたい徹底指導——はこうして定期的に開かれ、僕はかかさず受けている。

例えばダンジョン探索の帰りで多少なりとも疲れていても、都市の歴史書や図鑑ずかんの山に囲まれ首ががっくりと折れかけても、泣き言を漏らす体に鞭むちを入れて羽ペンを動かしていく。

与えられた条件下におけるモンスターの対処法を必死に羊皮紙へ書き綴つづっていく僕を見て、

別件で資料室に足を運んでいたギルド職員達はクスクスと笑みをこぼしていた。

「それでさっきの話んですけど、サポーターを雇うのは難しいかな?」

「ええっと……」

勉強が一段落した後エイナさんに尋ねられ、僕はこめかみの辺りを軽く指でかく。

サポーターとは、『魔石』や『ドロップアイテム』を冒険者の代わりに回収し確保してくれる非戦闘員のことだ。ダンジョン探索の効率を考えるなら、絶対に一人は居て欲しい存在。

ただ問題なのは……構成員が僕しかない。「ヘスティア・ファミリア」には、無所属フリーのサポーターを雇えるほどのお金をひねり出せないということにある。

「パーティが組めないキミには臨時でもいいからサポーターと行動して欲しいんだ。いくら非戦闘員と言っても、彼等のおかげで九死に一生を得た、なんてことはざらにあるからね」

「ですよね……。えっと、もし雇うってことになった場合……その、相手に払うお金って、いくらくらいになるんでしょうか?」

「うーん、サポーターも体を張ってダンジョンにもぐってくれるからね……交渉にもよるけど、通常なら前金で一〇〇〇ヴァリス、残りはその日の探索ダンジョンの稼ぎによって、つてところかな」

軽く計算してみても、今の僕の一日のダンジョンにおける収入の大半が飛ぶ金額。ほぼ間違いないく、次回探索のための武器整備費やアイテムの購入費までお金が回らなくなるだろう。

「やつぱり、今はまだ、難しいかもかもしれません……」

「そっか……。まあ、資金のやりくりは発足したばかりの【ファミリア】の宿命と言えば宿命だしね」

「すみません……」

「謝らないでいいよ」

エイナさんは顔を軽く振って苦笑する。

「一応、キミの主神とも相談はしておいてくれるかな？ もしかしたら、ってこともあるかもしれないから」

「わかりました」

緑玉色の瞳を優しく曲げて笑いかけてくる彼女に、僕はしつかりと頷いた。



「サポーターかあ……」

エイナさんとの勉強会を終え少し遅くなってしまった時間帯。

夕食の後を見計らって、僕はサポーターのことについて神様へ話していた。

「やっぱり、厳しいかなあ」

「そうですね……」

「勿論ボクとしても、少しでも君の安全が保障されるならぜひ雇って欲しいけど……」

腕を組んで少し難しい顔をする神様。そんな表情をさせていることに心苦しいものを感じつつ、やはり当面はソロでダンジョンにもぐり続けるべきだと、僕は自ら結論した。

これまで何だかんだで切り抜けてきたダンジョン探索を振り返って、まだサポーターの手を借りなくてもやっていける筈だと、そう自分に言い聞かせる。

「大丈夫です、神様。今まで通り、僕一人でもやっていきますから」

少し強がりも入っていたかもしれない僕の笑みを、神様はじつと見つめてきた。

顎に手を添えて考え込むこと数秒。「よし」と頷いて、神様は満面の笑みを向けてくる。

「ボクが一肌脱ごうじゃないか」

「えっ？」

きよとんとする僕に、神様はその大きな胸を張って、のたまった。

「ボクが、君のサポーターをやるんだよ」

一瞬、何を言われたのかわからなかった僕は、固まって身じろぎ一つしなかった。

何故か得意気な表情を浮かべる神様に、やがて時を取り戻し、勢いよく座っていた椅子を飛ばして立ち上がる。

「な、何言ってるんですか、神様!？」

「なに、明日はちょうどバイトが休みだ、君に付きっきりでも構わないだろう」

そういう意味じゃなくて……!?

ダンジョンという危険地帯に足を踏み入れることの意味がわかっているんですか、と僕は口をばくばくさせながらどうにか視線で訴える。

「大丈夫さ、荷物持ちくらい。ボクは君の神様なんだ、そこまで見くびってもらっちゃ困るな」それに、と一拍呼吸を開けた神様は、どこか悪戯っ子のように、そしてどこか嬉しそうに、その後の言葉を続けた。

「危なくなっても、君がちゃんと助けてくれるだろ？」

信頼し切った瞳で見上げてくる神様に応えられない筈がなくて、僕は困った顔をしながらも「それは、勿論……」と返事をする。

「それじゃあ、決定だ。ふふっ、ベル君とのダンジョン探索楽しみだなー」

緊張感の欠片もない、というかどこかピクニックでも行こうかという神様の様子に相当な不安を抱えながら、僕はこの時気になったことを口にした。

「あの、神様って、ダンジョンにもぐつてもいいんですか？ 僕は冒険者になったばかりですけど、迷宮に近付こうっていう神様達の姿は全く見たことがないような……」

「……んー、まあ、1階層くらいならバレないだろう」

こちらの素朴な疑問にびたりと動きを止めた神様は、軽く天井を見上げた後、そんな風に答えた。若干答えになっていないような答えに小首を傾げながらも、ダンジョンへ向かうこと

を決めてしまっている神様の姿に頭を痛める。

結局、乗り気である神様の気持ちを僕は押し止めることができず。

翌日、神様と一緒にダンジョンへもぐることが決定してしまった。



「ここがダンジョンか……」

ダンジョンの1階層に到着し、神様はきよろきよろと辺りを見回している。

今の神様は古はけたフード付きのマントを身に付けている。主神同伴でダンジョン探索に来ていると同業者に馬鹿にされたくない一心で、どうにかこれだけ着てもらえるよう僕が頼み込んだのだ。フードを被っている神様は今のところ誰にもその正体を見抜かれてはいない、筈。「話には聞いていたけど、随分と整った道を形作っているんだね。まさに迷路だ」

「1階層を含めた初層は、一段とその傾向が強いつて聞いていますけど……」

可愛らしいリュックを背負っている神様と会話しながら迷宮の奥に進んでいく。

全く警戒心を抱かず、ずんずんと進んでいく神様に、僕は内心で冷や冷やしていた。

『ギィー』

と、本月初となるモンスターとの遭遇を果たした。

小太りした緑色の体の『ゴ布林』は、大きな目玉を吊り上げて敵意をあらわにしている。

「へえ、これがあのゴ布林かあー」

「——!?」
油断なく短刀を装備する僕を、それこそあざ笑うかのように、神様はへえーふうんとゴ布林にあっさりと近付く。僕の両目はその奇行に限界まで見開かれた。

「な、何やってるんですか神様!? 危ないですから下がってくださいっ!?」

「おいおい、相手はあのゴ布林一匹だけ? 何をそんなに慌てているんだよ?」

確かにゴ布林はダンジョンのモンスターの中でも最弱で、誰にでも倒せるような相手ですけどっ、それは【神の恩恵】を授かった冒険者に限った話で……!?

ほれほれ、と手を伸ばし完全にゴ布林を舐め切っている神様の姿に、僕は目眩を通り越して卒倒しそうになった。

『ブギィー!』

「ぐああっ!?」

「か、神様ああああああああああ!?」

ゴ布林のグーパンチが神様に炸裂した。

勢よく吹っ飛ばされた神様は地面をごろごろと転がっていく。

この世の終わりのような絶叫を上げながら僕が全速力で駆け寄ると、神様はぶるぶると震え

ながら身を起こし、殴られた頬を押さえ戦慄した眼差してゴ布林を見た。

「べ、ベル君、こいつ、めっちゃ強いぞっ……!?」

「神様が不用心過ぎるだけです!」

唾を飛ばす勢いで叫びつつ、僕はゴ布林を速攻で撃破した。

まだ一戦目にもかかわらず、はあはあ、と呼吸が大きく乱れている。

「ゴ布林は最弱の代名詞じゃなかったのか……聞いていた話とはまるで違う」

「ダンジョンのモンスターを今の神様の尺度で測っちゃ駄目ですよ!」と、とにかく、これからは迂闊な真似は避けて、僕の後ろにいてくださいっ。いいですねっ?」

「わ、わかった」

ようやくダンジョンの恐ろしさを理解してもらえたのか、神様は張り詰めた表情でこくこくと頷いた。僕はひとまず安堵を覚えながら、そこから本格的に探索を行い始める。

さつき神様が言われていた通り、ダンジョンの1階層は地中を綺麗に切り抜いたかのような道の連なり……迷路が広がっている。薄青色に染まる壁面を視界の両端に置きながら、僕は一々周囲に気を配り、常時意識を研ぎ澄ませて足を進めていた。

特に、目の前に現れたこういつた直角の曲がり角は、折れた道の先が見通せない分、慎重に、更に緊張感をもって臨む。

死角に身をひそめていたモンスターがいきなり、ガバツ、なんてこともありうるからだ。

「あ、見ろよベル君！ こんなところに『魔石』が落ちてるぜ！」

しかし神様は、そんな僕の警戒心を踏んづけて、曲がり角に落ちている『魔石』——恐らく他の冒険者が回収し損ねたもの——へ飛び付こうとした。

まるで差し出された餡あんを欲しがる子供のように目を輝かせながら、わーい、と不注意の極みで曲がり角に駆け寄る。

「よし、魔石二つ目——」

『グルオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

「ほああああああああああああッ!」

「どあああああああああッ!」

曲がり角から飛び出してきた『コボルト』に神様は悲鳴を上げ、僕はそれに叫び声を続かせながら飛び蹴りを放った。

顎を蹴り碎かれたコボルトは『グエッ!』と仰け反りながら後方へと吹き飛ぶ。

「な、なんて危険な場所なんだ、ダンジョン……!」 君はいつもこんな場所にもぐり続けているたのかっ……!」

「……」

二人して息を切らし四つん這いになる中、わなわなと震える神様に、僕は何かを言う気力が

つきかけていた。探索を始めてまだ大して時間が経っていないのに、体力の消耗が激しい。

その後も神様は地味に足を引つ張り続け……いや不慣れなダンジョンに戸惑とまどうことがしばしばあり、僕が何度もフォローを行っては切り抜けていくという状態が続いていた。

「うう、すまないベル君、すっかり君の足手まといになってしまっ……」

「い、いえっ、そんなことは……」

広々とした正方形のルームにて休憩レストを挟む中、僕は神様を励ます。

やはり荷物持サポーターと言っても、一朝一夕でできるものではないのだ。本職の彼等は彼等なりの技術やノウハウを蓄えているに違いない。簡単な職業であるわけがなかった。

しょんぼりしている神様を前にして、僕はそんなことを実感する。

「あ、ベル君、またモンスターだ。……何だかニワトリみたいな外見してるなあ」

「え……?」

そんなモンスター1階層にいたっけ、と神様の示す方向を見れば、確かにいた。

ふわふわとした黄緑色の羽毛を生やした鶏にわとりらしきモンスター。『コケッコケツ』と鳴きながら暢のんき気にルームを横切っていく。害意の欠片もなさそうなその姿をほんやり眺めていた僕は、次第に顔色を変え始め、やがてぱくぱくと口の開閉を繰り返した。

「ジャ、ジャ、『ジャック・バード』……!」

間違いない。エイナさんに叩き込まれたモンスターの情報の中でも、滅多に姿を現さないと

神拳
じのけん

むう、とヘスティアは胸の中で唸った。

ホームにて就寝前の時間帯。じー、とその瞳が見つめるのは、少年の白い後頭部だ。

「膝枕をしたい……」

視線に気付いたベルが首を傾げる中、ヘスティアは彼の頭をじいじいと見据え続ける。

心の奥で渦巻く懸念、それは『自分は『劍姫』に遅れを取ったのではないか』というものだ。ベルとアイズの逢瀬を知った時からその危懼は日に日に大きくなっている。何故膝枕なのかと問われれば勘としか言いようがないが、神の直感はこれで中々馬鹿にできない。

「うーむ、だが、しかし……」

腕を組みつつ、ヘスティアは頬を染めて、ちら、ちら、とベルに視線を飛ばす。

どう切り出したものか。『ベル君膝枕をさせてくれ！』と詰め寄るのはあれだ、神の威厳的にもアウトだ。何より恥ずかしい。なにか、なにか建前がなければ。

ぐぬぬ……と懊悩するヘスティアであったが、おもむろにツインテールが、ピコンと。

「ベルくん、神拳つて知ってるかい？」

「ジャンケン？」

「ああ、神の間でいま流行っている簡単な遊戯でねー」

天界に既存する三すくみの拳遊びを無知な子兎に吹き込む。

下界の硬貨投げにも当たる遊戯に、彼は感心したように頻りに頷いた。

「石は刃物に勝って、刃物は紙に勝って、紙は石に勝つ……へえ、面白いですね」

「だろ？ ボクもつい最近教えてもらってさー、ちょっとやってみないかい？」

いいですよ、と笑顔で承諾する兎を前に、ヘスティアはキラリと目を光らせる。

「ちなみに神と子が神拳する場合……負けた方は、膝枕をされるという特殊ルールが発動するっー！」

「ええっ!？」

強制的に自分ルールを捏造し、ヘスティアは拳を振りかぶった。

「よし、行くぞベル君っ！ ジャーんけえーんっ——ぽおんッ!!」

「こ、これはこれで……」

ソファーに腰かけるベルの膝の上に、弛緩した顔を乗せるヘスティア。

少年に苦笑されながら、猫のように頬をすり寄せ、その細身の太ももを幸せそうに堪能する。その日から連日、女神は執念で十六連敗をもぎ取るのだった。

エピソード・ヘファイストス

鍛冶の神、ヘファイストス。

天界の神匠。

紅髪紅眼の金銀細工師。

火の親方（笑）。

彼女を讃える尊名は数多くあれど、そのどれもが秀でた職人芸や炎のような気質を指すものばかりで、その女神の側面——言うなれば『女らしさ』に触れられるものは一切ない。

神々の間で固定化された『ヘファイストスはイケメン』の通説は、この下界にもあっさり浸透し、子供達もそのように受け止めている。

「別に、誰にどう思われようと構わないんだけど……」

己の執務室にて、姿見の前にはたさむヘファイストスは片手を腰に当てる。

『ヘファイストスほもつと可愛らしくしなきやもつたいないわ』

つい先日、乗りと勢いで開かれた、神友達との宴会の際に告げられた言葉だ。

ヘファイストスから見ても女として成熟している女神の言葉に、その場にいた幼女神や男神も、そーだそーだ、と酔った勢いで賛同を示していた。

（可愛らしく、か……）

気まぐれに近い、ただの興味本位だ。女としての性が働いたこともある。

酔った神友達の言葉に担がれる格好で、思考を働かせるヘファイストスは鏡の中の自分と見つめ合い、やがて、姿勢を作った。

人差し指を自分の頬に当て、きやるるんつ、と満面の笑みを炸裂させる。

「ファイたんですつ！」

「失礼します、ヴェルフ・クロツゾで——」

ガチャ、と突如開かれた扉。

着流しを纏った構成員がソレを目撃した瞬間、さあああああつ、と激烈な勢いで顔から血の気を引かせていく。

顔を蒼白にした団員はさつと視線を逸らし、封印を施すように静かに扉を閉めた。

「——失礼しました」

「待ちなさいっ、ヴェルフッ……！」

お願いだから待ってっ……!? と涙目で鍛冶神は己の子供の後を追う。

他の神々が見ていたのなら、その姿は確かに「可愛い」と満場一致するものであった。

ソード・ガール

「あれ……?」

ダンジョンから帰還し、ギルドに立ち寄った後のことだった。

北西のメインストリートを走って進んでいたベルの視界に、とある光景が映り込む。

足を止め、数歩後退し、通り過ぎた一本の路地裏を覗き込んでみると……そこには金の長髪を背に流す、少女の姿。

(アイズさん……?)

どきりと、と心臓を弾ませながら様子を窺うと、彼女はとある露天商が並べる商品を、膝に両手を置いた中腰の体勢で見物している。

(あ、夢中になってる……)

じーつ、と品物を見下ろしているその横顔を見て、ベルはアイズの心の動きをなんとなしに理解した。特訓を請うようになってまだ日は浅いが、それなりに彼女の感情を理解できるようにはなっていたのだ。

薄暗い路地裏は細長く、何人もの露天商が片側に寄って通りかかる客を呼び込んでいる。地面に引いた布の敷物の上に、洒落た装身具や光り輝く鉱石など、それぞれの商品を並べていた。

アイズが足を止めているのも、アマゾネスの女性が売り込みをしている露店の一つだ。

(やっぱり、アイズさんも女の人なんだ……)

買物に夢中になっているアイズの姿を見て、ベルは頬を緩ませる。

どこか超俗している彼女の少女らしい一面を見て嬉しくなった彼は、何を欲しがっているんだろう、と角から身を乗り出す。薄暗い路地裏を見通せるよう目を細め、聞き耳を立てた。

「アンタお目が高いよ、これは血狂いの呪剣って言ってるね、その筋じゃ曰くつきの業物さ!」

「よく、斬れる?」

「当たり前さ! ミノタウロスなんて一振りで一殺だよ、一殺!!」

ずおおおおおとおおおと、と瘴気を撒き散らす暗黒剣の前にして、興味津々のアイズ。その無表情の顔の奥で、無垢な少女のように瞳を輝かせていた。

ベルは、そっとその場を離れる。

(——見なかったことにしよう)

少年は己の憧憬を守るため、速やかに一連の記憶を闇へと葬った。

【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。

好物——劍。

眷族特效薬

「ぶっえつくしょんつ!？」

大きくしゃみとともに、二つに結えられた黒いツインテールが、びよんつと飛び跳ねる。額に乗せてあった手拭き布もずれ落ち、ベッドの中で毛布を重ね仰向けに寝る神様は、「うー」と唸りながら自分の手で布をかけ戻す。

「か、神様っ……大丈夫ですか？」

「は、はははっ、大丈夫、大丈夫……じゃあ、ないかも」

あたふたと右往左往することしかできない僕の問いに、神様は空元氣とわかる声で答える。赤く染まった丸い頬に、細い首筋。熱っぽい瞳はどこか視線がふらふらしていて頼りない。今も寒いとばかりに肩を震わせ、ベッドの中で体を縮こませる仕草をする。

完璧に、風邪の症状だった。

「神様でも、風邪を引かれるんですね……」

「風邪を引くというか、下界に降りてきて引けるように調節したというか……」
教会の地下室にある【ヘスティア・ファミリア】のホーム。ベッドに寝そべる神様の枕もとに寄り添うような形で、僕は看病を行なっていた。

早朝のことだった。寝床となっているソファから起き上がり、いつものようにダンジョン探索へ向かう準備をしていた僕の耳に、まるで必死に堪えようとしていたかのような、小さな咳きかほごほと聞こえてきたのは。

女性の方の心の機微に疎い僕でも、こればかりはわかった。幼い頃、祖父に迷惑をかけたいと毛布を被り風邪を我慢していた自分と、その神様の姿は、ぴったりと重なり合ったから。探索の支度を放り出して神様に駆け寄った僕は、熱を確認したり予備の毛布を引つ張り出したりと大慌てで動き回り、こうして今に至っている。

「神様達の取り決めもわかりますけど、わざわざ苦しむような真似しなくたって……」

「お、おいおいベル君、そんな気の毒そうな目で見ないでくれよ。神が風邪を引けるんだぜ？ 素晴らしいことじゃないか。ボクは今こそ下界の醍醐味を味わってゲフォッゴフォッ!？」

「神様あーっ!？」

強がっていた神様はあられもなく咳き込んだ。僕は何もできず叫ぶことしかできない。神様の顔は全体的に紅潮している。寒気にも襲われているらしく、熱が高いことが窺えた。普通の風邪、だとは思っただけ……。

「うう……」

「神様っ?」

ぶるり、と体を震わせ両目を瞑る神様に、僕は覗き込むように顔を寄せる。

「……さ、寒いー、ベル君一緒に寝てくれー、人肌で温めておくれー」
 血迷いごとを口走ってしまうほど、やはり神様の熱は高いようだ。

(もう、こんなに……)

額に置いておいた手拭き布は、すっかり生温くなってしまうていた。瓶かめに溜まる水へ布を浸し直す。絞って水を十分に切って、まず顔にしんわりと滲じむ汗を軽く拭わせてもらった。

指先が僅わずかかに触れてしまった頬はとても火照ほてっており、僕はかなりためらった後、そっと神様の額へ手の平を乗せた。

まるで暖炉に手をかざした時のように、熱い。

「気持ちいい……」

眼まなこを閉じたまま、神様は額に置かれた僕の手の平の上に、「ご自分の手の平を乗せた。

力の入らない指がぎゅっと柔らかく、僕の手の甲くわびらを握にぎりてくる。

神様の弱々しく切れる呼吸を聞きながら、僕は浅く囁ささやんだ。

何とかしてあげたい。少しでもいいから、神様の苦痛を和らげてあげたい。

必死に思い出す。僕が風邪に苦しんでいた時、祖父は何をしてくれたのか。

湧わき出る汗を拭ぬってくれて、温かいものを食べさせてくれて、薬を用意してくれて……。

(薬……)

そうだ、薬を飲ませて上げれば、神様の風邪も快方に向かうかもしれない。

でも……神様に僕達が服用する薬は効くのだろうか。上位存在デウスデアである神様に、僕達が扱う普通の薬を飲ませても平気なのだろうか。

それに薬を用意するって言ったって、今の神様を一人になんかできないし……。

何の行動にも踏み切れないまま、時間だけがただ過ぎていく。

「ベル様？ いらっしやいますかー？」

僕が判断しかねていた、その時だった。

とんとん、とホームの扉を可愛らしくノックする音とともに、その声が聞こえてきたのは。はっとして振り返ると、ホームのドアの間隙から、リリがひよこ顔を出すところだった。

「リリ！」

「時間になっても来られなかったので、窺のぞわせてもらったのですが……何かあったのですか？」
 僕はダンジョン探索の際、サポーターのリリといつも決まった集合場所待ち合わせをしている。いつまで経ってもやって来ない僕の様子を、リリは見にきてくれたのだろう。

ダンジョン探索のパートナーである彼女が今は救世主のように見えた。僕は立ち上がってぶんぶんと手招きする。

「お願いリリ！ 神様が風邪を引いちゃったんだ、様子を見てあげてくれない!? 埋め合わせは絶対するから！」

「べ、ベル様？」

神様のベッドまで来たリリに、がーっとまくし立てるようにお願いする。
目を白黒させるリリに何も言わせなのまま、「ごめんっ」と勢いよく頭を下げた。

「僕、薬をもらってくるから！」

神様の薬を用意できそうな、心当たりが一つ。

用意できるだけのお金をもって、僕は急いでホームを飛び出した。

「行ってしまいました……」

「うーん、ベルくーん、手を握っていておくれ」

「……ヘスティア様、それはベル様の手ではありませんよ。リリは別に構いませんが……」

「……どわあっ!?!」



既に沢山の市民や馬車が行き交い賑わい出している、西のメインストリートを折れ、薄暗い路地裏を進む。慌てるあまり何度か曲がる道を間違えながら、僕は日当たりの悪い場所に建てられた一軒家へと駆け込んだ。

「すいません、ミアハ様はいらっしゃいますか!?!」

木扉の開けざまに、挨拶もしないで声を張る。

戸棚が壁際に並ぶ店内——【ミアハ・ファミリア】のホームには、派閥の主神様であるミアハ様と、団員のナーザさんがいた。品物の整理でもしていたのか、揃って木箱を両手で抱えるミアハ様達は、勢いよく飛び込んできた僕に目を向ける。

「ベル、どうした、そのように慌てて。何かあったか?」

「それが、神様が風邪で寝込んでしまっ……!」

髪の色と同じその群青色の瞳に見つめられる中、僕はミアハ様にわけを説明した。

【ミアハ・ファミリア】の派閥活動は回復薬、とりわけ薬と言えぬ商品を販売することだ。薬品の専門知識を尋ねるならまずここだし、神様であるミアハ様にお聞きすることで、女神様にも効果のある治療薬について何か教えてもらえるかもしれない。

息を切らしながら口早にことのあらましを伝え切ると、ナーザさんが「はい……」とグラス一杯の水を差し出してくれる。「ど、どうも」と僕は素直に受け取っておいた。

一息ついて落ち着きを取り戻したところで、顎に手を添えていたミアハ様は、ふむ、と頷く仕草をした。それから僕のことを見て、笑いかけてくる。

「安心しろ、ベルよ。存在するぞ、そなたが求めている……とっておきの神への特効薬がな」

「ほ、本当ですか!?!」

「うむ」

身を乗り出す僕が口を開く前に、ミアハ様は先回りをするように言葉を続けた。

「金は無用だ。それよりも、その特効薬を用意するには特殊な製法を行わなければならない。無論、手間もな。故に、ベル、そなたの協力が不可欠だが……」

「や、やります！ 何でもやりますっ、手伝わせてください！」

「良い答えた」

満足いったというように笑みを深めるミアハ様は、ナーザさんを見やって指示を出す。

「ナーザ、製薬の準備を整えておいてくれ。私とベルは、しばらく外へ出る」

「わかりました……ベル、頑張ってね」

臉の半分下りた一見眠たげそうな顔で、ナーザさんはしつかりと返事をする。

自分へ向けられた最後の言葉に咄嗟に頷くと、彼女はお店の奥へ引っ込んでいった。

「あの、ミアハ様。僕達はこれから、何を……？」

状況の推移に少し置いてきぼりにされた僕が、おずおずと尋ねてみると……ミアハ様は着ているローブを纏い直し、口端を上げた。

「なに、材料と、道具集めだ」



「デメテルよ、いるか」

どこか穏やかな印象を受ける木造りの屋敷には、手作りの柵で区切られている小ぢんまりとした裏庭があった。構成員と思しき女性に、屋敷を回り込むようにして裏庭へ案内される中、僕は幼い頃から嗅ぎ慣れた土と葉っぱの香りを感じ取る。

裏庭、いや菜園に何かの種を蒔いていた一人の女神様は、ミアハ様の声に引っ張られるように振り返った。

「ああ、ミアハ。今日は何か御用？」

ゆったりとしたカートルに身を包み、麦わら帽子を被った女神様……デメテル様はにこやかに微笑んだ。帽子の下ふわふわとした蜂蜜色の髪が、陽光を浴びて綺麗に輝いている。

「あら、貴方は……ヘステイアのところの、ベル君ね？ ふふっ、先日はごめんなさい。二人きりの時間を邪魔してしまっつて」

「い、いえっ!？」

声をかけられた僕は肩を盛大に緊張させて、それだけしか言えなかった。

以前、ヘステイア様と外で夕食を取ろうとした時、僕はデメテル様を始めたとした女神様達に襲撃(?)されたことがある。当時のことを思い出すと、今でもあっという間に赤面してしまっただけだ。

あの胸の谷間に、顔を埋められてしまったのか……とそう考えた瞬間、僕はぶんと顔を振った。服の上からでもわかるその大き過ぎる胸の膨らみから視線を引き剥がして、やっぱり

赤くなりながら必死に見まいとする。

「実はな、ヘステイアが風邪で寝込んでしまったらしいのだ」

「まあ、ヘステイアが？」

「うむ。そこで、そなたが栽培している薬草を少し分けてもらいたい」

ミアハ様の話によると、「デメテル・ファミリア」は農作物や果樹の栽培を主とする商業系の派閥らしい。この小さな野菜畑の他にも、市壁を出た都市郊外に広い耕地を持っているらしく、オラリオの食料事情に大きく貢献しているのだそうだ。

更に迷宮都市ならではと言うか、ダンジョンでしか取れない地下迷宮原産の植物や木の実を冒険者から買い取って、地上での栽培・開発を積極的に試みているらしい。生産に漕ぎ着けた品も多く、一般人冒険者を問わずその需要は高いのだとか。この話を聞いて、僕は心底驚いてしまったけれど。

迷宮産の果実や薬草は栄養価や効能のほどが高く、冒険者の扱う道具アイテムの原材料としても役に立てられているのだ。

（材料集めて、そういうことか……）

つまりミアハ様は、この場所へ訪れたように、神様の特効薬に必要な材料や道具を探しに都市を巡るつもりなんだろう。デメテル様からは薬のもととなる薬草を頂くつもりらしい。

話を聞いたデメテル様も何かを悟ったのか。

僕のことを見つめて、微笑ましそうに破顔してくる。

「あらあら、まあまあ。そういうことね。わかったわ、採れたての薬草を差し上げましょう。

ペルセフォネー！ リンネのハーブを！」

「はあーい！」

団員の一人に声をかけ薬草を用意してくださいとささるデメテル様。

隣にいるミアハ様に笑みを投げられ、僕も釣られて、けれど嬉しさを隠せないまま苦笑する。まずは一つ目の材料を、手に入れた。



「ハ、こは……」

目の前の建物を仰ぎながら、僕は自然と及び腰になってしまった。

北西のメインストリート。都市の人々から「冒険者通り」とも呼ばれる大通りの一角に、真っ赤な塗装を施されたその大きな商店は建っている。

扉の上に飾られる看板に描かれているのは、**[Heros]**の文字列ロゴタイプ。

「邪魔をする」

「いらつしやいませ」

尻込みする僕とは全く対照的に、ミアハ様は堂々と店内へ入っていった。慌てて後を追う。重厚な扉をくぐると、紅色の制服を着こなした店員がすぐに対応してくる。およそ高級武器店に相応しくない貧相な身なりの僕達に、彼女は訝しげな視線を送ってきたけれど、ミアハ様は微笑を浮かべ「構わなくていい」と手を上げた。その貴公子然とした笑みに、女性店員さんの顔がほっと一瞬で赤く染まる。す、す、す……!!

「お、お客様っ、いえ男神様っ、困ります、こちらは売り場ではなく……!!」

「なに、そなた達の主神に用があるだけだ、妙な真似はしないと約束しよう」

神が赴いた方が手取り早いとばかりにミアハ様は店の奥へ進路を取る。家鴨の子のように黙ってミアハ様に付いていく僕は、煌びやかな内装と様々な武器が飾られた店内を、観察する余裕がないまま突っ切っていった。

「一体なに、騒がしいわよ?」

そして僕達がカウンターの先を越えようとすると、階段を降りてくる音の後、店内に通じるドアを開けて、右眼に眼帯をした紅髪の女神様が現れた。

(へ、ヘファイストス様……)

腕の立つ多くの上級鍛冶師を率いる、世界でも名高い【ヘファイストス・ファミリア】の主神様を前に、僕は知れず緊張していた。

「あら、ミアハ。久しぶり。それと、その子は……」

「何だ、そなた達は初対面だったか。なら紹介しよう、ヘステシアの眷族の、ベルだ」
「は、初めまして!」

大きく頭を下げた僕を、ヘファイストス様は眼帯をしていない左眼でじっと見つめてくる。僕が立ちつくしていると、ヘファイストス様はその紅の瞳を細めた。

「なるほど、貴方がヘステシアご自慢の眷族ね」

「え……?」

「ふふっ、気にしないでちょうだい。ヘファイストスよ、よろしくね、ベル・クラネル」
「は、はいっ」

手を差し出され恐縮そうに僕も做うと、力強く握り返される。身長はミアハ様ほどではないにしても僕より少し高く、麗人、という表現がヘファイストス様にはぴったり当てはまるような気がした。何とうか、格好良い、とうか。

「私の打ったナイフのことを色々聞きたいけど……何か用件があるんでしょ、ミアハ」

「うむ。実はヘステシアがな……」

戸惑っていた女性店員さんを下がらせる中、ミアハ様から事情を説明されると、ヘファイストス様はあからさまに顔をしかめた。

「ヘステシアが風邪えり? また仮病じゃないでしょうねえ?」

「ち、違えますっ、ヘステシア様は本当に!」

「まあ気持ちにはわからなくてもないが、疑ってやるな。大事でなければ、ベルがこうしてそなたを訪れることもないのだから」

「……わかったわよ、その子に免じて、取りあえず信じるわ。で、私に何を頼む気？」

「うむ、鍋が欲しいのだ」

は？ と目を丸くするヘファイストス様に続いて、えつ、と僕も動きを止める。

「薬の材料を調合するためのものだ。生憎私の【ファミリア】の道具も買い替え時でな、ちょうど切らしている」

「……なに、鍋を作れっていうの？」

確かに鍛冶かじっていうのは、厳密に言えば、武器だけではなく金属品全般を作る職業ではあるけど……天下の【ヘファイストス・ファミリア】作成の鍋なんて、大層過ぎるような……。

「神友が苦しんでいるのだ、少しくらい協力を惜しまずともよからう。何より……神おんのために奔走ほんそうしている、このベルの顔を立ててやってほしい」

ほん、と頭に手を置かれ「へっ？」と僕は固まり、すぐにミアハ様を仰いだ。

ミアハ様は笑みを作りながらヘファイストス様を見つめ、そしてそのヘファイストス様も、理解の追い付いていない僕の顔を見やり、一笑した。

「——いいわ、乗った。作ってあげる」

「代金は必要か？」

「要らないわよ。私の気まぐれなもの。もし割に合わなかったら、ヘステシアの賃金から引いておくわ」

どこか機嫌きげんが良さそうに了承したヘファイストス様は、時間を置いたら取りに来るようにと僕達へ伝えた。この店に設けられた工房を利用して、自ら作ってくれるらしい。

【ヘファイストス・ファミリア】に鍋を作ってもらうなんてまだ信じられない気持ちで店を出ると、「さあ次だ」とミアハ様に引率され、都市中を回っていた。



「さて、準備も一通り終えたな」

必要な材料をあらかじめ集め、最後にヘファイストス様から鍋ちまうだいを頂戴した僕とミアハ様は、ナーザさんの待つ【ミアハ・ファミリア】のホームに戻ってきていた。案内された厨房には試験官やすり鉢などの道具が大型の机の上にとろ狭しと置かれている。

「あの、ミアハ様、それで特効薬っていうのは一体……」

ずっと疑問に思っていたことを口にする。上位存在かみきさまへの特効薬と言うくらいなのだから、それはもうおいそれと用意できないすごい代物なのは、と僕は想像を働かせていた。

「ふむ、結論から言ってしまうば……今から作る薬は、どこでも手に入れられるような、平凡

な飲み薬だ。下界に降りた神には、下界の薬も有用であるからな」

「……ええっ!？」

打ち明けられた事実には、口を開け二の句を継げられないでいると、ミアハ様は笑う。

「だが、今から作る薬がヘステシアにとつて何より効き目があるのは間違いない。眷族が神のために東奔西走し、快方を祈り作り上げる……それが何ものにも代えがたい、神への特効薬だ」

ミアハ様の優しいな青色の瞳に、僕は言葉を忘れながら、瞠目した。

特殊な製法、という言葉の意味を、臆気ながら理解する。

「ヘステシア様がベルに薬を作ってくれたら、ベルは元気になるでしょう? そういうこと……。私も手伝うから、仕上げ、やろう?」

ぽん、と肩を叩いて、ナーザさんが抑揚のない普段通りの口調で、そう言ってくれる。

しばらく彼女の顔を見つめていた僕は、微笑しながら見守ってくれているミアハ様のことも一度見て、力強く、頷いた。

ナーザさんに横で指導してもらいながら、慣れない手付きで何度も間違えながら、僕は神様のための薬作りに取り組んだ。



「ベルくん、早く帰ってきておくれ。サポーター君じゃあダメなんだ」

「本人の目の前で言いますか、普通……」

「ごほほと軽く咳き込みながらぶーたれるヘステシアに、リリは瓶の中の水を変えトコトコとベッドに歩み寄る。水で濡らした布を用意して、ごろごろと寝返りを打ちまくる女神を半眼で見下ろした。

「さあ、ヘステシア様、起き上がってください。ベル様が帰ってくる前に、もう一度お召し替えしましょう。また汗をおかきになっているでしょうから」

「ばんざーい」

「……本当にベル様がいなくなった途端、怠け者の権化になりますね」

起き上がり、目を閉じながら諸手を上げるヘステシア。脱衣をさせてくれと訴える格好だ。風邪で朦朧として弱っているにしても、これは酷い、とリリは呆れながらも、せつせとヘステシアの衣服を着替えさせる。

汗を拭い、その度に震える巨大な双丘も睨みつつ、献身的に幼女が幼女の世話をしていく。

「神様っ、お薬持ってきましたあ!」

「~~~~~」

ばんっ! と勢いよく開かれたホームの扉に、ヘステシアとリリはそれまでの緩慢な動作を一変させて、ばたばたばたっ! と駆け回るように慌てふためく。

ベルが首を傾げる中、リリに覆い被されるヘスティアは、何とか着替え終えていた。

「あ、あー、ベル君、早かったね？　もう薬を買ってきてくれたのかい？」

「いえ、その、実は……」

引きつった笑みを浮かべるヘスティア——と肩で息をするリリ——には気付かず、ベルは両手に持つ鍋に視線を落とす。その背後から続いてホームに入室してきたミアハが、言葉を言いあぐねる彼に代わって説明した。

「ベルが自分で作ったのだ。ヘスティア、そなたのためにな」

「えっ……ほ、本当かい、ベル君？」

「ミ、ミアハ様やナーザさんにほとんど手伝わってもらったものですけど……その、はい」

ベルは顔を赤らめながら、呆然とするヘスティアのいるベッドに近寄った。

リリが速やかに場所を空ける中、鍋に溜まる薄青の液体をグラスにそそいで、差し出す。

「ど、どうぞ」

「う、うん……」

薬草諸々を煎じて作られた特効薬を、ヘスティアはじつと見つめた後、一気に飲み干す。

途端、彼女のツインテールが高く飛び跳ね、次には波打ち出した。ベルとリリはぎょっとし、ミアハは苦笑を浮かべる。

うつむいて何かを耐えるように肩を震わしていたヘスティアは、顔を上げると、涙目になり

ながら、満面の笑みを浮かべた。

「ありがとう、ベル君。すごく元気になった。風邪なんて、吹き飛んだよ」

自分のための強がりだとはわかっていたが、それでも顔色を晴れ晴れとさせて喜んでくれるヘスティアの姿に——特効薬の成果に、ベルもくしゃっと破顔した。

「い〜ですね、ヘスティア様。リリはともかく、ベル様にもそんなお優しくされて」

「ふふん、ボクとベル君の絆はそれだけ深い、つてことさ。ま、語るのも億劫だから、女神の役得とも思っていてくれよ、サポーター君」

「はいはい。あ、ベル様、お約束通り今度の埋め合わせはどこへ行きますか、二人きりで」

「なにイッ?！」

睡眠も取ったおかげか、朝と比べればすっかり調子を取り戻しているヘスティアの姿に、ベルは安堵する。騒ぎ出すリリ達を尻目に笑いかけてくるミアハに、苦笑しながら頭を下げた。

「ヘスティアー、大丈夫？　お見舞いの品、持ってきたわよ」

「なによ、やっぱりびんびんしてるじゃない」

「ベル、来たよ……」

ナーザを先頭に、ポトルを持ったヘファイストストと、籠に詰めた果物を携えたデメテルが教会の隠し部屋に足を踏み入れる。ヘスティアは目を大きく見開いた。

「デメテル、ヘファイストス！　お見舞いって……どうして君達が?！」

「気まぐれよ、き・ま・ぐ・れ。……ま、あんたの眷族に感謝しなさい」

「ふふ、私達はベル君の特効薬のおまけよ。でも、そうねえ、せっかくみんな集まって賑やかなんだし……ちよつとパーティーでも開かない？」

「おおっ、いいね！」

「あんたは風邪つびきなんだから、大人しく寝ていなさいよ」

「ちよつ、へファイストス!？」

「ふはは、盛り上がってきたな」

女神達の輪にミアハも笑いながら加わり、神々に取り残された眷族達は顔を見せ合い、そしてすぐに笑い合った。彼等は率先して料理を始め、へファイストス持参の酒をグラスにそそぎ、デメテル自家栽培の果物を切り分ける。

食卓が華やかに彩られたところで、ベル達は各々の飲み物を持ち、眼前へと掲げた。

「それじゃあ、今日の立役者のベル君と、ボク達のこれから祝って——乾杯！」

ガチン！ と音を立て、神々と子供達は笑いながらグラスをぶつけ合った。

エピソード・ミアハ

「これも何かの縁だ、どうか受け取ってくれ」

その非常に整った顔立ちを優しく和らげ、ミアハは小さく微笑んだ。

眼前にいるヒューマンの少女は、顔をあつという間に紅潮させる。

「え、で、でもっ……」

「気にすることは無い。我が【ファミリア】の品を買ってくれた、その添物だ。私の好意でもある。——そして叶うなら、どうかまた私の店を訪れてやってくれ。そなたが来てくれれば、私も嬉しい」

一輪の青い添物を髪に差し、極上の笑みを畳みかけてくるミアハに、少女は肌という肌を真っ赤にさせ、その瞳を盛大に潤ませた。

「は、はいっ、絶対に行きます！ 絶対につ、男神様に会いに行きます！」

「うむ、頼んだぞ」

青い空の下、大通りの奥へ消えていく少女を最後まで見送ると、ミアハの背に声がかかる。

「ミアハ様の、外道……」

「むっ、ナーザ。主神を捕まえて外道とは何ごとだ」

【ミアハ・ファミリア】の路上販売。店を出て冒険者に商品の売り込みを行なっているミアハに対し、眷属である犬人の少女の視線は冷やかだつた。

「あの娘、絶対に勘違いした……ミアハ様は誰構わず女を口説く……」

「何を言っているのだ、お前は。今後の売買のためにも、ああいった好意の証明は重要なのだ。販売に限らず、他者との絆ほど尊いものはないぞ」

「……しかも、神のくせに鈍感」

どこか膨れっ面をする己の団員に、ミアハは軽く吐息し、やれやれとばかりに苦笑する。何もわかっていない主神にカチンとくるナーザだったが、不意に頭を優しく撫でられた。

「だが確かに、私も女心の機微には疎い。お前の言う通り、そこは認めよう」

「……やっぱり、鈍感」

もつと撫でて、とナーザは頬を染めてねだる。ぶんぶんと振られる尻尾に苦笑を深めながら、ミアハはたった一人の眷族の髪を愛撫した。

やがて夕暮れを迎え、いつものように、神と子とともに帰路につくのだつた。

「それにしても、未だ顧客と言えるのはベルだけか。冒険者達には、こうして何度も声をかけているのだが……」

「やって来る女は、私が全部追い払ってる……」

「なにっ」

汎用決戦セールスガール・アイズ

「こんにちは……ジャガ丸くん、ください」

北のメインストリート、ジャガ丸くんの露店。

目の前で淡々と話す金髪金眼の少女——アイズに、ヘステシアは苦々しい顔をする。

もう何度目の来店だ、と心の中でこぼす。と言うのも、以前、バイト中のヘステシアの前でベルとともに現れたアイズは、それから頻繁にこの露店へ訪れるようになったのだ。

「……いらつしやいませっ。ご注文はっ?」

「小豆クリーム味、一つ」

敵愾心も手伝って、少々ぞんざいな口振りで尋ねると、アイズは即座に答える。

くそっわかっているな、と玄人好みの注文に敵ながらあっぱれと評しつつ、ヘステシアは揚げたてのジャガ丸くんを手渡す。アイズは受け取った傍から小振りな唇を開き、ぱくぱくと食し始めた。美しくも可愛らしい彼女の様子に、周囲にいる男の輩、人達はつい視線を奪われている。なんか卑怯じゃないか、とヘステシアは小憎らしい思いを一つ。

「——ヘステシアちゃん、大変っ、大変だよ!」

と、悲鳴に近い声が耳に届く。見ると、今まで店を開けていたバイトの同僚が慌てた様子で

駆け込んでくるところだった。「どうしたんだい、おばちゃん?」と尋ねると——。

「それが東の方のお店が注文を聞き間違えて、余分なジャガ丸くんを沢山作っちゃったらしいんだよ! うちのお店でも千個売り上げなきゃ大赤字だって!」

「な、なんだって——っ!」

まくし立てられた衝撃的な無理難題に絶叫するのも東の間、大量のジャガ丸くんを積んだ荷車がドドドドと猛牛のように露店へと迫ってきていた。ヘステシアは数瞬時を止め、思考が弾ける音を聞いた後、小首を傾げているアイズの方を振り向いた。

「ヴァレン何某君、手伝うんだ!」

「……お買い上げ、ありがとうございます」

『ジャガ丸くん十個、いや二十個くれ!』こっちは五十だ! 『アイズたんがジャガ丸くんを手渡ししてくれる店はここか!』 『アイズたん、スマイルをくれ!』

露店に並ぶ長蛇の列。劍姫が売り子をしていると聞きつけてか、 輩、人だけでなく男神までもが都市中から押し寄せてきているようだった。

……この敗北感は何だ、と名を捨てて実を取ったヘステシアは、静かにうちひしがれた。

「やるじゃないか、あの娘! こうなったらうちのお店で雇おうかねえ!」

「止めてくれえ、おばちゃん!」

祝賀会の裏側にて

「……調子のいい話ですが、リリは心を入れ替えました。どうかよろしくお願いします」
空が茜色に滲み出す夕刻、目の前のシルとリユーに向かつて、リリはべこりと頭を下げた。
ベルの昇格祝いにお呼ばれした彼女は今『豊穰の女主人』にいる。当のベル本人はまだ
到着しておらず、店内で彼を待っている状態だ。

シル達を前にすると以前の盗人騒ぎの際こらしめられた悪夢が蘇るが、己を救ってくれたベルとの仲を認めてもらうためにも、リリはありのままの心情を吐露していた。

「つまりリリさんは、ベルさんの愛のおかげで改心されたと、そういうことですね？」

「ま、まあ、そうですね……」

にこにこと笑うシルのその言いように、赤らんでしまうリリ。

両手を合わせ「素敵です」と微笑むシルは、その後、続け様にさらりと言った。

「ベルさんも喜んでいました。妹ができたみたいで嬉しい、って」

——くはっ!? とリリは体をくの字に折った。シルは依然ニコニコと笑っている。

牽制、どこるか右ストレートを放ってきたシルに、リリは戦慄の眼差しを送る。

やはり前歴が前歴なのでそう簡単に信用してもらえないらしいが——虫も殺せないような

顔をしてこの街娘、なんて鋭い一撃を……!

「ふ、ふふっ……シル様が毎日お作りになられている昼食も、ベル様はお喜びになってますよ? 泣くほど美味しいのか、いつも震えながら一生懸命食べています」

——シルの上半身が、アップパーカットを食らったように仰け反る。

負けず嫌いなリリの反撃に、「くふっ」という可愛らしい呻き声が散った。

「シルツ、いけません、気を確かにっ。……アーデさん、あまり苛めないであげてください。常人では作れないあんな珍味な料理でも、度重なる失敗を積んだ上での、シルの努力の結晶なのです」

——視界外からの容赦ない左フックが、シルのこめかみに炸裂した。

体が横にぶれた良質街娘は既にダウン寸前だ。えげつない、と自覚なき必殺をお見舞いしたリユーに、リリは遠くを見るような眼差しを送った。

「今夜はクラネルさんの功績を祝う席です。無益な争いは止めにしましょう」

「う、うん……」

「……そうですね」

ふらつくシルがかるうじて頷き、リリも神秘的な顔で返事をした。リユーは二人に礼を告げる。ベルが酒場に訪れるまでの間、リリは同情心を挟んで、シル達と親睦を深めるのだった。

白兔の忠誠

今更だが、ベルはヘステイアのことを敬愛している。

心優しい主神が命ずることはないだろうが、もし彼女があれが欲しいこれが欲しいと望むなら彼は速やかに使い走りに出るだろうし、家計が苦しいと言われればただちにダンジョンへもぐりお金を稼いでくるだろう。

家族としての絆は勿論のこと、ベルは、ヘステイアに忠誠を誓っているのだ。

「べ、ベルくんっ、カミングアウトするが、ボクは抱き枕がないと実は安眠できないんだ！」
なので、いきなり突拍子のないことを告げられても、彼は真摯に主神の言葉に耳を貸す。

「だ、抱き枕ですか？」

「ああ、天界にいる時は欠かせなくてねっ、今までは我慢していたけど、もう辛抱たまらな
い！ そう、ちょうどヒューマンくらの抱き心地の抱き枕が、今のボクには必要なんだ！」
恥ずかしいのか、頬を赤くしながら打ち明けてくる——というか豊みかけてくるヘステイ
アに、ベルは一瞬考え込む。自身が【ランクアップ】して最近は生活費にも余裕が出てきたが、
これまでは【ファミリア】のためを思っ、ヘステイアは僅かな贅沢も耐えていた筈だ。

主神がようやく口にした願望、顔を真っ赤にしてまで勇気を振り絞ったその願いを、叶えて

あげたいとベルは真心から思う。それが例えよくわからないこだわりの望みであっても。

今も期待の眼差しを向けてくるヘステイアを、ベルは裏切れない。

敬愛する主神が望むというのなら、彼は体だつて張る。

ヘステイアのために、ベルは覚悟を決めながら、一肌脱ぐことにした。

「……で、説明頂けますか、ヘステイア様」

「……」

魔石灯が消え、暗く静まり返った部屋の中、幼い声が響く。

ベッドに入り込んだヘステイアの隣、傍迷惑そうな声を出すのはリリだった。魔法で
ヒューマンに変身しており、まさに女神が望んだ抱き枕にびつたりの存在と化している。

夜遅くに訪ねてきたベルに土下座をされた彼女は、ヘステイアの待つベッドに召喚されてい
た。ベル本人はというと、定位置であるソファーの上で既にぐーすかと眠りかけている。

ヘステイアはリリと二人、仰向けになりながら、黙って天井を見上げ続ける。

「ベル君のあほ……」

翌朝、ソファーに侵入していた幼女二人に、眷族の少年は悲鳴を木霊させるのだった。

ブルートワイライト

「言うの遅れちゃったけど、Lv.2到達おめでとう、ベル……」

購入する商品を吟味していると、ナーザさんにそんなことを言われた。

えっ？ と視線を上げた僕は、すぐ目の前にいる彼女の顔を見つめる。

【ミアハ・ファミリア】の本拠、『青の薬舗』。ミアハ様とナーザさんのホームであると同時に商品を販売するお店でもあるこの建物に、僕は足を運んでいた。今日のダンジョン探索用の道具を揃えるためだ。

今、カウンターのの上に置かれている木箱の中には、数ある商品……様々な形状の試験管に注入された色取りどりの回復薬が並んでいる。

「本当に、あつという間だったね、『ランクアップ』するの……気付いたらLv.2になって、すごく驚いたよ……うん、すごくすごい」

僕とカウンターを挟んで向き合っているナーザさんはそう言って、僕の頭に手を伸ばしてきた。こちらが赤面するのもお構いなしに、柔らかな手つきで撫でてくる。

うるたえる僕は、依然赤いまま「ど、どうも……」と返すことしかできなかった。

「ベルが有名になって私も鼻が高い……だから、はい、これ」

「え……こ、これって？」

「道具の詰め合わせ……お金は要らないから、もらって」

ひよい、ひよい、と木箱から何本もの試験管を取り出し、ナーザさんはそれを差し出してくる。目を剥いて慌てた僕が受け取れないと、そう言い返す前に、犬人の彼女は腰から伸びる尻尾を器用に回し、ニヤリと笑った。

「ベル、勘違いしないでほしい。これは投資」

「と、投資？」

「そう。上級冒険者が私達の商品を使ってくれば、お店への客足が増えるかもしれない……つまり、宣伝」

上級冒険者——【ランクアップ】を経た冒険者は、その実力や評判も相まって周囲の注目を集めやすい。成り立てとは言え、『第三級冒険者』に相当するLv.2へ到達した僕に、ナーザさんは自分達のためにも広告塔代わりになってほしいと、つまりはそう依頼しているらしい。

暇が半分下りた瞳で不敵な笑みを浮かべる彼女に、僕はしばらく固まった後、思わず苦笑を浮かべてしまった。

「私からも頼もう。もらってくれ、ベル」

「ミアハ様……」

「突然のことで祝ってやることもできなかったからな。今の話の後ではあまり誉められたもの

ではないかもしれないが……祝いの品として、どうか受け取ってほしい」

店内に並ぶ戸棚を整理していたミアハ様が、僕達の方を見てそうおっしゃった。優しいな神様の眼差しが向けられる。

「そこまで言われてしまうと、断る方が逆に申し訳なくなってしまう。僕はどっさりなんて音が聞こえてきそうな山ほどの道具を抱え、「ありがとっございませす」と頭を下げた。

ミアハ様達に見送られ、お店を後にする。

「えーっと、回復薬に解毒薬……うわっ、高等回復薬まで……」

道を歩く傍ら、受け取った道具を確認しては整理し、優先性の高いものを——ダンジョン内でもすぐ取り出せるよう——左腿に装着したレッグホルスターへと挿入していく。すぐにホルスター内は埋まり、残った道具はリリに預けるための予備の鞆にしまい込んだ。

(ちよっと前じゃあ、考えられなかったなあ……)

武器を購入しようとした時にも思っただけ……冒険者になったばかりの頃とは比べものにならない道具の充実具合に、どうにも現実感がないように感じられてしまう。

恵まれてるっていうこの状況は、喜ばしいことこの上ない筈なんだけど……うーん。

自分自身でも今の感情を上手く言い表すことができないまま、何となく頬を指でかいた後、僕はリリ達が待つダンジョンへと歩んでいった。



僕にサポーターのリリ、そして鍛冶師のヴェルフ。

つい先日結成されたばかりの三人組のパーティは、予想よりすんなりと11階層を踏破してしまい、今では『上層』における最深部のフロア、12階層へと足を伸ばしていた。

前衛として活躍するヴェルフの加入は大きく、実質サポーター付きのソロであった僕の負担を軽減し、危うげなく進む階層攻略の一端を担っている(と、言うのは全てリリの談だ)。

今日も無事12階層の探索を終え、僕達は地下迷宮の上にそびえる摩天楼施設へと帰還した。

「それでは、今日の探索の取り分です」

バベルに設けられた換金所で『魔石』や『ドロップアイテム』を売ってお金に換えた後、恒例となっている報酬の分配を行う。簡易食堂に点在するテーブルの一つを占拠して、リリを中心に配分を進めていった。

「本日の換金額は占めて七二〇〇〇ヴァリス……ベル様は三六〇〇〇ヴァリス、ヴェルフ様は一八〇〇〇ヴァリスになります。どうかお取めください」

「おう」

「……あ、あのさあ、やっぱりこの分け方、止めない？ 僕だけ不公平なことになっちゃってるし……」

配分の内容は、僕の取り分が総額の内の半分、そしてリリとヴェルフの分はその更に半分……つまり四分の一ずつということになっている。僕にかかっている負担が一番大きいからっていう理由らしいんだけど……ちょっとなあ、後ろめたいとか何というか。やっぱ三人で三分割の方が、という僕の提案は、けれどあっさりとか却下されてしまった。「今のままでベル様には足りないくらいです。むしろ、サポーターなのにリリがもらい過ぎています」

「まあ、上級冒険者に金を払うんだしな。俺達と似たようなパーティがあつたら、他の隊員と同じ扱いにはまじしない筈だ」

山分けは妥当じゃない、とそう論されてしまつた。

迷宮探索やパーティの決まりごとはまだ疎い僕は、上手く説得するような真似もできず、

「……」

いいからもらっておけ、と笑うヴェルフ達に、金貨の話まつた袋を手渡されてしまった。

「え、等級の変更ですか？」

「うん。【ヘステシア・ファミリア】の等級はIからHに正式に格上げ。おめでと〜」

夕焼けに染まつたギルド本部。

リリやヴェルフとバベルで別れ、エイナさんのもとに訪れた僕は、窓口越しにその決定を伝

えられた。

「えっと、でもヘステシア様の【ファミリア】は、まだ僕しか団員はいないんですけど……」

「うーん、それはそうなんだけどね……ベル君、【ランクアップ】しちゃったし」

ギルドが定める【ファミリア】の等級は、そのまま派閥の戦力や組織力に直結する。恩恵と同じくSを最上位とした十段階の評価は、上に行けば行くほど【ファミリア】としての地位と、そして実績を認められることになる……らしい。

例え派閥の構成員が僅か一名だけであっても、下級冒険者ならいざ知らず、上級冒険者を保有する【ファミリア】をいつまでも底辺に位置付けるわけにもいかないのだと、エイナさんは眉を下げた笑みで説明してくれた。

「それで、はい、これ。等級上昇の通達書。徴税の額が変わっているから、神ヘステシアにもちゃんと渡してね？」

差し出される羊皮紙でできた巻物を広げると、そこには確かに、ギルドへ収める税金の上昇など諸項目が明記されている。並んでいる数字を見て、うっ、と僕は思わず呻いてしまった。

エイナさんはそんな僕を見て苦笑する。

「……ええっと、それじゃあ、失礼します」

「うん。またね、ベル君」

軽く会釈して、手を振る彼女に僕は背を向けた。

(月の終わりに、こんなに払うんだ……)

エイナさんに別れを告げギルド本部を出た僕は、『冒険者通り』とも呼ばれる北西のメインストリートを歩んでいく。大小様々な得物えものを持った多くの同業者達とすれ違いながら、手の中の巻物に視線を落とした。

リリ達との報酬の分配の時もちらりと思っただけれど、得るにしても払うにしても、扱ってお金の額びょうぐんが随分と大きくなってきている。少し、身震いするような感覚を味わってしまうほど。(なんだろう……何だか……)

……その先の言葉は、上手く形にできなかった。

自分でもよくわからない感情をまた持てあましながら、誤魔化ごまかすように首筋を手で撫でる。巻物を腰きょうやくの巾着袋きんちやくぶくろに押し込んで、影が伸びる茜色の大通りに歩を重ねた。

「……久しぶりに、武器の整備、頼みに行こうかな」

気を取り直すように呟いて、うん、それがいい、と心の中で頷く。

その場で止まって半回転、目的地の方角につま先を向ける。

うつむきがちだった顔に軽く笑みを浮かべ、僕はやや強引に、足取りを軽くさせた。ちよつと色々あったし、気分転換でもしよう！

「——おい、あまり調子乗るんじゃねえぞ」

……気分転換でも、するつもりだったんだけど。

そのどすの利いた声に、僕の肩かたは怯える小動物のように震えた。

メインストリートを一つ折れた路地裏の一角。薄暗い小径しょうけいは人氣ひとけが異常に少なく、今この場を通りかかる人は皆無みなだ。

薄汚れた壁を背にしている僕は、取り囲まれていた。

僕なんかより身長も体格も優れた、ヒューマンと獣人の冒険者達けんのん。剣呑な雰囲気まじを纏い鋭い視線も突き刺してくる複数人の彼等に、僕は浮かべている不細工ぶさいくな笑みを引きつらせる。

突然だった。大通りを歩いている際に声をかけられたかと思えば、強引にこの場所まで連れ込まれ、今のような状況に陥ってしまっている。

い、一体、何が……？

「てめえみてえな糞ガキが『ミノタウロス』を殺やつただと？ バカ抜かしやがって」

「大方話をでっち上げたんだろがな、名を挙げようっていう腹が見え見えなんだよ」
そんなにチャホヤされてえのか、と唾棄だきするように冒険者の一人は吐き捨てた。

——つい先日、神様がおっしゃられた言葉が頭の中で蘇る。『今流れている君の榮譽うわぎを面白くないと思う子は少なからずいるだろうから、気を付けるんだぜ？』という、その警告ことばが。

これは、つまり、まさに……そういう場面なのだろうか。
相手方の空気に呑み込まれてしまっている僕は、情けないことにすっかり畏縮いじゆしてしまい、

間拔けな顔を晒しながら、彼等の強面を仰ぐことしかできなかった。

「こちら何年もあの陰気臭え迷宮にもぐって、汗水垂らしてんだよ、いつか一発当てようってな。それを駆け出しのガキが、世界最速鬼だあ？ ……コケにしゃがって」

ミノタウロスを倒したのも、【ランクアップ】したことも、その名声も全て偽りだと、冒険者達は静かな怒気とともに言い放った。

呆然と目を見開くことしかできなかった僕に、彼等は更に苛立ったのか、いよいよ掴みかかろうと手を伸ばし——その指先が触れる寸前、一つの影が間に割って入った。

「俺の仲間、何か用か？」

「……ヴェ、ヴェルフ」

いつの間にもこの場へやって来たのか、黒い着流しを揺らし乱入してきたヴェルフは、眉を逆立て冒険者達と対峙する。迫力なんか乏しい僕とは違い、凄みを利かせてくる大刀装備の鍛冶師に、彼等は一瞬気圧された。

「なっ、何だてめえはっ!？」

「もういい、こいつごとやるぞ！」

すぐに威勢を取り戻した彼等は、僕を背にするヴェルフごと袋叩きにしようと包圍網を狭め、それぞれの武器を抜く。

「止めておいた方がいい」

薄暗い路地裏に響いたのは、芯のこもった幼い声だった。

襲いかかろうとしていた冒険者達も、迎え撃とうとしていたヴェルフも、そして僕も一斉にそちらへ振り返り、次の瞬間、息を呑んでしまふ。

通路の奥から現れるのは黄金色の髪に湖面のような澄んだ碧眼、そして小人族だと悟らせる低い身の丈。その人物は、迷宮都市に身を置く者なら誰もが知る、第一級冒険者の一人。

「フィン・デイルムナ!？」

都市最強派閥とも噂される、あの【ロキ・ファミリア】の首領だ。

「ロ、【ロキ・ファミリア】は、今は『遠征』に出てる筈じゃあ……」

冒険者の一人が喘ぐようにそれだけこぼす。周囲の仲間も一斉に怯み出し、僕とヴェルフだつて瞠目していることしかできない。その小人族だけが表情を変えず言葉が続ける。

「君達が彼に束になつてかかっても、痛い目に合うだけだ。——それに、少なくとも、知人を襲われて黙っていられるほど、僕も薄情じゃない」

知り合ひだったのか、というヴェルフの視線の問いかけに、僕はぶんぶん顔を振った。

淡々と警告を告げる第一級冒険者に、男達は引きつった顔を見合わせ、一人、また一人とその場を去り始めた。

複数の足音が遠のき、夕暮れの静けさが路地裏に訪れる。

僕等が未だ呆然としてっていると、小人族の冒険者は、にこつと、見覚えのある笑みを浮かべた。

「響く十二時のお告げ」

あ、と僕が呟く中、相手の全身を灰色の光膜が包み込み、すぐに光は音もなく溶ける。次にそこに立っていたのは、微笑を浮かべるリリだった。

「リリスケ!? お、お前だったのか……」

「ふふっ、変身魔法、というやつです。他の方にはばらさないでくださいね」

「シンダー・エラ」。他人に成りすますことのできるリリの固有魔法だ。

冒険者達の目もすっかり欺いてしまったその変身に、ヴェルフともども僕は驚嘆する。

「リ、リリ。フィン……ディムナさんと、面識あったの?」

「まさか。全世界の小人族の期待を背負う一族の英雄に、リリなんかがお近付きになることはできません」

外見だけでなく雰囲気や口調なども真似ないと人も欺けない筈だ。あんな有名な人と触れ合う機会があったのかという僕の問いに、リリは「ただベル様の勇姿を一緒に見守った程度の仲です」と笑ってみせる。

「それより、ベル様? 気を付けてください。ああいったやつかみはこれからも向けられる筈です。もっと毅然とした態度でいてもらわないと」

「今回はたまたま見つけてやれたが、俺もリリスケも、次は手を貸せるかわからないぞ」

「ふ、ごめん……」

しっかりと注意されてしまった後、僕達は今度こそ別れた。去っていくリリとヴェルフの後ろ姿が消えても、その場で突っ立っていた僕は、時間をかけてようやく歩み出す。

記憶にある道を辿り、路地にはつんとたたずむ、古ぼけた小さな店に入った。

「いらっしやい……と、おお、ベル坊。久々じゃな」

「すいません、しばらく顔を見せなくて。今、大丈夫ですか?」

大通りの裏道にある『雛鳥の鉄床』店主、ドワーフのダルドさんに迎え入れられる。作業衣の上にエプロンを着た彼は読んでいた本をカウンターに置き、快く僕を店内に通してくれた。『雛鳥の鉄床』は迷宮で摩耗した武具を整備してくれるお店だ。冒険者になったばかりの頃、かかる費用など駆け出しにも優しい整備屋として、エイナさんに紹介してもらったのだ。

「この短刀の整備、お願いしてもいいですか?」

「問題ないぞ。……ほほう、えらく上等な得物を持つようになったの。出世したもんじゃ」

「は、は……」

思うようにお金が溜まらなかつた最初の頃は、整備費を払い切れずよくツケにしておらつていた。当時の情けない僕のことを知るダルドさんは、ヴェルフが作製してくれた《生若丸》を見て、からかうような笑みを作ってくる。

僕が恥ずかしがる中、彼は奥の作業場に移り、砥石などを使って短刀の整備を始めた。

「最近顔を出さなくなつたな。信頼できる鍛冶師でも見つけたか?」

「す、すいません……その、はい、ある鍛冶師の方と、直接契約を……」
 「フオフォツ、気にするな。ここはひよっこもが来る店だ。名が売れるようになったら、別のところに行けばいい……お前さんも卒業じゃ」

直接契約を結んだヴェルフは、武器の整備も担ってくれている。自然とこのお店には足が遠のいてしまった。そのことに僕が恐縮していると、ダルドさんはあつけらんかと笑う。無所属である自分のこの店は、冒険者の新米が訪れる場所なのだからだと。

「のう、ベル坊。もしよかったら、要らなくなったお前さんの武器を買い取らせてくれんか？」
 「はい？」

何でも、この店を巣立っていく有望そうな冒険者の武器をダルドさんはよく買い取るらしい。その武器を店に飾っておけば、「上級冒険者御用達だった店、ということでも少しは客足に繋がるもんじゃ」とのこと。何だかどこもやることは似てるなあ、とナーザーさんを思い出しながら苦笑しつつ、僕はちよつど使わなくなった《短刀》を、代金は頂かず譲った。

整備を終えたダルドさんは嬉しそうな顔で受け取り、僕を奥の部屋へと案内する。

「わあ……！」

石材で造られた部屋の、西側に当たる壁面、そこには沢山の武器が飾られていた。

ナイフや片手剣、短槍、ハンドアックス。様々な種類の武器がまるで絵画のように赤い額縁に収められており、壁の一面を埋めつくしている。目を奪われている僕の隣で、空の額縁

を運んできたダルドさんは《短刀》を入れて、壁の一角にそれをかける。

【ベル・クラネル】とサインが刻まれ、数ある武器の一つとしてこの場に飾られることが、途端に誇らしくなった。

「こんな沢山、ダルドさんのお店に通っていた上級冒険者がいるんですね……」

胸をぐつと詰まらせながら、興奮気味にそう口にする——ダルドさんはぼつりと呟いた。

「もう、おらん」

「——えっ？」

「冒険者は、簡単に逝ってしまふからな。ここに飾られてある武器の持ち主達は、ほとんどがくたばっちまった。十人、残っておるかどうか……」

僕が言葉を追うすぐ横で、ダルドさんは遠くを見るように瞳を細め、その武器達を仰ぐ。

「……ベル坊、死ぬなよ。ああ、くたばるな。お前さんが今よりもっと名を馳せた後も、あの冒険者の世話をしやったのは僕なんだと……ずっと自慢させてくれ」

僕の顔を見上げるダルドさんは、蓄えられた髭を揺らし、皺を一杯作って、笑った。

夕暮れの光が部屋に差し込む中、僕は小さな声で——はい、と、そう答えた。



西日は市壁の奥に既に沈んで、残照が空の一部を赤く染める。夜が迫る中、僕はホームへと続く街路を一人歩いていった。蒼い宵闇が辺りを包み出し、道に沿って立つ魔石街灯はうっすらと発光し始めている。

静かに歩を連れ、口を閉ざし、視界の奥で僅かに残る夕陽の光に目を眇める。

「おーいつ、ベルくん！」

「……神様？」

背後からの声に振り返れば、こちらを追いかけてくる神様がいた。二つに結わえられた漆黒の髪を揺らし、笑みを浮かべて駆け寄ってくる。

「いや、今日のバイトも疲れたよ。でもベル君と帰りが一緒なんてついて……」

機嫌良く喋っていた神様は、そこで気付いたように、僕の顔をじっと見つめてきた。

「何かあったのかい？」

「え……」

「元氣、なさそうな顔してるよ。今の君は、何だか迷子みたいだ」

胸に抱える感情は顔に出していないつもりだったのに、神様はあっさりと見抜いてきた。

僕は咄嗟にそんなことないと言おうとして、開きかけていた唇を、閉じる。

こちらを見上げてくる、青みのかかった神様の瞳に、告白するように話し始めた。

「上手く、言えないんですけど……周りで色々なことが変わってきて……怖い、っていうか」

ほんの少しの、それこそ憧憬の足もとにも及ばない僅かな名声を得て、世界が変わったような気がする。少なくとも自分を取り巻く周囲は、変わった。それに酷く戸惑う。

それは物だったり、お金だったり、他人からの反応だったり。

僕は何も変わっていない、その筈なのに、周囲の景色が色を変えて、急激に移ろっている。

「駆け足で、ここまで来ちゃって……今更ですけど、不安になってるんだと、思います」

またまらない感情の欠片を集めて、口ごもりながら、そう言った。

これまで必死に走ってきて、ふと今になって足を止めてみると、振り返った背後に続いている長い自身の軌跡に、啞然とするような。

歩き始めた場所が一体どこなのかもう見えないくらい、自分は遠い場所に来てしまったのではないかと。

この都市に来てまだ二ヶ月。祖父を失ってもう一年。

ダルドさんの店で触れた冒険者の末路という現実が、未来の不安に繋がり、郷愁にも似た感情を引き起こす。

環境の変化に、明日に対するちよびりの怖さ、そして懐郷にも通じるもの寂しさ。

全部が全部合わさって、情緒が少し、不安定になってしまっている。

「……すみません、こんなことで悩んで……情けなくて」

胸中を吐露した僕は、目の前にいる神様に謝った。

剣姫親衛隊 〈飴と鞭〉

「白髪野郎がアイズさんの水浴びを覗きやがっただとおおおおおとおおとおおとおお!?」
 「あ・の・クソガキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイツッ!!」

18階層、【ロキ・ファミリア】野営地では暴動が起きようとしていた。アイズ達の水浴びをベルが覗いたという情報を、【ロキ・ファミリア】の団員達が聞き付け爆発したのである。

男女問わず、【剣姫】親衛隊とでも言うべき彼等は怒りの咆哮を上げていた。

「許せない、許せない、許せない!! アイズさんの清く美しい裸身を覗き見るなんてっ——私の魔法であの男を塵一つ残さず消滅させますッツ!!」

「お前等アー!! レフィーヤを止めろおおおおお——ッ?」

立ちつくすアイズの目の前に広がる地獄絵図。普段ならば寝静まるうかという「夜」の時間帯、薄暗い野営地で様々な亜人達が抜剣し、得物を振り上げ、アイズが見たことのない獣のような形相で鯨波を起こしている。山吹色の魔法円を展開し女神達もろともベルがいる天幕を吹き飛ばそうとする魔導士の少女など理性を失っており、他の団員達に取り押さえられた。

「アイズさ——んッ、罪人を連れてきましたア! やっちゃってください!!」

そして、ぎよっつ、とするアイズの前に、暴走した信徒達がベルを引っ張り出してくる。

既に少年はアイズを含めた女性陣の前で、出血するほど地面に額を振り下ろし土下座を行なっている、団員達はこれ以上の血を望むというのだろうか。憔悴しているベルはというと、既に観念しているのか、むしろ望んでいるのか、断罪を受け入れようとしていた。

「斬撃、斬撃、斬撃!!」

二人を取り囲み円になる暴徒達。この場にはいないティオナ達の助けは期待できない。

死刑を唱和する彼等の大声に、アイズが汗をタラタラと胸中で流していると——閃いた。フィン達が幼い自分を叱る際にやっていた、あの、「飴と鞭」だ。ベルに体罰を与え、かつ必要以上に傷付けなくて済む。アイズは意を決して右手を振りかぶった。

「おおっ!?!」と沸く暴徒達。剣姫の張手である、兎など即死間違いなした。

ぎゅっつと臉を閉ざす少年の頬を、アイズも両目を瞑って、「えいっ」と叩く。
 ぺしんっ、と可愛らしい音が鳴った。

ぽかんとするベルに、鞭を放ったアイズは、仕上げとばかりに素早く飴を差し出す。

「もう、あんなことしちゃ、ダメだよ?」

「あ……はい、ごめんなさい……」

白髪を撫でるアイズ。頭を梳かれるベルは、真っ赤になりながら頷いた。

「……」——ただの御褒美じゃないですかあああああああああああああつ?!」」」」」」
 血の涙を流す親衛隊の暴動は、ついで防ぐことはできなかった。

女神様ご乱心

「ベル君、座るんだ」

「はい……」

ちよいちよい、と正座するヘステティアに命じられ、同じく真正面で正座をするベル。

既に『夜』の時間帯。場所は18階層、【ロキ・ファミリア】野宮地だ。

「女の子の水浴びを覗く……これは彼の有名な純潔神が定める大罪に等しいんだぜ？」

「はいっ……」

「もし主神がボクじゃなかったら、今頃君は派閥を追われて矢を射られていただろう」

「すいませんでしたっ……!」

周囲を行き交う者達に眺められながら行われているのは、説教だった。女神達の水浴びを覗いた一件について、重々しい顔付きの主神に厳しい声で諭されているのである。

ベルは言い訳をしようとはしなかった。既に体罰を加えられた男神が全ての元凶だったとはいえ、覗いたものは覗いたのだ、男らしく女神の非難を甘んずる。というか、むしろ言い訳しようものなら更なる責め苦に苛まれる自信がある。

「ボクは悲しいよ、ベル君。自分の眷族が覗きだなんて……ああ、とてもとても悲しい」

これは、地味に、キツイ。

悲しみと失望をない交ぜにした訴えに胸を抉られ、ベルは頬を不細工に擦撃させる。

「悲しくて、悲しくて……悔しくてっ。君は一度だってボクの入浴を見ようだなんてしなかったくせに、今回に限ってっ——くそッッ!」

「!?!」

ヘステティアが、吠えた。

「そんなにヴァレン何某の体が見たかったのか、ええ!?! 幼女神なんて覗き見るに値しないだっぺ!?!」

「神様なにを言っているんですか!?!」

「ええいつ、うるさい! 罰として君は今日から一週間、ボクと背中流しっこするんだア!!」

「リ、リリーツ、ヴェルフ!?! 言動がおかしくなるくらい神様に高熱がーっ!?!」

「こらあーっ! 話の途中だぞっ、ボクだけを見ろおとおおおとおおおとおおおとおお!!」

「ちょ、うああああああああああああああああああああっ!?!」

「おい、【リトル・ルーキー】がヘステティア様に押し倒されたぞ」

「どうせリリスケ迎いが助けるだろ」

桜花とヴェルフの視線の先、予告通りリリが乱心の女神から少年を救出するのだった。

とある酒場の後日談

18階層から帰還し、一夜。ベル達を救出し、リユーは『豊穡の女主人』に戻っていた。
 「帰ってきて早々仕事なんて、リユーもついてないね」

「いえ、ルノア。これが本来の私の仕事です、疎かにするわけにはいかない」

「リユーは本当に生真面目ニヤア……あ、でもリユーが出てった後、母ちゃんの機嫌が悪くニヤったから、しばらく近付かない方がいいニヤア？」

早朝、店の準備を進めながらルノアとアーニヤに話しかけられる中、後で女将のミアにも直接謝らなければ、とリユーは思った。ルノア達にも迷惑をかけたことだろう。

帰還した後、リユーはベル達の生還をいの一歩にシルへ報告した。涙ながら彼女が喜んでくれただけでも、僅かな恩返しとともに、自分のちっぽけな行いは報われたような気がした。

「——で、リユーは少年と何か進展があったかニヤア？」

にゅおつ、という謎の登場音を経て、にやついたクロエが突如として出現する。

「進展、とは？」

「しらばつくれるニヤ、しらばつくれるニヤ。いくら堅物のリユーでも状況が状況ニヤ、助けにいった少年が弱っている姿を見て、自分が何とかしなくては……間違いが起きたに違

ないニヤ？ 例えは人工呼吸……ニヤんだつたら人肌で温めるのもありニヤ？」

べし、べし、と尻尾で器用にリユーの腰を叩いてくる。猫人の少女。呆れ返るルノア達の視線の先で、クロエは神々と比べても遜色のない下品な笑みを深め——次には、言った。

「全裸の一つや二つ、少年に見られてしまったニヤア？」

「——何故それを!?」

勢いよく振り向くリユー。凶星とばかりに頬を赤く染める、その彼女の姿に。

ルノアもアーニヤも、そしてクロエも、ぽかんと口を半開きにする。

「あ、あれ……本当に大当だったニヤア？」

首を傾げ空笑いするクロエに、はっ、とリユーは己が墓穴を掘ったことを悟る。

そして——「ひっ!?」とルノア達がある方向を見て悲鳴を上げた。

「へえ……ベルさん、リユーの裸、見たんだ？」

にこにこ笑みを浮かべるシルが、恒例であるベルの昼食を持って、厨房から現れていた。その笑みの圧迫感にリユーが凍りついていると、やがて同僚がベルの来訪を伝えるにくる。

「はあーい。ベルさん、ちょっとお話があるんですけどー？」

「——駄目だ、シルッ！ 早まってはいけない!?」

リユーは必死に少女の後を追ひ、事情を説明しようとしたが。

一足遅く、ギャア、という少年の絶叫が轟いた。

特訓の裏側で

「ご飯っ、ご飯っ〜」

赤い焚き火の光、グツグツと音を立てる大きな鍋、そしてティオナさんの嬉しそうな声音。

木製の玉杓子で鍋をかき混ぜていた彼女は「はいっ、アルゴノット君！ アイズも！」とお肉を器によそってくれる。「ど、どうも」ありがとっ、ティオナ」と僕は礼を言った。

都市の市壁の上。戦争ゲームに向けての本日の鍛錬を終えた僕は、星空の下で夜食を取っている。鍋で煮込まれているのはぶつ切りにされた肉と魚に、少量の野菜。都市へ下りて食材を調達してきたティオナさんお手製の豪快な女戦士料理は、中々どうして美味しい。旨みが溢れ出る熟々のお肉と、温かな煮汁は、ボロボロに傷ついた全身へ染み入っていくようだった。

「今日はもう、特訓終わりだね。体洗って早く寝よう！ 明日も早いんでしょ、アイズ？」

「うん、時間がないから……」

この巨大市壁の内部には、何とシャワーを始めとした生活空間が存在する。人が住んでいる形跡がある隠し部屋は以前誰かが——それこそ教会の隠し部屋を本拠にした僕達のように——内緒で暮らしていたのかもしれない。アイズさん曰く、「秘密基地」だそうだ。

「じゃ、じゃあ、僕……あっちの方で寝ますね」

料理を綺麗に食べつくし、代わり番こに身を洗った後、僕はそう切り出した。修業中とは言えこんな美少女達と昼夜をともにするのは、やっぱり恥ずかしい。もうとつくに日付は変わり数時間後には鍛錬が再開される、体を休めるためにもそそくさと市壁の隅へ向かおうとした。

「駄目！だめー！」

が、白い手と褐色の手に左右の腕を掴まれる。「えっ!？」と僕が振り向くと、笑うティオナさんの隣で、アイズさんが真面目な表情で口を開いた。

「一緒に寝よう」

二人の温もりを側で感じながら寝静まる。勿論一睡もできていなかったけれど、瞼を閉じていた僕は——前触れなく投擲された白刃を知覚し、その場から全力で転がった。

奇襲を回避した僕に、片目を開けたアイズさんとティオナさんは満足そうに頷く。

寝込みを襲われないようにするための……これも、訓練らしい。

「でもさあアイズ、これ迷宮用の訓練じゃない？ 戦争ゲームじゃ寝込みの心配要らないよ」

「……！」

不穏な会話が交わされる中、僕は不安に襲われた。

色々な意味で大変だとはわかってはいたけれど……本当に持つるうか。身も心も。

（僕、大丈夫かな……）

また、特訓が始まって一日目のことだった。

生まれゆく魔剣へ

鎚を何度も振り下ろしていく。

返ってくるのは高い金属の叫び声だった。鎚を叩きつける度に声音は全て違って聞こえる。鉄の語りかけに耳を貸し、鎚を振るようになったのはいつだったのだろうか。長剣の形状を描きつつある金属塊を見つめ、ヴェルフはひたすら鍛錬の作業に勤しんでいく。

自派 閨の中であてがわれた工房。路地裏に建つ自分だけの鍛冶場はヴェルフの静かな戦場となっている。闇が落ちた真夜中、不眠不休で武器の作製が行われていた。

戦争遊戯の戦いは既に始まっていた。ベルを守るため、ベル達を勝利に導くため、鍛冶師のヴェルフは誰よりも早く武器の作製に取りかかった。工房の隅には作製済みだった牛若丸式、そして短期間で作り上げてみせた高性能の兎鎧——相棒の武器一式が置かれている。現在取りかかっているのは女神から依頼されていた品、そしてヴェルフ自身も打つことを決めていた魔の剣である。

手拭いを巻いた頭から大量の汗が滴り落ちていく。燃え滾る炉から発せれる熱気は殺人的だった。鎚と金属の間から舞い散る火花は、黒の着流しに当たっては消え、あるいは首筋を始めとした肌を火傷させる。鍛錬に臨むヴェルフの形相はどんなモンスターと戦う時よりも、どんな相手と対峙するよりも、鋭く激しい。

——許せとはもう言わねえ。俺の仲間を助ける。

絶大無比の『クロッヅの魔剣』を作り上げながら、ヴェルフは心中で念じた。

工房の中で炉の光以外にも舞う僅かな輝き。鉄床の上の金属塊に美しい光粒が渦を巻くように吸い込まれていく。魔剣血統が発動している時はいつもこうだ。まるでヴェルフの血に誘われるように、ヴェルフを慕うように、何もない空中から光の精は握り締めた鎚を取り巻いて、打ちつける金属へ宿っていく。『鍛冶』のアビリティを習得した今、ヴェルフの手にはうつつらとした赤い光幕に縁取られていた。

やがて鍛錬は終わった。鎚の旋律は途絶え、仕上げを済ませた一振りの長剣がヴェルフの目の前で光沢を放つ。

「お前は……『紫雷姫』だ」

『魔剣』を作り上げた時、ヴェルフはいつもいい加減に名前を決める。砕け散る宿命の彼等、彼女等に情を移さないためだ。同時に、それはヴェルフから送られる手向けの名でもある。

既に完成しているもう一振りの『魔剣』の隣に並べる。

戦争遊戯に用意された急造の『魔剣』は、凶らずとも姉妹剣となった。

『火影』、そして『紫雷姫』。

夜が明ける中、朝の空気を浴びる。紅と紫の長剣は、ヴェルフに向かって輝いた。

スパイ・ガール

「ちくしょう、あいつ等、オイラに雑用ばかり押し付けて……」

【アポロン・ファミリア】団員、小人族のルアン・エスベルは大量の覚書に悪態をついた。

戦争遊戯開催日が五日後に迫る中、彼は早朝から城に運搬する物資、馬車への手配等に駆り出されている。まだ昇華を経していない下級冒険者、更に弱小種族として侮られがちな小人族ということで、ルアンは派閥の中でも都合のいい使いっ走りという位置付けをされていた。

「今に見てろよ……オイラが憧憬のようになったら、絶対にぎやふんと言わせてやる」

ルアンには小人族の希望——【勇者】フィン・ティムナのようになって、成り上がるといふ野望がある。いつか、きつといつかその日が来る。そしてその「いつか」が訪れないままもう何年も経っていた。未だ口だけの願望——既に諦念になりかけている思い——は芽が出る気配はない。精一杯の虚勢を口にしなから、ルアンは人気のない路地裏を進んでいく。

「ああ、こんなに一杯面倒くさい。誰かオイラと代わってくれよ——」

「——じゃあ、オイラが代わってやるるか？」

突如、ひよいと横道からルアンの眼前に現れる小男。瓜二つ、いや姿も声も自分と全く同じ、ルアン・エスベル。その人に、「え——」とルアンは動きを止め、凍りついた。

眼前の自分が笑みを浮かべると、ゴンツ、という衝撃を後ろから頂き、ルアンは気絶した。

「——終わったのかい、サポーター君？」

「はい、ヘステイア様。必要な情報は全て聞き出しました」

街外れの倉庫。ルアンを閉じ込めたリリは外にいるヘステイア達にことの首尾を話す。

戦争遊戯は既に始まっている。攻城戦に勝利するため——間諜を行うためリリは変身魔法で入れ替わるルアンをナーザとともに連れ去ったのだ。今は彼に完璧に化けるため、派閥内の立ち位置や他団員との関係、呼び名など必須情報を本人から聞き出したところである。

「それにしても聞き出すのがえらい早かったね……ま、まさか拷問なんかしたんじゃあつ」

「似たようなものですね。この強臭袋を鼻に押し付けたら泣き叫びながら教えてくれました」

「使いこなしているようで何よりだよ……」

ナーザの薄い笑みの後ろで強臭袋製作に関わったミアハが乾いた笑みを浮かべる。白白剤と化している強烈な臭い袋のアイテムを置いて、リリは目を瞑った。

「——【貴方の刻印は私のもの。私の刻印は私のもの】」

詠唱を唱え、瞬く間に『ルアン・エスベル』となった彼女は笑った。

「それじゃあ、行ってくるぜ」

そこから彼女は、誰にも不審がられることなく、敵陣へ一人潜人を果たすのだった。

女神と眷族の決戦前夜

Lv.2

力・SS 1088 耐久・SS 1029 器用・SS 1094 敏捷・SS 1302 魔力・A 883

(めっちゃくちゃ上がってる……)

ベッドに寝そべったベルの背に腰かけるヘステイアは、更新した「ステイタス」を見下ろしながら複雑な表情を浮かべた。戦争遊戯二日前。明日の移動時間を視野に入れ、ベルは特訓を終え主神のもとに——アポロンの屋敷で別れる前に拠点にすると伝えておいたミアハ達のホームに——戻ってきた。

事前に聞きはしなかったが、凄まじい能力値の伸びを見てやはり憧憬に教えを請うたのだと悟る。約一ヶ月前、宿敵撃破後のLv.1最終更新値と似たり寄ったりだ。というかSSS以上の能力値評価は存在しないのか、とおかしくなっている『敏捷』の数値を見てヘステイアは思った。ややこしくなるから本人には伝えないでおこう、とも。

「……じゃあ、ベル君、このままこのベッドで寝ようか。二人で」

「あ、はい——って、二人!？」

「ああ、もうこれしか寝台は残っていないのさ」

真つ赤な嘘である。アイズと過ごしただろう濃厚な日々を妬んでの謀略だ。ベルは最初こそ己が床に寝ると言っていたが、戦争遊戯に疲れを残してはいけないとヘステイアが力業で説得した。ミアハ達も気を利かせてくれたのか、邪魔はすることはなかった。

魔石灯の明かりを消した一室で、狭いベッドの中、二人は体を寄せ合わせる。

「……ベル君、ボクを恨んでいるかい？」

興奮と緊張は最初だけだった。横向きの姿勢で、ヘステイアはベルにそう問いかける。

戦争遊戯を勝手に受けたのは自分だ。負ける気は毛頭ないが、リリ達を含め、ベルには全ての責任と負担を押し付けてしまっている。もしかしたら、これがオラリオで過ごす最後の夜になつてしまうかもしれない。

仰向けになつているベルは、ややあつて、「いえ」とはつきりと答えた。

「僕は、あの人に勝ちたいです」

毅然とした眼差しを天井に向ける少年の横顔に、ヘステイアは動きを止めた後、微笑んだ。

「君は、どんな格好良くなつていくなあ……」

「えっ?」

何でもないよと言つた後、ヘステイアはベルの肩に顔を寄せた。頬を染めながら「頑張つて」と少年の耳朶へ囁く。彼もまた、「はい」と頷いた。

眠りに落ちる際、お互いの指と指を絡めながら、二人は決戦前夜を過ごした。

Shall We Dance? 2

ドレスやスーツ、絢爛たる衣装で着飾った人々が、周囲には溢れていた。

いくつものテーブルに豪華な料理が準備された大広間。シャンデリア型の魔石灯の下で沢山の給仕が葡萄酒を配り、受け取ったヒューマンや、亜人は歓談に興じている。

都市が蒼闇に包まれる月夜の晩、華々しい社交界が始まっていた。

「ふっふっふっ、社交界よ、ボクは帰ってきたぞ!!」

目の前に広がる光景に、ヘステイア様が腰に両手を当てて、声高にのたまった。

すっかり有頂天になっているドレス姿の神様の背後で、僕は落ち着かない体を持てあます。

「本当に、また来ちゃった……」

高級住宅街——オラリオ北区画に建つ宮殿と見紛う大きな建物。アポロン様が開いた『神の宴』と場所を同じくする、ギルドが管理している会場施設。

飛び込むのはこれで二回目となる夜の世界に、思わず言葉が漏れ落ちてしまった。

「もうっ、何故リリ達があんなところに連れ出されなければいけないのですか!」

「主神様からの指示なんだ、従うしかないだろ」

「うう。まさか再びこのような場所に……このような格好で」

僕の更に後ろでは、リリ、ヴェルフ、命さんが不満や悟り、羞恥の言葉をこぼしている。勿論、三人とも僕やヘステイア様と同様、綺麗なドレスや礼服を身に付けていた。

戦争遊戯から数日後の夜。結成された新【ヘステイア・ファミリア】の構成員達は、神様に促されるまま正装し、率いられながら、眼前の社交界に参加する羽目になっていた。

「ヘステイア様、説明してください! どうしてこのような夜会に出席しているのか!」

「決まっているだろう、踊るためさ! 前回の『宴』じゃあ一曲も踊れないまま終わってしまっただんだ——これは、再戦さ!」

つまり、そういうことらしい。

『神の宴』でせっかく綺麗なドレスまで着込んだのに踊れなかったことが、神様は相当悔しかったようだ。舞踏への執念というか、リリに答える口振りからは熱意が伝わってくる。僕達を連れてきたのも、ひとえに眷族と楽しみを分かち合いたいというお気持ちからだろう。

「ヴァレン何某に遅れを取ったままでいられるものかっ……! 今度こそベル君と……!」

入り口前に突っ立っているわけにもいかず、神様を先頭にぞろぞろと移動を開始する中……

「確か、商業系【ファミリア】の主催だったか、この夜会は」

「ええ。定期的に開かれていますとは聞いていましたが……やはり商人の方が多いようですね」

ヴェルフとリリの会話通り、周囲には僕達のような【ファミリア】の団員以外にも、都市内

外の商人が多いようだ。

世界に一つしかない迷宮の資源は言わずもがな貴重だ。中でも『下層』や『深層』の鉱物、怪物の宝なら大陸中の商人達が金に糸目をつけず仕入れていくほどらしい。本日のパーティーは、迷宮奥深くまでもぐれる上位派閥と商人が繋がりやを設ける場だぞうだ。【ファミリア】も商人という後援者を得れば探索の費用を出資してもらえるので、どちらにも見返りがある。

僕達【ヘステティア・ファミリア】は少し強引だったけど、先日の戦争遊戯で知名度と、そして派閥の地位——等級を上げたことで、この夜会に参加することが許されていた。

「おや？ ヘステティア、来ていたのかい？」

「ヘルメス！」

派閥の主神様や代表者を囲んで、既に沢山の商人が交渉を行なっている中。

僕達は、アスフイさんを引き連れるヘルメス様とぼったり出くわした。アスフイさんの『どうも』という視線に、会釈を返しておく。

「ヘステティア達がこのパーティーにいるなんて、驚いたよ。商人と関係を持つなんて、そういう柄じゃあないと思っていたけど」

「ふふん、勿論お金だけの利害関係なんてこれっぽっちも興味はないさ。ボクは今日、踊るために来ているんだ！」

珍しいものを見たような表情をするヘルメス様に、ヘステティア様は不敵な笑みを浮かべる。

社交界の趣旨を堂々と無視するその発言にヘルメス様が苦笑いをしていると、機を見計らったかのように、楽隊による流麗な音楽が流れ始めた。

「時は来たぜ、ベル君！ さあ踊ろうじゃないか、このボクと!!」

円舞曲の旋律に包まれる大広間に、ヘステティア様の興奮が最高潮に達する。

目を輝かせながら差し出される神様の手。リリが眉を吊り上げ、ヴェルフは苦笑し、命さんは未だに赤らんで目をぐるぐる回す中、汗をかく僕は、おずおずと手を取ろうとすると——。

「ベル?」「リトル・ルーキー」……【ヘステティア・ファミリア】?「あれは——ロリ神様!!」

周りにいた商人達から、一気にざわめきが広がる。

次の瞬間、ものすごい勢いで、神様のもとに人の波が押し寄せた。

「ヘステティア様、この私どもに未来の投資をさせて頂きたい!!」「ロリ神殿、どうかうちの商品——」「アなら黄金のジャガ丸くんも差し上げます!!」

「ちよ、何なんだ君達はっ、おいつ止め——ぐ、ぐあああーっ!」

目の前で、そして一瞬で、神様が商人の波へ呑み込まれていった。

僕とリリ達が目を点にしていると、ヘルメス様が肩を疎めてくる。

「力をつけた【ファミリア】は王侯貴族とさして変わらないからね。大抵が贅沢好きな主神は王様ってわけさ。商人は契約を結ぶ以外にも、贅をつくした嗜好品なんかを売りつけてくる」
要は、名を上げたばかりの【ヘステティア・ファミリア】は『いい鴨』なのだ、ヘルメス

様はそう教えてくれた。商人の波に神様の小さな体はずんずんと奥の方へ追いやられていく。ベルくんっつ、という虚しい悲鳴だけが、僕達のもとに届いてきた。

「……助け出すのもあれじゃ無理だな。腹も減ったし、飯をあさらせてもらうか」

「リリもそうさせてもらいます。神様の気紛れに振り回されるだけなんてご免ですから」

「ああっ、置いていかないでくださいっ、リリ殿、ヴェルフ殿！」

「あ、みんな、ちよつと……」

この場から離れ出す仲間に、いいのかなあ、と僕は頭の後ろに手をやった。

結局、蜜に群がる蟻のごとく商人達に包囲される神様を助け出す術はなく、僕も諦めるしかなかった。心の中で謝りながら、一人だと心細いので、リリ達の姿を探しに行く。

うーん、この人込みで、どうやらみんな散り散りになっちゃったみたいだけど……。

「あ、アスファイさん……」

「ああ……また会いましたね」

アポロン様の『宴』よりずっと多い参加者に四苦八苦して歩いていると、青色のドレスを着たアスファイさんと会った。リリ達のことを聞いてみると、あれから見ていないと返される。

「アスファイさんは、ここで何を？」というか、お一人ですか……?」

「……主神に放り出されているところです」

溜息をつく彼女の視線を追うと、何人もの商人と話を交わしているヘルメス様がいた。

商談だろうか。男神様は優男の笑みを浮かべながら、いくつもの交渉を捌き、その度に握手を交わしている。商人達の満足気な表情を見る当たり、良好な関係を築いているらしい。

「……ああもうっ、暇ですっ！『リトル・ルーキー』、付き合いなさい」

「へっ？」と固まる僕の手を、アスファイさんは掴んだ。

強引に腕を組まれ瞬く間に赤面すると、彼女はダンスホールとなっている広間の中央へ引っ張っていく。二の句が継げられないまま、僕は、アスファイさんと踊ることになった。

「好き放題に連れ回した挙句、いつも顧みもしないで。付き合わされるこちらの身になってもraithたいものです」

「あの、その……は、はははっ」

ダンスをしながら、愚痴に付き合わされる。

腰や肩に触れながら、左に右に。柔らかな体の感触も含め、突然のことに赤くなりながら愛想笑いしかできない僕を、アスファイさんは自然体で見事に操ってしまう。

素人でもわかる、すごくダンスが上手い。

ぎこちない動きをひよいと修正してくれて、僕の方が先導されてしまっている。愚痴を漏らし続けているのに、彼女の体はとても滑らかで綺麗なステップを踏んでいた。

無意識でやっちゃっう辺り……何ていうか、踊り慣れている？

「派閥に有益な交渉をまとめてくるのは結構ですが、本当にあの主神はいつも自分勝手に……全くっ」

「え、えーと……いつもこんな風に、振り回されてしまうんですか？」

目と鼻の先にある、美しい相貌と桜色の唇にどきまぎしながら、何とか言葉投げ返す。両目を瞑って不満気な顔をしているアスフイさんは「ええ、その通りですっ」と答えた。

「出会った時からいつも振り回して、嫌と言っているのに引っぱり出してっ……でも」

「……？」

「あの城から、連れ出してくれました……感謝はしています」

ともに踊る巫人達に囲まれながら、アスフイさんは、何かを思い出すように微笑んだ。

いつもは疲れた顔をして、その、ちょっと老け込んで見えるけど……顔を綻ばせた今のアスフイさんは、とても若々しく、綺麗だった。

年齢は、エイナさんと同じか、あるいは少し上くらいなのかもしれない。

「愚痴に付き合わせて、申し訳ありません。ですが気が楽になりました、礼を言います」

「い、いえ……」

ダンスを終え、アスフイさんがすつと離れる。

またたろたえている僕に、彼女は眼鏡の奥の碧眼を細め、主神のもとへ戻っていった。

「『万能者』も、どこぞの王族かもな」

「あ、ヴェルフ……」

僕もダンスホールから戻ると、テーブルの側で料理を口にしていたヴェルフが出迎えた。

アスフイさんとの一部始終を見ていたのか、果汁の入ったグラスを手渡ししてくれる。

「わかるの？」

「たはずまいと、仕草と……後は、そうだな、『匂い』でわかる。ガキの頃にそういう連中はごまんと見てきたからな」

あ、そうか……ヴェルフは鍛冶貴族、王国の出身なんだ。

今は没落しているとはいえ、高貴の身分の人達と交流があったのかもしれない。

仲間の経歴を思い出した僕は、少し過去を掘り返すようだけど、思い切って尋ねてみる。

「小さい頃は、こういうパーティーにも出てたりしていたの？」

「まあ、な。婆や母親が教養を学べだの何だの……夜会にも出されたし、堅苦しい作法やわけのわからん楽器の演奏まで……鍛冶屋なんだ、鉄臭い工房にこもっていた方がマシだった」

曲がりなりにも貴族を名乗っていた『クロッソ』には、色々な苦勞譚があったようだ。

その言い草に僕が苦笑していると、ヴェルフは苦いものを食べたような表情を作る。

「主神様を悪く言うつもりはないが……こういう社交界の雰囲気は、どうも気乗りしないな」

息苦しそうに胸もとに手をやって、礼服を着崩すヴェルフ。苦い経験を振り返るように、もしくは美辭麗句が飛び交う広間を嫌うように、口をへの字にした。

「なあ、ベル。このまま二人で抜け出さないか？ 酒場に行つて安酒でもあおりたい気分だ」

「あ、あははは……神様達を置いていくのは、ちよつと」

本気なのか冗談なのか、気楽そうに笑いかけてくるヴェルフに、僕は笑みを引きつらせた。そもそもこんな礼服で冒険者達が賑わう酒場に突つ込む真似は、ちよつと勇氣が……。

「ん？」

と、ヴェルフがそこで何かに気付いたように、目を僕の背後に向けた。

視線を追うと、やけに色めき立つ人集りが、一人の女の子を囲んでいて……。

「……つて、み、命さん!？」

「絡まれてる、わけじゃなさそうだな……ダンスを申し込まれてるのか?」

僕が仰天する中、ヴェルフは命さんの前に差し出される多くの手を見て推測する。

人集りは全員男の人で、ドレスで着飾った彼女に熱い視線を送っている。かたや命さんは、次々と投げかけられるお誘いの文句に、真つ赤になつて立ちつくし……泣きそうだった。

傍目に見ても混乱に陥っているのがわかる。

「あれは……助けてやった方がよさそうだな」

「ぼ、僕つ、行つてくる!」

持つていたグラスをヴェルフに押し付け、一目散に駆け出す。

仲間の危機と、後は女の人の涙を見て、半ば条件反射的な動きだった。夜会の場では行儀

違反な行動だと自覚しつつも、慌てふためく兎のように大広間を突つ切る。

そして、人込みを縫つて急行する僕の姿に気付いたのか、命さんは。

はつと目を見開いて、泣きつくように、ドレスの裾を持つて——自らも突つ込んできた。

「も、申し訳ありません! 自分はつ、この殿方と踊る予定があるので!!」

「え——えええええつ!？」

がしつっ!! と片腕を捕縛され、いきなり宣言される。

その言葉に、男性陣も『何イ——!？」と二様に衝撃を受けた顔をした。

命さんは彼等に言及を許さず、僕を伴つて、そそくさとダンスホールに向かい始める。

「うう、申し訳ありません、ベル殿お……ですが、助かりましたあ〜」

「いや、まあ、何となく事情はわかりますけど……」

詳しい話を聞くと、神会でも散々話題になつたらしい命さんの美しい容貌と、何より中々お目にかかれない極東生まれの珍しい顔立ちに惹かれて、多くの男性が押し寄せてきたようだ。ごく僅かに出席している諸外国の要人に目を付けられてしまったのが始まりらしい。いや、男神様達が命さんの反応を面白がつて、悪乗りしたのも大きく関係しているんだろうけど……。

あんなに沢山の男性に迫られたことはないのか、命さんは今も目尻に涙を溜めていた。ドレス姿の自分を一層気にしているらしく、剥き出しの肩や首筋が薄紅色に火照っている。

恥じらっているその姿に、僕も思わず赤面してしまっただった。

「と、とりあえず、自分とこのまま踊って頂けないでしょうか!? どうか、何卒……!」

「わ、わかりましたから、命さん、落ち着いてください」

男性達のお誘いから逃れるため、止むなく僕は命さんともダンスを踊ることになった。視界の隅で笑いを堪える仲間の姿がちらつく中、二人して赤くなりながら手を取り合うが、命さんは動揺が抜け切っていないのか——開始間もなく、僕の足を踏みつけた。

(うっっ!?)

命さんの靴の踵が足の甲を盛大に踏み抜く。

「ああっ!?!」

次いで、平衡を失った彼女は踏みとどまろうとするこちらを勢いよく押し倒し、

「がああっ!?!」

僕の鳩尾に、肘鉄を叩き込んだ。

——肘!?!

胴体の中心に炸裂する第三級冒険者の必殺。体の内側まで貫通する、恐ろしい衝撃。体に突き刺さった命さんの肘に、僕はあつさり意識を刈り取られた。

……僕が気絶していた時間は長かったようで、夜会は佳境に差しかかりつつあった。

命さんに何度も謝られた後、まだ見つからないリリの姿を探す。

「あ、いた……リリ!」

命さんの件もあって心配してただけに、壁際でたたずむリリを見つけてほっと安堵する。声をかけようとしたけれど……優雅な円舞曲をぼんやり眺めるその姿に——まるで薄い硝子が隔たった夢の世界を見つめるような眼差しに——僕は動きを止める。

「……リリは、踊らないの?」

気付けばそう尋ねていた僕は、リリはそっと見上げた後、冗談めかすように小さく笑った。

「ちんちくりんで、場違いなリリには、あんな場所へは行けません」

場違い、という響きがやけに心に残る中、リリは眩しそうな表情を浮かべる。

「リリにまでこんなドレスを用意して、無駄遣いするヘステイア様に怒っていましたが……本当はちょっと、嬉しかったんです。少し前のリリなら考えられない、こんなきらびやかな夜会に参加させてもらえるなんて……でもやっぱり、リリはリリなんです」

その小さい体にあしらえられた小人族用のドレスを見下ろしながら、切なそうに呟く。

派閥の呪縛に囚われ、盗賊業にまで手を染めていたり。作法も礼儀も知らず、夜会に相応しくない自分を——灰を頭から被ったように汚れている己を恥じるように、リリは壁の花となっていた。その栗色の瞳に、憧れの光を僅かに宿しながら。

迷っていた僕は、リリはその瞳を見て、思い切った声をかける。

「じゃあ、僕と踊る？」

そんな僕の誘いの言葉に、リリは両方の目を失らせた。

「ベル様とリリの身長差で、どうやって踊るのですかっ！」

「ふ、ごめんっ」

むきーっ、と怒られてすぐ謝ってしまっ。リリは神様より背が低いから、確かに僕と踊ろうとしたら無理があるというか……うん、ちよつと子供のお遊戯あそびみたいにはなってしまうかも。

僕が申し訳なく思っていると、怒っていたリリは……顔を赤らめ、うつむきながら言った。

「でも、気分だけは味わってみたいですよ……ベル様、リリをダンスに誘ってください」

自分リリが幸せになれるほど、お伽噺の王子のように——とぼそぼそと注文を重ねられる。

あまりの難題に困った笑みを浮かべながら、それでもリリの願いを叶えてあげようと、いや叶えてあげたいと、僕は思った。

お伽噺の王子じゆうたんのように……そうだ、あの『宴』の時のミアハ様を思い出して。

リリの正面に移動して、跪ひざまずき、僕はその小さな手を優しく取った。

「——私と一曲踊って頂けますか、淑女？」

そっくりそのまま、神様ミズメの動きをなぞる。

表情も意識して、あの貴公子然とした微笑みを浮かべて。

目を見開いて固まってしまったリリに、僕は「駄目だったかな？」と言うように苦笑して、

首を横に傾けた。

「……ろ、六十点です！」

厳しい。思わず苦笑を深めてしまっ。

やっぱりミアハ様のようにはいかないみたいだ。目の前で立ち上がると、リリは頬ほほを紅潮こうちゆうさせたまま僕をちらちらと見上げてくる。

繋ぎっぱなしの手を握り返してくるそんな姿を見て、少しは願いを叶えてあげられたのかもしないと、僕はちよつぱり嬉しくなった。

「……もう、お開きようですね」

しばらく手を握り合っていると、主催者側からパーティーの閉会が告げられる。

来賓らいひんが徐々に退場していく中、ヴェルフと命いのちさんがやって来た。

「ベル殿、ヘスティア様は……」

「えーと……まだ色んな人に囲まれているみたいですよ」

命いのちさんの問いを受け、広間の奥へ目を飛ばすと、未だ商人達が包圍網を形成していた。

「あれは解放されるまで……まだしばらくかかりそうだな」

「結局、ヘスティア様の野望は潰えてしまいましたね……」

ヴェルフとリリも、ぐあぁー、と人集りの中心から苦しげに伸びる黒髪ツインテールを見て、気の毒そうにこぼす。気絶したりやら何やらあったとはいえ、神様にまで意識を回せなかった罪悪感

から、僕も気まずい思いを抱いてしまふ。

「ベル君達、まだ帰らないのかい？」

そんな立ちつくす僕達を見つけて、ヘルメス様とアスフィさんが帰り際に近寄ってくる。僕は悩んだ末……全て事情を話し、何とかならないでしょうかと相談してみた。

「——よし、わかった。オレに全て任せてくれ」

迷える子羊を導く羊飼いのように、ニヤリと、ヘルメス様は僕に向かつて笑ってみせた。



「うう、また踊れなかった……」

ベルく〜ん、と涙交じりの声を漏らしながら、ヘステシアはうなだれた。

ようやく商人達から解放され、今や大広間からは光が消え失せている。誰かが魔石灯を全て消灯させたのか、会場施設全体は暗闇に包まれていた。

夜、会は終わり、楽隊もとうにいない。会場には祭りが終わった後のようなもの寂しさだけが残っている。着飾った衣装が窓から差し込む夜の光を浴び、哀愁を帯びていた。

念願叶わずとほとほと歩き出すヘステシアだったが、彼女の前に、一つの人影が歩み出る。

「ベル君……？」

「神様、付いてきてください」

燕尾服を着るベルは、ヘステシアの手を取ってバルコニーへ向かった。

動揺する彼女が何か尋ねるより先に、窓の外の階段を下り、芝生が広がる夜の庭へ出た。

「べ、ベル君、一体……」

噴水の水飛沫が月の光に照らされきらきらと輝く中、ベルはヘステシアに向き直る。

「見てください、神様」

言われるまま、少年の視線を追って背後の方角を見上げると——高い会場施設の屋根の上にたたずむ、いくつもの影があった。

「さあみんな、好きな楽器を取れ！ いたいけな女神に捧げる、今夜限りの楽隊だ！」

指揮者の位置に立つのは、橙黄色の髪を揺らすヘルメスだ。

彼の芝居がかかった言葉を受け、全ての影が屋根の上に置かれた様々な楽器を手にする。

「ヴェ、ヴェルフ様……弦楽器が弾けるのですか？」

「真似事だけだ。名前だけが元貴族だからな。しょーもない腕だから、安心しろ」

「じ、自分に、このような楽器が使えるでしようか……」

「その魔道具はどんなに下手でも独りで演奏するので、大丈夫ですよ。では、私は横笛を」
リリが、ヴェルフが、命が、アスフィが、弦に弓や指を添え、笛に唇を当てる。やがて指揮者の手の動きに合わせて、静かな演奏は始まった。

ばらばらの楽器から様々な音色が上がっているにもかかわらず、それは確かに円舞曲を奏でていた。蒼い星空と月を背に、五人だけの楽隊は美しい旋律を紡いでいく。

耳に届いてくる優しい音色に、呆然と建物の屋根を仰いでいたヘステイアは、少年の方を振り返った。

ベルはベルで、緊張した面差しを浮かべている。「女神が喜ぶよう、思いっ切り気取った文句で決めるんだ」とヘルメスに言い含められている彼は、ぐっと顔を上げ、ヘステイアの目の前で片膝をつく。

「今宵、どうかこの私と踊って頂けないでしょうか——僕の女神様」

幼い頃から読み耽った英雄譚の記憶を総動員して、精一杯の台詞を幼い女神に送る。

気障な台詞を言った当人の方が真っ赤になる中、ヘステイアは、その瞳に水面を張った後

——花が咲いたように満面の笑みを湛えた。

「うんっ」

見上げてくる深紅の瞳と視線を絡めながら、その手を取る。

美しい旋律に促され、たった二人の舞踏が始まった。

宮殿のような建物の片隅、花と緑に囲まれた庭の中。

噴水の水の音とともに、ささやかなダンスが交わされる。

頭上から送られる演奏が鳴り止むまで。

女神と眷族の少年は、笑みを分かち合いながら、月夜の下で円舞曲を踊り続けた。

ファミリア入団契約書

「それじゃあ、ボクの【ファミリア】について説明するよ」

腰に手を当てて、どこか主神を気取った態度でヘスティアはそうのたまった。戦争遊戯からまだ数日目の朝。新しく手に入れた館の居室には、様々な報告のためギルドに赴いている団長を除いた、【ヘスティア・ファミリア】の全構成員が揃っている。引越しの作業がまだ始まっていない中、ヘスティアは改宗して新しく加わったりリ、ヴェルフ、命に口の派閥の決まり事——入団するにあたっての注意事項について話し始めた。

「門限は非常時を除いて十時まで。何か用事がある場合は必ずボクに一報しておくこと。ダンジョンに向かう際は、目的地の階層を出発する前に教えてくれ」

「ダンジョンについての報告はわかりますが……門限も定めているのですか、ヘスティア様？」
「当たり前だろ、サポーター君。ボクのベル君に夜遊びなんて許さないし、酒場で羽目を外して朝帰りゝい、なんてのも駄目だ。派閥の風紀のためにもしっかり決めておかないと」

「誰のベル様ですか」とリリがジロリと見る中、ヘスティアは続ける。

「あとは朝食と夕食はみんなで取る。昼は全員バイトや迷宮探索なんかがあるだろうから仕方ないけど、それ以外は全員で食事をするんだ。ボク達はどう家族なんだからね」

「俺はそれで構いません。むしろ、賛同します」

「ええ。食卓を囲むことも、団欒の時間を過ごすことも、絆を深めていく中で大切ですから」
ヴェルフと命が笑顔で主神の言い付けに頷く。ありがとう、と言うヘスティアはそれから派閥の規約をすらすらと語った後、どこから取り出したのか三枚の紙を差し出した。

「最後に、この契約書に自署してくれ。ボクの『恩恵』はみんなに刻んであるけど、紙面でも君達の契約の証を残させてもらうよ。これが終われば、晴れてボクの派閥の仲間入りだ」

「て、徹底していますね……」

まさかの契約書に汗をかきながら命は手渡され、ヴェルフとリリもそれを受け取る。紙一面を埋める大量の共通語の羅列に命はうろたえ、ヴェルフは適当に読み飛ばし自署を書こうとする中——リリは紙に穴があくほど見つめ、一字一句を目で追った。

そしてその栗色の瞳が契約書の一番下、めちやくちや小さな一文を発見する。

【ファミリア】内での男女交際、特に団長との接触は一切禁止。手を繋ぐのも駄目。】

リリは渾身の力で契約書を破った。

「アアッ!? 何をするんだサポーター君ッツ!!」

「それはこっちの台詞です!! 騙すような真似して何に自署させようとしているんですか!？」

ギヤーギヤーと言いつ争う幼女二人に、契約書を片手に持つ命とヴェルフは、一筋の汗と溜息をつくのだった。

哀願

「〜♪」

酒場『豊穰の女主人』の厨房で、シルが鼻歌交じりに料理を作っている。

店の休憩時間。ベルに手作りの昼食を手渡すことを日課にしているシルは、このような時間を利用して料理の腕の向上に励んでいた。真意はさておき、少年の前では背伸びをしたい彼女は洒落た料理を作ろうとして——見栄を張ろうとして——迷走し、微妙な味わいで時には少年を涙目にする料理をよく作り出すのである。未だ少女は修行中の身なのだ。

最近楽しくなってきたのか、機嫌良く緑色の卵焼きを作っているシルのその後ろ姿に、猫人達と見守っていたリユーはためらいがちに声をかけた。

「……シル。こんなことは言いたくないのですが」

「なあに、リユー？」

「もう、クラネルさんに昼食を渡す必要は……ないのではないのでしょうか」

「!?」と驚愕して振り返る少女に、リユーは非常に言いにくそうに告げる。

「戦争遊戯も終わり、彼には派閥ができた。その、昼食も作ってくれる仲間が……」

「聞く話によると、あのヤマト・命とかいう極東少女、相当な料理の腕らしいニヤ」

いい嫁になれると神が称えたほどだと捕捉するクロエに、シルは愕然とした。美味い飯を作れる少女が少年達の昼食を用意する……確かに微妙な飯しか作れないシルは用済みだ。

「そういうえは冒険者君この頃顔出さないよね」シルはボイされたニヤ!?と店員と猫人達が好き勝手に騒ぐ中——引越し作業や歓楽街の騒動に巻き込まれているだけ——シルは衝撃を受ける。焼き焦がされ煙を上げる緑色の卵焼きが変色し、赤黒い無残な姿に変わり果てた。

少女は絶望か悲しみか、ぶるぶると震え出し——次にはがばつと顔を振り上げる。

「わ、私っ！ もつと料理が上手くなってみせる!!」

そして昼食担当の座を取り戻す！と宣言するシルは、決然とした顔で言い放った。

「みんな、手伝って!!」

「ク、クラネルさん……ぐうっ」

「リユーさん!? ど、どうしたんですか、そんな苦しそうな顔して!？」

後日、ホームに押しかけベルを呼び出すリユー達『豊穰の女主人』店員一同。

仰天する彼を目の前に、青白い顔をしたリユーは腹部を片手で押さえながら告げる。

「シルを止めてっ……いえっ、シルの昼食を受け取ってください……!」

少女の奇抜な料理の数々を試食する羽目になった店員達は泣き叫びながら、そしてあの元第二級冒険者でさえも、汗を流す少年に何度も哀願するのだった。

円月投

「はあっ!」「うぐっ!?!」

裂帛の声とともに、命に投げ飛ばされたベルは豪快に芝生の上を転がった。

とある昼下がり、館の中庭。ベルと命、そしてヴェルフは訓練——組手を行っていた。

「何度見ても見事なもんだな、極東の『技』っていうのは。すごいな、お前」

「い、いえっ、これは武神様の指導の賜物であって、決して自分がすごいわけでは……!?!」
今は休憩中のヴェルフがベルを起き上がらせながら誉めると、命は赤くなつて必死に否定する。照れているそんな彼女に苦笑するベルは、話題を変えようと質問をした。

「あの、命さんができる技の中で、一番すごい……一番強い技って、なんなんですか?」

「一番強い、ですか。状況にもよるので断定はし辛いですが……やはり、円月投でしょうか」

円月投? とベルがおうむ返しすると「ええ」と命は説明する。

「あの武神様が庭で何度も特訓して編み出した、異邦の技を改良した必殺……その威力や雷が落ちるがごとし。故に、武神様が自身の名も合わせて円月投と、そう名付けられました」
「す、すごくすごそうですね……」できるのか?」

「ええ。一応、武神に教わった者の中では自分だけが体得できました。……ですが円月投を

自分達に教えた武神様は『なんでものを教えるんだ!』と女神様に手酷く叱られ……」

折檻された武神の姿を思い出しているのか、震える命は封印されるほどの技だと語る。

「面白そうだな、少し実演してみてくれ。ベルも見たいだろ?」えーと……うう、うん」

「ええっ!?!」と驚く命は派閥の実力向上のためだと言う青年に押し切られ、件の技を行うことになった。非常に危険だから、という理由で何枚も重ねた寝具が中庭の一角に用意される。

「で、では……行きますっ、ベル殿」

「なんで僕が受ける羽目に……」

正対する命を前に汗をかくベルは、怯えながら身構える。

次の瞬間、高く跳躍した命は凄まじい早業で——ベルの顔を両の太腿で挟み込んだ。

「!?!」

柔らかい太腿に顔を包まれたベルの真正面、視界が命の股で、いや下着で塞がれる。

そして次の瞬間、「いやあッ!」という掛け声とともに頭から寝具に叩き付けられた。

「どうですベル殿、これが円月投……ってわわわわっ!?! て、手加減した筈なのに!?!」

「あー……これを女に教えた武神様が、折檻されるわけだな」

寝具に沈み、真っ赤になった顔面から煙を吐くベルに、慌てて駆け寄り介抱する命。一部始終を見守っていたヴェルフは全てを悟つたように、嘆息した。

武神が改良した異邦の投げ技『円月投』——別名、幸せ投げ。

世界最速兎、再び

「エイナ、エイナ、冒険者達の間で『リトル・ルーキー』がまた話題になつてゐるみたいだよ！」隣にやつて来た同僚の声に、「うん、らしいね……」とエイナは生返事を行う。

夜のギルド本部、事務室。周囲にいる職員達と同じようにエイナが作業机につき、羽根ペンを動かしている中、学生来の友人であるミイシヤは興奮した口振りで頻りに話しかけていた。

「一ヶ月でLv.3に到達！ 前回の『ランクアップ』の時とは違つてもうインチキなんかじゃないつてみんな言つてるよ！ 認めるしかないつて！」

「だろうね……」

「面白くないつて思う冒険者はやっぱりいるらしいけど、あの戦争と遊戯の戦いっ振りを見せつけられちゃつて何もできないみたい！ はしゃぎ回つてる神様達みたいに、あいつは本物だ、つてきちんと評価もされてる！ エイナの弟君、ようやく認められたんだよ！」

「そっかあ……」

「つて、もうっつ！ エイナつてば聞いてない、さつきから何書いてるの？」

生返事しか返さないエイナに、話好きのミイシヤは頬を膨らませる。

音を立てて動いている羽根ペンは、先程からずっと羊皮紙に何事かを書き進めていた。

「ベル君の、冒険者としての活動記録……」

「それつて、冒険者達に公開する昇格参考の成長模範？」

うん、と羊皮紙を覗き込んでくるミイシヤにエイナは頷く。

ギルドは昇格を遂げた冒険者の活動記録を参考情報として度々公開する。派閥に支障がない範囲で発信されるそれを能力水準の上昇に役立たせ、冒険者の質の向上に繋げるのだ。エイナは羽根ペンを置き、完成した報告書を見下ろす。

『Lv.2到達から十日で中層に進出し、進出初日に18階層まで踏破、同業者達の洗礼を乗り越え階層主と二度の交戦を経た上で勝利する。地上では上位派閥の襲撃を切り抜けた後、数の多寡に屈さず戦争遊戯を制し、最後はLv.3の冒険者を一对一で真つ向から撃破する』

(うん、無理だね)

自分が作成した成長模範を眺め、エイナは悟つた顔で頷いた。

少年の軌跡、というより被つた下修羅場の数々は、短期間でLv.3に昇格したければ『死んでこい』と冒険者達に告げる宣告書と同義であった。Lv.2の報告書と丸つきり同じ代物である。頭を痛めるエイナはダメもとで、上司にベルの活動記録書を提出した。

案の定、少年の情報公開は却下され、彼の成長模範は二度目のお蔵入りとなった。

狐の夜嫁入り

「……。」

ベルは、違和感を覚えた。

真夜中である。館の自室は暗く、カーテンの引かれた窓の外が青白く染まっている。寝台で眠っていたベルは体に密着する温もりと、首筋を犯す吐息のくすぐったさに臉を開ける。

次第に鮮明になる視界に映ったのは、まるで夫婦のように己の体へ寄り添う狐人だった。

「なっ——」

「申し訳ありません、ベル様……」

狐人の少女、春姫の格好は襦袢一枚だった。床には紅の着物と腰帯が脱ぎ捨てられている。胸へもたれかかるように密着する体の柔らかさ、肌を通じて伝わるどこか卑猥な温もり切なそうな鼓動の音。瞳を潤ませて見つめてくる少女にベルは悲鳴も上げられず硬直してしまう。

「今日は、お疲れだったようなので……夜伽に、やってまいりました」

「……!?」

すっと上半身を起こし自分を見下ろしてくる春姫。頬を紅潮し、照れ恥じているものの、今の少女には娼婦のごとき妖艶な雰囲気があった。カーテンの隙間から差し込む月明かりが彼

女のほっそりとした首筋を濡らし、美しい金の長髪がさらりと音を立ててうなじからこぼれる。細い指がはだけさせ、豊かな膨らみを有する胸もとがあらわになる。

その驚くべき肌の白さはベルの瞳を焼き、全身を赤熱させる彼の視線を釘付けにした。

「私にできることは……私はこのようにはしたくないことですか、御恩を返せないの……」
顔を赤らめながら目を伏せる春姫は、ベルの衣服もはだけさせる。

瞳を揺らし、動けない兎に狐は瞳を細め、ゆつくりと体を前に倒した。

やがて女は男の顔に唇を落とし、二つの影は折り重なって——。

「——という夢を見てしまったのでございませ……！」

「夢の中で惚れた男になって、自分に襲われるって、アホかいアンタは」

街中のある喫茶店。卓を挟んで真つ赤になる春姫に、女戦士のアイシヤは呆れ顔を作る。

春姫の様子を見に館を訪ね、気分転換がてらお茶を飲みに誘ったのが小一時間前。深刻そうな顔でうつむく狐人の少女は神に懺悔するがごとく、昨夜見たという夢の内容をアイシヤに告白した。狐の耳と尻尾を忙しなく揺らし、全身を羞恥でプルプルと震わせながら。

少年視点で少女に夜這いをかまされるといいたくまじき妄想のごとき夢の内容に、アイシヤは「このエロ狐」と容赦なく告げ、対する春姫は熟した林檎のようになった頭部を両手で押さえ、「あう〜!?」とテーブルの上に突っ伏した。

全ての元凶

「それじゃあ、あんたの【ファミア】の拡大を祝って……」「乾杯！」

カチン、という音の後、長台カウチの席に座るヘステイアとヘファイストスはグラスに口付けた。

瀟洒しょうしゃな高級酒場である。ようやく暇ができたという鍛冶神かじしんの誘いから、それぞれの眷族達に連絡した上で二人はこの場に足を運んでいた。ヘステイアの出世もとい派閥祝いである。

「あれだけグータラだったあんたがよくもまあ、ここまで……呆れるくらい感心しちゃうわ」「ふふんつ、これがボクの実力さ！……と言いたいところだけど、全部ベル君や、他の子達のおかげだよ。ボクは、大したことを何もしじゃない」

最初は得意げに胸を張って、すぐに殊勝な顔付きでヘステイアは瞳ひまなを細める。どこか誇らしげに微笑びしょうをこぼす彼女の横顔に、ヘファイストスも一笑した。

「あ、そういえばヴェルフ君の件、ありがとうヘファイストス。王国ラキアから助けてくれて」

「褒められるようなことはしてないわ。ヴェルフ達を囮おとりにしたようなものなんだから」

それから女神達は、旧知の雰囲気かつかんぎを窺うかがわせながら、恒例とばかりに飲み明かしていった。

「それでさあ、ベル君がもう可愛くって、可愛くってえ」

数時間後。顔を上気させ、ヘステイアはにへらにへらと笑っていた。

ヘファイストスもすっかり酒で顔を赤くさせ、俗に言うできあがった状態となっている。

「神様に悲しい想いをさせたくないから、求愛には応えられないんです、でも一緒にいたい、本当は神様のことを愛してます、って。もう堪ないよオもうッ！　ベルくん!!」

「あ、愛してる云々はっ、どうせアంతアの妄想でしょう？」

神友しんゆうがひたすら披露する惣気話のろけに、グラスの果実酒をおおるヘファイストス。どこか遺憾いかにんそうに見える彼女に対し、ヘステイアは「はーん？」と赤い顔でにやける。

「ヘファイストスはそーいう浮ついた話はないだろう？」

「し、失礼ねっ、私にだってそれくらい……!」

「君は子供達の前じゃあ、乙女っていうより親方おやぢ(笑) って感じだからなあ。勿論ボクはヘファイストスの可愛いところも知っているけどねー!」

みなまで言わせずニヤニヤと笑うヘステイア。そんな幼女神の態度にカチンと来たヘファイストスは、酔った勢いも手伝って、自重していた己の惣気話を言い放った。

「私だっつてねえ！　ちよつと前にヴェルフから——!!」

後日、とある鍛冶師の【不冷ふたつよ】の起源となる黒歴史もといネタ満載の惣気話が、幼女神の口から音速マッハで都市中の神へと伝わることとなる。

愉快な鼓動

市壁から朝日が届き始める時刻。本拠でアイズは一人、中庭で剣の素振りを行なっていた。【剣姫】の二つ名に相応しい剣術をもって、風切り音を鳴らし、自主訓練に励んでいる。

王国軍の完全撤退からもう数日が経とうとしている。『ベオル山地』で遭難し『エダスの村』で過ごした出来事は大分前のことだ。

胸に切なさをもたらした、あの夜の別離と神への愛歌も、過去の記憶になりつつある。

「村祭り……楽しかった」

動きを止め青空を見上げるアイズは、当時の光景を一つ一つ思い出し、ぼつりと呟いた。

幼い女神との踊り、膨らむ村娘の衣装、村人達の手拍子と歌声、温かな笑い声。今までアイズが経験したことのない事柄は今思い出しても胸の中を安らかにする。

何故か隙あらば自分を振り回そうとした女神との踊りは楽しかった——楽しかったが。少し、残念でもあったような気がした。

「……残念？」

心の隅に過ぎった自分のふとした思いに、アイズは小首を傾げる。

(どうして……?)

自己への問いかけ。

そして、その疑問に答えるより先に、アイズの足は動いていた。

夜の村の記憶をなぞるように軽いステップを踏む。温かな焚き火の炎を側にしながら、女神ではない誰かと——あわてんぼうの白兎と愉快に踊っていたなら、と想像する。

「……」

アイズは、くるり、と回ってまた一つステップを踏んだ。

「笑ってるね」笑っているわね」笑っているな」

館の塔と塔の間を繋ぐ空中回廊。中庭を見渡すことのできる石像の渡り廊下で、アマゾネスのテイオナ、テイオネ、エルフのリヴェリアは眼下の光景に眩きを落とす。

律動的な軽い足捌き。まるで郷土舞踏でも踊っているかのような少女の動きに、テイオナ達は顔を見合わせる。その唇には見慣れた若しかわからない程度の、小さな笑みが咲いていた。

「何かいいことでもあったのかしら？」さあな。皆目見当がつかん」

「でも……アイズのあーいう表情見れて、あたし、嬉しいかも」

テイオネとリヴェリアが首を傾げ、テイオナがにしっと笑みを浮かべる。彼女の笑顔を見てテイオネ達も釣られるように笑った。

冒険者の少女は、まるで子供に戻ったように、微笑みながら踊り続けるのだった。

追跡者T型

——まただ。

また何者かに付けられている。お使いに一人で出ているリリは、汗とともにそう思った。夕刻のオラリオ。茜色の空に見下ろされる狭く薄暗い路地である。

あれはいつ頃だっただろうか。確か【勇者】^{フレイヤ}もとい小人族の求婚があつて数日ほど経った後だった気がする。謎の影が日常生活のリリの周囲でちらつき始めたのだ。

影、いや謎の追跡者は決まって自分一人にいる時に現れ、執拗に追いかけて回ってきた。完璧な尾行術。恐ろしい重圧。人なのか本当に。夕暮れの空が血の色に染まっている。

そして、リリは見た。

咄嗟に振り向いた先、民家の屋上に立っていた——怒蛇のごとき長髪を揺らす女の姿を。

「ひっ」と漏らすリリは全力で駆け出した。路地裏には人っ子一人いない、どうして自分はこんな道を、いや違う、誘導されたのだ、とうとう仕掛けてくる気か。リリの全身が発汗する。

(じよ、冗談じゃ——!?)

例の武装エルフより強いだとかなんだとかそういう次元ではなく発散される威圧というか殺気というか嫉妬^{しど}というか怨念^{うげん}というか怨讐^{うげん}というかとにかくヤバイ、この敵はヤバイ!!

「あうっ!？」

恐怖で足をもつれさせ転倒する。そして自分を罵倒する前に、黒い影が間近に迫った。

「ひっ——」

「あなた、なに?」

意味不明意味不明意味不明。

夕日の逆光によつて顔が見えない相手に、リリは震え上がり何も答えられない。

「だんちよ——フィン・デムナについてどうおもっ?」

「全く興味ありませんリリには心に決めた相手がいまいますのでベル様一筋ベル様大好きベル様助けてデスカラもう好意の欠片^{かけら}なんて全くありませんありません存在しません?」

絶叫するように泣き叫ぶと、黒い影は沈黙した後、「そっ」と言つて身を翻した。

去つていった追跡者に、リリは腰を抜かし、しばらくその場から動くことができなかった。

「——ベル様あー!？」

「えっ、なにつ、どうしたの!？」

「びえく!!」と涙を流しベルの腹にタックルをかますリリ。圧倒的恐怖から解放された反動で幼児退行し、屋敷に帰還すると同時に愛しい人に泣きつく。

ヘスティア達に見つかるまで、ぐすぐすと泣くりリは少年の胸の中で慰めてもらった。

剣姫VS街娘

「あ………?」

前から聞こえてきた声にアイズが顔を上げると、目の前には薄鈍色の髪の少女がいた。ある日の昼過ぎ、『ジャガ丸くんの新店ができた』という知らせを聞きつけ、これはぜひ確かめておこうと街中を移動している時だった。

髪と同色の瞳を見開き驚いている相手に、小首を傾げていると……アイズも気付いた。

自派閥が度々使用する酒場『豊穡の女主人』、そこに務める店員の娘だ。確か、名前はシル。服装は麦わら帽子に清潔な白いワンピース、大きめな籐籠と、普段とは装いが違うので気が付くのが遅れた。どこかへ足を運んでいたのか、彼女は店の常連客に微笑みかける。

「こんにちは、【剣姫】様。お散歩ですか?」

「こん、にちは……えっと、その……はい」

新しくできたジャガ丸くんの店を探していた、と素直には言えず若干赤くなるアイズ。

互いに私服姿の美少女達は挨拶を交わしていると——シルの瞳が確かに光った。

「そういえば、【剣姫】様はベル・クラネルさんに膝枕をしたことがあるんですね?」

「!?」

アイズは驚愕した。何故知っているのかと。

酒場で何か話してしまったのかと動揺していると、畳みかけるように、シルは頬を染める。

「実は私も……ベルさんに膝枕をされてしまって」

「!?」

アイズは二度目の驚愕を叩きつけられた。

えっ、うそっ、しかもされたって——アイズの動揺に拍車がかかっていると、更に、酒場の看板娘は恥ずかしそうに自分の体を抱き締める。

「しかもベルさんったら、激しく、情熱的に膝枕をしてきて……!」

「!? !? !?」

激しく!? 情熱的に!? そんな膝枕のやり方が!? アイズは混乱している!

魔女的な少女による多分な脚色が入っているのだが、わかる筈もなく。

アイズは目を見開き、顔色を目まぐるしく変えながら立ちつくした。

「おい、【剣姫】が赤くなったり青くなったり繰り返しているぞ!」「ゴクリッ、あの『戦姫』がやり込められてやがる……!」「良質街娘シル・フローヴァちゃん……一体何者なんだ!」

第一級冒険者と酒場の看板娘を見守る一般市民、冒険者、神々。

周囲の取り巻きは固唾を呑み、少女達に戦慄と衝撃の眼差しをそそぐのだった。

妖精ロマンチカ

「夜の営業に間に合ったからいいものの、休むんなら先に言っときな。迷惑さ。」

「すいません、ミア母さん」と女将に頭を下げ、賑わう夜の酒場『豊穡の女主人』に入る。

ベル達の依頼を受け半休を取り、ダンジョンから帰還してきたリユーは迷惑をかけた分精を出そうと、忙しく動き回るシル達とともに仕事に務めた。

「やあ、エルフ。今日は世話になったね」

接客をしていたリユーは、入店してきたばかりの客に「貴方は……」と瞳を細める。

「麗・傑」アイシャ・ベルカ。今日リユーとともにベルの依頼を受けた女戦士の女傑だ。

「安心しなよ、飲みに来ただけさ。あんたの正体云々について話しをするつもりはないよ」

手を振りながら二人がけの丸卓を占領するアイシャに嘆息し、「……ご注文は」と尋ねる。

注文を取ってジョッキのエルを運ぶと、彼女はにやつきながら声をかけた。

「ベル・クラネルに、随分入れ込んでるじゃないか」

「何が言いたいのですか」

「臭いでわかるよ、あんたは筋金入りの妖精だ。でも、にしては坊やに心を許している。興味が湧くじゃないか。あんたの目にはあの雄がどう映っているのか、色々聞きたくてね」

リユーは再び嘆息し、すぐにその場を去った。だがアイシャは彼女が付近を通りかかる度に注文を出し「あの雄のどこが気に入ったんだい？」やっぱり腕っ節か？と質問し、拳句「もう押し倒したのかい？」唇くらい奪っただろう？「味はどうだった？」せつかくのヒューマンド、子種だって欲しい筈さ」と下品な話を振ってきた。リユーは徹底的に無視をする。

そんな生真面目な妖精に対し、アイシャは大袈裟に溜息をついた。

「かー、本当に枯れてるね、エルフは。まだむさ臭いドワーフの方がマシだよ」

その物言いに、カチン、と。

流石に腹をすえかねたリユーは、足を止めて言い返した。

「私は倒錯した趣味を持ち合わせていなければ、肉欲に溺れるつもりもない。そもそも、いきなり同衾などありえない」

そして空色の瞳を吊り上げ、言った。

「まずは、誰もいない夜の森で、二人の永遠の愛を月に誓うべきだ」

その言葉に、アイシャは動きを止め、目を点にする。

「……驚いた。あんた、意外と夢想家なんだね」

「……」

リユーはアイシャのテーブルから足早に去った。その尖った耳を赤く染めながら。

その後、彼女はニヤニヤと笑う女傑にしつこく注文を取られ、からかわれる羽目となった。

過ぎ去ったとある日の一幕

「あ……ウイーネ、寝ちゃいました？」

「うん、はしやぎ疲れたんだろうね……」

涼しげな木陰の下、ベルが戻ってくると、女神の脚の上で眠っている竜の少女がいた。

異形の少女を保護して四日目、暑く感じる日差しが照る昼下がり。先程までヘステシアとウイーネはこの館の中庭で笑声を上げきやきやつとじゃれ合っていた。

バイト等により時間が中々取れないにもかかわらず、流石女神といったところか、ヘステシアはベルと春姫の次にウイーネに懐かれていた。狐人の娘への対抗意識、女神の切り札ジャガ丸くんを投入した餌付け作戦などが功を奏した結果である。

今日は、事情を知る鍛冶神に大目に見てもらい休暇中だ。

「すいません、手を焼かせてしまつて……」

「なあに、構わないさ。ボクもこの娘と触れ合うことができ、楽しい」

夏の木漏れ日に照らされながら、ヘステシアはウイーネを愛おしげに撫でる。少女はくすぐったそうにほのかな笑みを浮かべ、まるで心を許した竜のように女神の膝の上で眠りこける。その穏やかな一つの絵に目を奪われていたベルは、おもむろに主神の隣に腰を下ろす。

「神様……ごめんなさい。勝手にウイーネを連れてきて、【ファミリア】にも迷惑を……」

ずっと謝らなければいけないと思っていた。少女を助け出したことに後悔はない。だが己の独断で主神と彼女の派閥に負担をかけることになってしまった。少女への想いと自責の念に板挟みに遭いながら詫びようとすると——「ベル君」とヘステシアは言葉の続きを遮る。

「ボクは寵の女神だぜ？ 人だろうと動物だろうと……怪物だって、その子が寄る辺のない迷子だったなら、手を差し伸べるよ」

慈愛に満ちた笑顔を湛えるヘステシアは、そつと目を伏せる。

「それにボクも……この娘を愛してあげたい」

どこか切望するようにこぼし、もう一度少女の青銀の髪を撫でた。

瞳を見開いていたベルは、胸に迫る何かを感じながら、静かに彼女に倣い手を重ねる。

「んっ……」

「あ、起こしちゃったかな？」

うつつすらと瞼を開くウイーネは、自分の頭に手を置く女神と少年を見上げる。

少女は、ベル、かみさま、と言いかけて……眠気眼で、穏やかな笑みを浮かべた。

「父親、母親……」

とある日の出来事を思い出すように眩かれたその呼び名に、少年も、女神も真っ赤になる。やがて顔を見合わせた二人は、くしゃっと破顔し、少女とともに家族のように笑い合った。

長続きしない空気シリウス

「そうか……そんなことが」

リリとヴェルフから話を聞いたヘスティアは、悲しそうな表情で息を吐き出す。

館の一室である。ギルドの強制任務からベル達が帰ってきた翌日。派閥の中でも参謀や意見番に位置するリリとヴェルフを呼び出したヘスティアは、眷族達が目にした『異端児』や隠れ里について話を聞いていた。

自分が老神と対峙して神意を明かされたことも含め、情報交換を行なっている。

ベルを始め眷族達に漂う重苦しい空気に心を痛めながら、ヘスティアは質問を重ねた。

「その『異端児』君達は、君達の目から見て、どう映った？」

「こういう言い方もおかしいですが、皆さん、気さくな怪物でした」

「大体が好意的だったな。ベルなんて何度も握手をせがまれていたし」

「——あ、握手？」

物憂げだったヘスティアの表情が、『好意的』『ベルと握手』というヴェルフの台詞を聞いた途端、緊張を帯びたものへと変わる。

「あ、あ……その、『異端児』君達は、雌とつか女の子というか、ウィーネ君みたいな……」

その、なんだ、可愛かったり綺麗だったりというのは……」

「レイ様……歌人鳥の『異端児』は、エルフにも劣らぬ美しさだったと個人的には」

「綺麗所なら半人半蛇や半人半鳥も……ああ、一角兎なんかもういえばいたか」

「——ア、一角兎い!? 兎のモンスター!?」

ぎよつとするヘスティアは、とうとう危機感を剥き出しにする。

「そ、それはあれなのかい!? 兎、人のな長い耳で、肢体が柔らかそうな……!」

「……まあ、毛深くはありましたけど、抱き心地は良さそうでしたね」

「ベルは気に入られて抱きつかれてたか。顔も何度も舐められていたしな」

「——ぐああああああああああああああああああああああああああああああああ!」

完全に誤解しているヘスティアから咆哮が逆る。

「またベル君に魔の手があ~~~~~!? しかも今度はモンスター!? 異類婚姻譚

なんて認めないぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!」

神と人もそうだ、というリリの突っ込みはヴェルフの手が咄嗟に遮ったことで回避された。

「どうして、ヘスティア様はいつも真剣な空気が長続きしないんですか……!」

「……俺達の空気を和ませようとしているんだらう?」

「ありえませんが」

両手で頭を抱え仰け反る女神を前に、リリは半眼でヴェルフに断言するのだった。

狐娘の冤罪

「ウイーネ、様……」

メイド服姿の春姫は、館の廊下を歩いていた。

『異端児』達と別離し、地上に帰還した翌日。【ハスティア・ファミリア】本拠『竈火の館』は竜の少女がいなくなった寂しさと虚しさに包まれている。ベルも、ハスティア達も、そして春姫も言いようのない寂寥感と戦っていた。

妹のようだった。

春姫、春姫、と。

何度も自分の名を呼び、後を付いてきて、戯れ合い、抱き締めては温もりを分かち合った。たとえ少女は怪物であろうと、あの時間は本物で、春姫は大切な妹ができたようだった。彼女のいないこの館で当時の情景を思い出すだけで涙が出てくる。自分以上にベルを慕って、中庭で一時を過ごす三人は、それはまるで家族のように……あれ、妹じゃなくて、娘？

常ならば己の妄想によって自爆するところだが、今の春姫にはその余裕すらない。夕焼けに染まる廊下を歩いていた彼女は一つの扉の前で足を止め、ノックをし、躊躇して中に入った。ベルの自室である。ウイーネが頻繁に出入りをし、彼と寝ることをよくねだっていた。引

き寄せられるように純白の敷布が敷かれた寝台に近付いた。

腰かけて、横になる。ウイーネの匂いと温もりが残っているような気がして、春姫はベルの寝台の上でとうとう泣き出してしまふ。

「ウイーネさま……ウイーネさまあ……！」

狐の尻尾を震わせながら、白い敷布に顔を押し付け、春姫は嗚咽を堪えようとした。

(は、発情している……!?)

(発情しています……!!)

(ベルの寝台で……!)

(春姫殿おー!?)

体を小刻みに揺らし、寝台にうつ伏せて「うう……あ、ふう……！」と悩ましい嗚咽を漏らす元娼婦もとい狐人の姿をドアの隙間から見ってしまった女神達は、盛大な勘違いをした。

「あれ、どうしたんですか……?」

「来ちゃ駄目だベル君ツツ!!」見てはいけません!!

「お前にはまだ早い!!」お願いですから帰ってくださいベル殿オ!!

「ここ僕の部屋ー!?!」

騒がしくなる部屋の外に、当の狐娘はきよんとした。

家族の形

「命……？」

『異端児』の隠れ里から地上に帰還し一日。命は「タケミカヅチ・ファミリア」本拠『仮住居の長屋』に訪れていた。武術の稽古をしていたのか、桜花が彼女に気付き、千草や他三名のヒューマンも振り向く。千草はすぐに尋ねてきた。

「どうしたの……？」

「あ、いや、その……皆さんの顔が、急に見たくなつて……」

命は咄嗟に嘘も付けず、言葉で濁してそんなことを言っていた。「変なやつだな」と桜花に笑われてしまうが、彼も、千草達も命が何か思い悩んでいることに気付いているようだった。

『異端児』と出会って、竜の少女と別離してしまい、命は情緒が不安定になっていた。言葉通り、大切な家族であり帰る場所でもある彼等のもとに、足が向かつてしまった程度には。

地面に視線を落としていた命は、おもむろに唇を開いた。

「桜花殿達は……もし自分が皆さんと一緒にいられなくなったら……何か罪を犯したとして、離れ離れになったとしたら、どうしますか？」

言い終えてから、命はしまったと思つてしまった。要領を得ない質問だし、これでは何か

があったと言っているようなものだ。慌てふためき忘れてくれと発言を取り消そうとしたが、

「会いに行くよ」

「えっ……」

「命が悩んでて、苦しんでいても……誰かが私達を引き離そうとしていても、絶対に、見つけに行くよ。お別れなんかしない」

揺れる前髪から美しい双眸を片目だけ覗かせながら、幼馴染の少女は微笑む。

「お前は春姫を見つけてきて取り返してきた。なら俺達もそれくらいのことばやらないとな」千草の言葉に命が青紫の瞳を見開いていると、桜花も笑いかけた。

自分が、春姫が、ベル達が抱えている本当の想いは、今千草達が言ってくれたことと同じで……。けれど、それぞれが抱えている本当の想いは、今千草達が言ってくれたことと同じで……。

何も聞かず、淀みなく答えた桜花達に、命は自分の瞳が潤むのを感じた。

「——お前等、もう昼だ！ 飯にするぞー」

いつから見守っていたのか、本拠の玄関で腕を組んで立っていた男神は声を張る。

口もとに笑みを浮かべていたタケミカツチは、命にも言った。

「命、お前も食っていけ！」

「……はいっ」

こぼれる涙を必死に隠しながら、少女は、今だけは家族の優しさに甘えることにした。

異端児達的一幕

「うう~~~~つ、ベルうう……!」

竜女が、めそめそと泣いている。ダンジョン20階層、『異端児』の隠れ里。ベル達と離れ離れにされてからというもの、竜の少女ウィーネはずっとこんな調子であった。

「やべえ、ウィーネのやつ、すげえ泣いてる……!」

「リドガ、ツヨク言ウカラ……!」

地面に座り込む少女を見守る『異端児』達の中で、ラミアに非難された蜥蜴人のリドガ「オレっちのせいだよ!」と悲鳴を上げた。

下層域の隠れ里に移動しなくてはならない『異端児』達は、泣き続ける新しき同胞を前に途方に暮れていた。このような事例は初めてであるだけに彼等も状況を持ってあましているのだ。

「甘やかすからあなるんだ。私が異端児の規則を教えてこよう」

「ラーニエ、お前はまた待て!」

どこぞの軍人張りの威圧感をもって不穏な発言をする人蜘蛛に、「また新入りに『洗礼』する気か?」とリドは割と本気で焦りの超えを下げた。

「ウィーネ、あれが最後ではありません。また会えるとベルさんモ言っていたでしょウ?」

近寄って、優しく語りかけてくる歌人鳥のレイに、ウィーネは涙を溜めつつ一度泣き止む。

「フンツ、冒険者ナド欲ニ目ガ眩ミ早死スル連中ダ。期待スルダケ無駄ダロウ……!」

と、人間嫌いの石竜のグロスはそう言ってから、はっとした。

見れば、再び涙腺を決壊させたウィーネが「ベルう~~~~!!」と勢いよく泣き始める。

「アホ!」「馬鹿!」「石頭!!」と『異端児』中から非難轟々の嵐を浴びる石竜は「又ウウウ……!?!」と呻き声を上げる。

「こうなったら……!」

「フィア!」「何か手があるのか?」

収拾のつかない事態に、半人半鳥の少女が身を乗り出す。彼女は器用に同胞の一人を抱き上げ、ウィーネにそつと差し出した。一角兎を。

「ウィーネ、どうです? このアルル……あの地上のお方とそっくりじゃないですか?」

『キユ!』

「……!」

ぎよつとする一角兎を、ウィーネは受け取った。激しく嫌がるモコモコをまるでぬいぐるみのように抱きしめ、泣き止む。その光景に「よし」「しばらくはあれで凌ごう」と『異端児』達の間で満場一致する。『キユ!』と悲鳴を上げる一角兎の抗議を受け、ウィーネと彼女が別々の小隊に振り分けられるのは、また別の話である。

とある魔術師の観察日誌

『ベル・クラネル達、そしてモンスター級の少女を監視しろ』

ウラノスに言われ、私ことフェルズは竜女を保護する【ヘステシア・ファミリア】を監視することになった。理知を持つモンスターの一匹が地上に進出したのだ。是非もない。

しかし『異端児』の悲願を思うウラノスの気持ちはわからなくはないが、あえて放置し経過を見守るとは……一歩間違えれば大事になるだけに、気が気ではないというのが正直な気持ちだ。まあ、他ならない彼の神意だ、拾われた身である私は粛々と命を全うしよう。

今日から使い魔、梟のガフィールを飛ばして【ヘステシア・ファミリア】を観察する。同時に眼晶から得る情報をもとに日記という形で記録を残すことにしよう。私も常にウラノスの側にいるわけではない。逐一報告せずとも、これを提出すれば十分だろう。

さて、本当に【ヘステシア・ファミリア】は『異端児』の希望となりえるか……今回もあまり期待せず、見守らせてもらおう。



観察一日目。

日中は本拠から神ヘステシアや団員達が出払う中、当の竜の少女はあの新人冒険者ともう一人、狐人の少女と館に残った。彼女達が三人で過ごす光景は、そこが館の中庭という小さな箱庭に過ぎずとも、平和と言える光景だった。

今も都市を賑わす新人冒険者……ベル・クラネルは竜の少女に随分と懐かれていたようだった。言動を窺う限りあの竜女は迷宮から産まれたばかりだと予想できるが、ああまで『異端児』が冒険者に心を許す姿を私は目にしたことがない。

前述した予想を踏まえるなら、刷り込みに類する現象だろうか。これはベル・クラネルの対応が前提条件ではあるが、それからすぐに起こった一悶着は、私の考察を裏付けるような光景だった。無意識の内に他者を傷付け泣き崩れる竜の少女に笑いかけ、受け入れられる。彼の眼差しと行いは、傍から見ても情に溢れるものだった。

飛んだ笑い種だが、この日記の「一頁目から『あの少年ならば』と希望を抱きかけている私が確かにいる。筆を走らせるこの感情は興奮にも近いものだろう。内心でウラノスの判断を危ぶんでおきながら、本当に現金なものだ。あの少年が忌避せず、ましてや竜女という稀少種を私利私欲のために利用しなかったことも含め、彼等の出会いには大いに興味が沸いた。機会があるならば、いつか聞いてみたいものだ。

一方で、観察を続ける上での留意点も浮上した。

んだよ!」

らしい。

なんなのだ、この【ファミリア】は……。

いわゆる女の修羅場なのだが、ベル・クラネルは情けなく右往左往するばかり、おろおろするヤマト・命に抱き着く竜の少女は神ヘステイア達の形相を見て泣き喚くという地獄絵図だ。溜息しかついていなかったヴェルフ・クロツツに積もる心労が他人事ながら心配になってきた。

どうやら【ヘステイア・ファミリア】は、ヤマト・命を除いた約八割もの女性陣がベル・クラネルに好意を寄せているようだ。……なんなのだ、この【ファミリア】は。

彼の女神フレイヤや男神アポロンなど、主神がいわゆるハーレムの状態を形成する様式は数多く見受けられるが……この派閥は竜の少女どうこう以前にベル・クラネルを囲い込むために結成されたのだろうか？ 私の目にはあの少年が女泣かせや気が多い男、あるいは『ハーレムを求めてなんちゃら』などと抜かす俗物には見えない……ふっ、我ながら自分の想像に笑ってしまう。

ともかく、彼女達のあの鬼気迫る光景は、生後間もない『異端児』を保護するに当たって教育上非常によくはない。昨日とは打って変わって猛烈に不安になってきた。

これは、ベル・クラネルを中心に人間関係を洗い出す必要があるようだ……。



観察三日目 朝。

ベル・クラネルを軸に観察を続けていくと、色々わかることがあった。それは彼が古参であるが故の名ばかりの団長ではなく、主神や団員達から信頼を寄せられているということである。派閥最年少であり、時折目を塞ぎたくなるほど滑稽な姿を晒しているにもかかわらず、だ。

その信頼も団員達からすれば弟を見る兄や姉のような感情なのかもしれない。しかし少年の言動は愚かで、同時に周囲を引き付ける。彼の言うことならばと信じ、支えようとしている。中でも神ヘステイアはその姿勢がより顕著のように感じられる。

竜の少女はもとより、少年との出会いの縁が今の【ヘステイア・ファミリア】を形作ったのかもしれない。

今日、こんな一幕があった。

「春姫は、ベルとどんなふうに出会ったの？」

「私は……この都市の場末にある、夜の街の中でございます。ウィーネ様の時と同じように……あの方が、命様と一緒に助け出してくださったのです」

「ふふつ、あの時のベル殿は都市を出る覚悟もしていましたよ、春姫殿。貴方を守るために駆け落ちし、強くなって必ずまたここへ帰ってくる、自分に啖呵を切つてみせたのです」

「ええっ!? ほ、本当でございますか!？」

「はい、自分もそれに応じました。心を揺らされたのです。苦しみながら、それでも貴方のことを想い続けていた彼の言葉が……とても、嬉しかった」

「……いいなあ、春姫」

ベル・クラネルのいない、中庭での出来事だ。

狐人の少女は「はう〜」と奇声を上げ真つ赤になつて身悶えていたが、その毛並みのいい尻尾は犬のようにばたばたと揺れていた。彼女は非常にわかりやすい。

サンジヨウノ・春姫。

初日から察していたが、彼女はベル・クラネルにはつきりと慕情を抱いている。新人団員としてギルドに登録された派閥資料の元大派閥所属という一文、そして件の会話から顧みるに、あの【フレイヤ・ファミリア】が勃発させた大抗争の中で、ベル・クラネルとの間に何かがあったのだろう。元娼婦の身売り、いや身請け……あの少女にとっては相応の恋愛譚であるうものが。全くもつて羨ましい限りだ。

少年に助け出されたと言う彼女は、【ファミリア】の中でも特に竜の少女を可愛がつている。

それが似た境遇から来る哀れみなのか共感なのか、あるいは慈愛なのかは判然としない。ただ確かなのは、『怪物』に対する忌避と嫌悪、偏見に負けない感情だということだ。竜の少女もベル・クラネルとしない時は大抵サンジヨウノ・春姫と行動をともしている。率先して歩み寄つた彼女に心を開いているのだ。ウラノスと『異端児』達が求める一種の理想だろう。あの狐人の少女は得難いものを持っている。

ヤマト・命は、そんな彼女に仕える極東の侍、あるいは忍のような少女だった。きつと同郷なのだろう、その間柄は旧知の仲を感じさせる。当初はうろたえていたものの、サンジヨウノ・春姫の説得もあつて竜の少女を受け入れようと努力しているようだ。まだ心のどこかで少女の怪物性を警戒し、常に目を光らせているが、サンジヨウノ・春姫と戯れる光景を眺める瞳は、優しさにも染まつている。

私見ではあるが、【ヘステシア・ファミリア】での彼女の立ち位置はヴェルフ・クロツツと同様に中庸だ。甘くもなく、非情にも徹し切れない。生真面目で義理高いのだろう、何より家族想いのように思える。派閥移籍の経緯からもわかる通り、彼女は誰よりも潔白だ。

サンジヨウノ・春姫も、ヤマト・命も、竜の少女に対する姿勢はベル・クラネルから派生している。全て、あの少年への信頼と表裏なのだ。

ベル・クラネルが介在していなければ、恐らく、彼女達の今の姿は存在しなかった。何度も切り捨てられてきたリド達……多くの『異端児』と同じように、分かり合う機会すら

設けられず、迫害されていた筈だ。

過大評価が入っているだろうか？　しかし、何かがなければ私が目している光景はとてもではないが叶わなかったのは事実だ。それほど人類と『怪物』の存在は隔たっている。

底抜けのお人好しと言ってしまうまでもだが……ベル・クラネルの愚かな行いと、彼を信じた少女達の眼差しが、一匹の『異端児』を今も笑わせているのだと、私はそう信じたい。



観察三日目　昼。

リリルカ・アーデは現実主義者だ。

それを今日、確信した。

館の一室に集まった際、竜の少女を中心にベル・クラネル達が歓談していたのだが、彼女だけがその輪に交ざっていなかった。いや、この表現は正しくないだろう。数日前と比べて輪をかけて距離を置くようになったのだ。あたかも距離を縮めていくサンジョウノ・春姫達と反比例するかのよう。己を戒めるかのよう。

【ハスティア・ファミリア】の中で、誰よりも竜の少女と接点を持っていないのは彼女である。私が監視を始めてからというもの、極力自ら関わろうとしていない。竜の少女を遠くから見

つめる視線は通常のモンスターに向けられるものと何ら変わらないものであり、その双眸はまるで薄い氷の膜が張られているかのようだった。だがまあ、今日に限っては、ヴェルフ・クロツの差し金で少女の方から寄ってきては抱き着かれ、烈火のごとく叫び散らしているのだが。小人族という種族が災いしたか。

我々の事情からすれば、最も注意すべきは彼女かもしれない。

彼女は秤にかけられる人物だ。同時に切り捨てることのできる小人族でもある。

リリルカ・アーデはその時がくれば、躊躇なく【ファミリア】を優先し、竜の少女を突き放すだろう。

残酷、とは言わない。

それは彼女がそうならざるをえなかった歴史であり、身に付けた強さであるからだ。

人物情報によれば移籍前の所属は【ソーマ・ファミリア】。底辺の世界を知っている彼女だからこそ現実から決して目を逸らさず、樂觀も犯さないのである。彼女は常に状況というものを客観的に俯瞰する癖を得ている。

実質、団長であるベル・クラネルを差し置いて、神ハスティアとリリルカ・アーデが【ファミリア】の中核だろう。神ハスティアがダンジョン等と同行できない以上、戦場の指揮や判断は彼女に一任される可能性が高い。参謀と呼ぶに相応しいだろうか。

この【ファミリア】の中で私と一番近いのは彼女かもしれない。ウラノスに拾われる前から

人の闇と言えるものに身を投じてきた覚えがあるが、リリルカ・アーデが時折見せる横顔には共感を抱く瞬間がある。こちらの手札を切る折には、まず彼女と話を交わしてみるのも一つの手だろう。

ただ面白いのは、そんな彼女もベル・クラネルに好意を寄せ、献身的に尽くしているということだ。彼女の場合はより少年を害意から守ろうと、矢面に立とうとしている節があるが。こういつては何だか忠誠を誓った騎士——いや騎士の小姓と言った方がいいか。その容姿も相まって微笑ましくもあり可愛らしくもある。ああいった愛嬌だけは私にはないものだから。

……不味いな、血迷った。私は何を書いているのだ。これをウラノスに見せるのか？

彼に提出したらしたで顔色一つ変えず淡々と読み進める光景が目に見えようだが……私が耐えられそうにない。

もう一冊、真面目な日誌を用意するべきだろうか？ だが、しかし……

(何度も書き直した跡、一部の頁を丁寧に切り取った痕跡が残されている)

閑話休題。

一方で、ヴェルフ・クロッツ。

リリルカ・アーデとは異なり、彼が最も私と対極の位置にいる。あの青年の胸中を推し量る

ことが一番難しい。

一介の魔術師である私に対し、彼は鍛冶師。

この時点で私達の住む世界の隔絶がわかるというものだろう。

ベル・クラネルを支えるヒューマンの一人であることは間違いないが、彼は彼なりの判断基準を持っている。職人気質とも言われるであろうものだ。彼は己の意志にそぐうことならば名誉も富も擲ち、他者からの糾弾も厭わないだろう。一度是としたものは唾棄されるものであつても、泥ごと飲み干すに違いない。逆もまた然り、なのだが。

早い話、竜の少女の如何によつては彼女の味方にも敵にもなるということだ。その見通しが私にはできない。

理論と分析に基づきがちな私達魔術師と比べ、生粋の『職人』は信念と呼ぶものに従つて動く。彼等は信じた道に即した行動理念を持っているのだ。往々にしてその行いは魔術師の予想など歯牙にもかけない方向へ行きがちとなる。分析できない、ということとは理論派の魔術師が恐れる最たる例だ。

前述の頁で彼の立ち位置を中庸と称したが、何てことはない、私は未だに彼の扱いを持ってあましているだけである。

あえてヴェルフ・クロッツの立場を定義するというのなら、派閥の『ご意見番』だろうか。

ベル・クラネルは勿論のこと、時折迷った表情を垣間見せるリリルカ・アーデも、憎まれ

口を叩きながらヴェルフ・クロッツに意見を仰ぐことがある。彼の忌憚きたんのない発言は現実主義者リアリズムの彼女をして指針の一つになるのだろうか。

これは今日の会話の一つだが、

「ヴェルフ様……先日したお話を忘れたんですか？ 彼女は怪物モンスターです、あんなに接してヴェルフ様まで情にほだされてしまったら、この【ファミリア】は……」

「そう何でも目くらまらを立てるな。これは鍛錬たんれんでも同じだけだな、いい刀剣を打つ時、どうしたって鉄は硬いだけじゃ駄目なんだ、柔軟性たんぜんせいってやつも必要になる」

「……リリは、融通が利かないと？」

「そこまでは言っていないぞ。ただ、相手のことを知らないで何もかも決めつけるのは早合点はやあてんだろう？ 注闊うかつに踏み込またくないのはわかるけどな。何かわかれば、変えられることもある。

俺はそうして武器を打ってきた」

「……」

「リリスケも一度あいつらのところに加わってきたらどうだ？ 俺がお前の代わりに肩肘かたひじを

張っておいてやるぞ？」

「……知りませんっ」

彼等の関係性を如実に物語っているように思える。

歴史という点からしても若過ぎる【ヘステシア・ファミリア】であるが、その中でもヴェルフ・クロッツは最年長。鍛冶大派閥ウラストスファミリアに身を置いていた経験を活かし、さながら家族を手助けする長兄のような役割を自ら課しているのかもしれない。

何だかんだと言いながら、彼等はさり気ないやり取りの中でも互いを補充し合っている。

いい【ファミリア】だ。お人好しが多いくらいはあるが、均衡きんこうが取れている。

ベル・クラネルの人徳、もしくは神ヘステシアの神徳か。

これがベル・クラネル以外の者は他派閥からの改宗コンバージョンだというのだから驚きである。オアリオの中でも珍しい【ファミリア】の一つには違いない。



観察四日目 朝。

今日の【ヘステシア・ファミリア】は朝から賑やかだった。神ヘステシアがバイトを休んでいたことが大いに起因きんしている。

これまで日中は主神ミカミ自らバイトに勤しみ、館を空ける時間が多かった。数日観察を続けてきて、主神が働かなければならないほどの極貧派閥には見えないが……やはり数億ヴァリスの

借金があるというのは本当だったか。全くもって話題に困らない【ファミリア】だ。

神ヘステイアは竜の少女に懐かれていたサンジヨウノ・春姫に女神なりの対抗意識を燃やしているのか、ことある事によく少女の面倒を見ていた。というより、あれは単純に子供が——たとえ怪物であつたとしても——好きなのかもしれないが。

太陽の光の下、青々とした中庭で戯れる女神とモンスターの姿は言いようのない情緒をもたらしてくるものだった。深くは語らないが、いがみ合っていたエルフトドワーフが手を取り合つて仲良くダンスを踊る以上に不可思議な光景のように感じられたのだ。

涼し気な木陰で、遊び疲れた竜の少女を膝の上に寝かせていた神ヘステイアの神意は私にはわからない。だが彼女が、司る事物の一つに慈愛が含まれているだろうことは、少女の寝顔を優しく見下ろす眼差しが教えてくれた。普段の騒がしい振る舞いが霞むほど、彼女は女神の静謐を纏っていた。

その後は、寝ぼけ眼の竜の少女が様子を見に戻ってきたベル・クラネルと神ヘステイアのことを「父親」「母親」と呼ぶなど、一体何を教え込んだのか小一時間間い詰めたい事案が発生した。二人は真つ赤にした顔を見合わせ、すぐに家族のように笑い出したが、危機感を察知したリリルカ・アーデが介入してくるなど、いつも以上のドタバタが巻き起こることとなった。柄にもなく感慨に浸っていた私の感動を返してくれ。

行き場のない小言は置いておくとして、私は神ヘステイアが竜の少女と最初に会つた神で良かったと安堵している。感情論を抜きにしてしまえば、ベル・クラネルが少女を見つけ出したくれた以上に。

事情に精通した者がいたとして、今の神ヘステイアの姿勢を見て楽観的と言うだろうか？ 私はそうは思わない。この状況に一番うろたえているのは他でもない全知全能の彼女であり、その上で世界から弾き出された異端の少女を受け入れている。

種そのものではなく少女を、『怪物』の威容ではなく心を感じ取り、手を差し伸べているのだ。ウラノスの言う通り、彼女は神格者だ。

慈愛の女神であり、嘆願者を庇護する炉の光だ。

彼女を欠片も疑つていなかったウラノスの気持ちが変わつたような気がする。

寄り辺のない子を守る庇護者の名は彼女にこそ相応しい。

ただ一点……重度のジャガ丸くん信奉者、あるいはジャガ丸くん中毒者であることは認めざるをえない。「ほらウイーネ君、ジャガ丸くんだぜ」「わーい！」というのは今日もあつた事柄だが、見事に竜の少女は神ヘステイアに飼い慣らされている。

『異端児』をジャガ丸くんで購入すると……やはり彼女も神の一柱ということか。

いかん、割と深刻に動揺している。

ペンを持つ手が震え、上手く共通語が書けない。

観察四日目 夜

いつの間にか人間観察の様相を呈しているこの帳面だが、この際なので肝心のベル・クラネルのことについても触れようと思う。

まず率直に記しておく、彼の身の回りを観察することが最も困難であった。

ベル・クラネルの察知能力には目を見張るものがある。その点に限って言えば上級冒険者の中でも秀でていると言わざるをえないだろう。何度怪しまれ、監視を中断することになったことか。

まさに臆病な兎のごとく……とは言い過ぎだろうか。

素直に贅辞を送るならば、流石第二級冒険者といったところだろうか。【リトル・ルーキー】、世界最速兎の名声は誇張でもなければ粉飾でもないということだ。

話が逸れたが、とにかく苦労した。私ではなく使い魔が、だが。

ベル・クラネルに決して視線を向けないよう、正視を避けるように教え込み、距離も自然取るように命じた。羽根の音を鳴らさないようにするのは当たり前で、隠密も徹底したほどだ。

この仕事が終わった後は、好物の鼠を山ほどあげて労わらなければ拗ねられてしまう……。

この四日間、ベル・クラネルはほぼ童の少女とともにあった。彼女が減多にベル・クラネル

の側から離れようとしなからである。風呂等に付いてこようとするのは当たり前、就寝の際は同じ寝台にもぐり込み、便乗しようとする神ヘステティアがリルカ・アーデ他と幾度となく衝突するのを脇に抱き枕にする。様々な意味で気苦労を絶やせないベル・クラネルに対し、ヴェルフ・クロツゾ曰く、

「初めてできた娘に悪戦苦闘する父親みたいな」

とのことだ。中々に的を射ているように思える。

今でこそ慣れたように苦笑を浮かべながら対応するようになったが、当初ベル・クラネルは童の少女に抱き着かれては何度も赤面していた。彼女の行動に驚いては走り回り、悲鳴を上げては対処に奔走し……振り回されてばかりだった。

少年の幼さと未熟さが先行する滑稽な姿はとてでもないが上級冒険者には見えず、賑わう世間の評価とはことごとく乖離していた。事実、『鏡』によって街に映し出された戦争遊戯の中で、熱戦を繰り広げた姿と今の彼は似ても似つかない。

後は……これは愚者を名乗る私のただの予感だが、彼には女難の相があるように思える。それは決定付けられた運命ではなく、もつとこう、知らずの内に植え付けられた宿命というか少年を少年たらしめる由縁というか彼を育てた親の責任というか……上手く言えない。

女神の寵愛を受ける下界の者は高い確率で災難——女神本人に悪気はなくとも移り気な他神が面白がってかき回す真似や横恋慕をしてくる場合が多い——もとい退屈な人生を送ら

ないという。ご多分に漏れず、かはわからないが、あの少年はどうなるだろうか。

ただ私は、彼が竜の少女に向ける真心に關しては、神へステイアのものと同様なほど信頼している。ことあるごとに仲間に対し申し訳なきような顔を浮かべながら、それでも身を碎き続ける姿は打算とは無縁のものだ。絆されたと言えはそれまでだが、彼の純然な誠意は好感を通り越して今の私には眩し過ぎるくらいだった。

それと同時に、彼はやはりまだ子供だ。

竜の少女から解放された時に見せる、その不安と戸惑いの表情が物語っている。

何の答えも見出せていない、彼の心の内を。

就寝間際のことだ。

使い魔の目が届かない館の奥へ引き込む【ヘステイア・ファミリア】を見て、今日の観察も終わりかと思っていた時、ベル・クラネルと竜の少女が二人でこそこそと、寢室から館の廊下、そして窓を通って館の外へと出た。

何事かと警戒する私の心配を他所に、彼等は中庭側に面する屋根の一角に腰を下ろし、空を見上げた。眼晶を持って観察を続けていた私も、屋外に出て納得した。

頭上には美しい星々が瞬いていた。満天の星空という言葉がまさに当てはまるほどの。

恐らく、竜の少女が空を見たいと言ったのだろう。琥珀色の瞳を輝かせる彼女を見て、べ

ル・クラネルも私も苦笑してしまった。だがすぐに引き込まれんばかりの雄大な空の世界に、私達の視線もまた釘付けとなった。

同じ夏の夜空を、同じ街から同じ時間で私達が眺めていると、不意に蒼い闇夜を一条の光が横断した。流星だった。走り抜ける星の輝きに竜の少女は息を止め、すぐに興奮した様子でベル・クラネルにあれは何と頻りに尋ねていた。思わず目を奪われていたベル・クラネルは説明し、星が消えぬ内に願いを唱えればその願いが叶う、という子供によく聞かせる言い伝えを教えた。

やがて竜の少女は目を瞑り、その小さな唇を動かし始めた。

流星は消え失せたにもかかわらず願いを捧げるその姿に、ベル・クラネルが「何をお願いしたの?」と問うと、少女は満面の笑みを浮かべた。

「ベルと、みんなと……ずっといっしょにいられるように、って」

その言葉を聞いたベル・クラネルの顔を、私は今でも思い出すことができる。

彼はしばらく沈黙を保った後、普段とは異なった笑みで「ずっと一緒にいられるよ」と、そう答えた。

その時の私が抱いたものは、はつきりとした失望感だった。

ベル・クラネルは何の覚悟もなく、安易な気休めに走ったのだ。
 安息の未来を疑い続けている自分すら偽って。

何の答えも出せないまま、現実から目を背けた。

顔を綻ばせる竜の少女に抱き着かれ、胸に抱きながら、ともに夜空を見上げる少年の横顔の
 何と儚^{はかな}かつたことか。

遠からず破綻は訪れる。

私は確信してしまった。

彼等【ヘスティア・ファミリア】の有り様は美しい。だが、待ち受けている未来はリリル
 カ・アーデが危惧^{きぐ}しているものに違いない。そして彼等に、ベル・クラネルにそれに立ち向か
 う力はない。いつか我々が介入する日が来るだろう。

やはり一【ファミリア】に、一人の冒険者に『異端児^{ゼノス}』達の希望を求めるなど酷だったのだ。
 少年の同情から派生した現状は今も少年自身を苦しめ、良心と懊惱^{あうのう}の狭間^{はざま}に身をたゆたわせ
 ている。だが彼の葛藤^{かつどう}など顧みることなく、世界は決断の瞬間を迫ってくる筈だ。

彼の選択する答えは、何なのだろうか。

これまで何度も見てきたように、竜の少女を切り捨てるのだろうか。

人類の総意に屈し、救いを求める声に背を向けるのだろうか。

あるいは第三の答えを出すのだろうか。

いや、希望的観測は止そう。私の願いなどあの流星に届く筈もないのだから。

今の彼等の時間も空を駆け抜けた星の輝きと同様、閃光のような一瞬に過ぎないのだ。

彼等も、いずれは他の冒険者達と同じように――

「……止めた」

私は、文字を連ねていた手の動きを止めた。

陰気臭い自室の中で一人、開かれている帳面の頁を見下ろし、持っていた羽根ペンを机に放
 り出す。

こんな私意と悲嘆にまみれた調書など、報告にもならない。やはりこの帳面は提出せず、私
 個人の秘匿の日記にするとしよう。彼等の言動を勝手に解釈した挙句、その心の内を邪推した
 報告書など無粋^{ぶすい}なだけだ。

ウラノスにはこう言えればいい。

彼等は大丈夫だと。竜の少女を傷付けることはない。

ほんの僅かな星屑の光に過ぎずとも、我々が望む希望の兆しに違いないのだと。

愚かでも、今も無様にあがき続けていたとしても、彼等の在り方は尊い。

「……」

私の考えは変わらない。

彼等は遠くない将来、非情な現実と直面する。

その時はまだ傍観者として見守っているだろう私達の視線の先で、【ヘステイア・ファミリア】は——ベル・クラネルはどのような答えを出すのか。

願わくは、彼等の道に幸があらんことを。

あの小さな箱庭の中で少年と少女が浮かべていた笑顔は、きつと何よりも、かけがえのないものであるのだから。

「……お前もそう思うだろう、ガフィール？」

古い蔵書で溢れた、薄暗い『賢者』の部屋。

語りかけられた梟の使い魔は目を瞑り、頷くようにホーと鳴いた。

隣はリリの特等席

「ベル様、このままでよろしいんですか？」

バックバックを揺らしながら夜の道を歩くリリは、隣にいるベルに問いかけた。

使い魔の梟から愚者の密書を受け取った【ヘステイア・ファミリア】は、賢者の魔道具を手入するため『魔女の隠れ家』にリリとベルを派遣していた。今も彼女達を多くの『目』が追跡している中、さも道具の買い出しを装って魔道具の隠し倉庫を目指している最中である。「このまま、つて？」

「街の方々に誤解されたままではありませんか。意地汚い兎とか、拳句の果てには『怪物趣味』なんて言われて……ずっとこのままで、苦しくないんですか？」

尾行の目を気にしつつ、世間話のつもりで尋ねるリリだが、これは気になっていたことだ。心配も含めて見つめる彼女に対し、一度視線を逸らしたベルは、指で頬をかいた。

「正直に言えば、すごい苦しい、と思う。そうじゃないんですって本当は言い訳もしたいし、街の人達が笑いかけてくれてたあの時に戻れたら……そんなこともやっぱり考えちゃう」

神妙な顔で聞き入るリリに、ベルは胸中を吐露した。

もしかしたら挫けてしまおうかもしれない、割り切れる日は来ないかもしれない、と。

「でも、今だけは……少女達のために、頑張りたいんだ」

弁明も弁解もきつと後でできる。手遅れになるかもしれないけれど、それでも今は『異端児』を助けたいと、ベルは曇りのない瞳で言った。夜空を見上げるその姿が悲壮感溢れるものとして映ってしまい、リリは眉尻を下げてしまう。——だが、そこで。

「それに、さ。僕にはリリ達がいてくれるから」

「えっ？」

「リリ達が手を貸してくれるから、挫けずに頑張れるって……そう思ってるんだ」

本当にありがとう、とベルは照れ臭そうに、けれどはっきりと告げた。

瞳目するリリは頬に熱が集まるのがわかった。次いで、嬉しさから微笑が滲み出るのも。しかしそこで彼女は熱がることを思いつき、小悪魔めいた笑みを浮かべ、告げた。

「——いつでも私を頼ってくださいね、ベル。ずっと、貴方を助けます」

大人びて艶めかしい『姉』の声で囁くと、びくつ、とベルは肩を上下させる。

少年はじわじわと頬を赤らめたかと思うと、情けない声を出した。

「ず、ずるいよお……」

「ふふっ」

リリ自身、頬と胸を温かくさせながら笑う。

一つだけ年上の少女は、守るように、支えるように、彼の右手に指を絡めるのだった。

女神インターミッション

Lv.3

力・D 577 ↓ A 812 耐久・D 508 ↓ A 855 器用・D 582 ↓ A 814 敏捷・A 807 ↓ S 998

魔力・D 531 ↓ B 777

幸運・H 耐異常…H

「わーお……」

能力値が激化した少年の背中を見て、ヘステイアは口を開いて驚嘆した。

『異端児』の救出作戦当日。本拠から『ダイダロス通り』へと向かう直前、夕刻に【ヘステイア・ファミリア】は女神のもとで全員【ステイタス】更新を行っていた。数えるほどしか能力値が上昇しておらず唸るヴェルフ達と比べて、やはり少年の成長は抜きん出たものだった。「ベル君、確か狩獵者達と激しくやり合ったんだっけ？」

「あ、は、はい……まあ」

言葉を書きながらいそいそと服を着るベルを尻目に、ヘステイアは共通語で書き写した更新用紙を見下ろす。前回の更新が約一週間前——都市の失意に晒された直後は流石に更新作業

をやるうとは言えなかつたので——その間にベルは異端児討伐の強制任務から狩獵者達との交戦、更に暴走した竜娘との追走劇と、いわゆる修羅場と言えるほどの場数を目まぐるしく踏んできた。久方ぶりの能力値の激上も頷ける。

（流石に【ランクアップ】はできなかったか……）

Lv.2よりLv.3、Lv.3よりLv.4と、高い階位であるほど求められる上位の【経験値】の質と量が高くなるのは道理だ。能力値の上昇傾向から言って、もしかしたら、と僅かな希望を抱いていたヘステイアだが、そう上手くはいかないらしい。

「……ベル君、ごめんよ。やっぱり君に負担をかけることになる」

「大丈夫……かはわからないですけど、平気です、神様。できる限りのことはやります」

いつもはついつい不機嫌になりそうになる規格外の成長力も、今はかりは心強い。

だが、【ロキ・ファミリア】を相手取るにはあまりにも頼りない。

椅子に腰かけるヘステイアが悄然としながら言うと、立って服を着たベルは笑ってみせた。更新用紙を受け取って仲間が待つ居室に戻るベルを見送った後、彼女もまた立ち上がる。

「あの子が成長する度に散々文句を言っておいて、期待に添わなかつた途端残念がるつていうのも虫のいい話か……よしっ、ボクもあの子達のサポートを務めなきゃ！」

たった一夜で少年の能力が再び限界突破することを、女神はまだ知らない。

無法者達の恩返し

「てめえが知ってること……洗いざらい吐いてもらうぜ。」

「冒険者達を撃つたんだからよお、こうなっても文句は言えねえな?」

「てめえは今、『悪者』だからなあ〜」最初からこうしてりゃ良かったんだ」

ぞろぞろ、と現れる柄の悪い冒険者達と僕の間で、「悶着が起ころうとしていた。

『異端児』救出作戦が始まる直前、僕が夜の『ダイタロス通り』に入ってからしばらく経った後のことだった。迷宮街南区に進路を取っていた僕を、同業者達が取り囲んだのである。

これから最大派閥の陽動を務めなくてはいけないのに……悪い時機で冒険者から『手荒な真似』を受けようとしていた。いや、もしかしたらずっと窺っていたのかもしれない。こうして私刑する好機を。『ダイタロス通り』は貧民街でもある。住民も避難して人目にもつかない今、私刑を執行するには格好の環境だ。

「L.V.3だろうと、上級冒険者をこれだけ揃えりゃ敵わねえだろう」

数は三十人ほどといったところ。確かに相手方の言う通りだ。手の内を知られるかもしれないけど、僕が魔道具でこの場を切り抜けるしかない!と決断しようとした——その時。

「俺は『リトル・ルーキー』の側につくぜ!」

「なっ……モルド、てめえ!? 裏切るのか!」

一団の中から歩み出してくる冒険者に、「えっ?」と僕は呆けてしまった。一人だけじゃない、彼の後に集団の半数が僕のもとまでやって来て、うるたえる冒険者達と対峙する。

「モ、モルドさん、いたんですか? いやっそうじゃなくてっ、どうして……?」

「そりゃ勿論、ここでてめえに恩を売って、賞金首の懸賞金を山分けしようっていう腹よ!」
「思いもよらない答えに、僕の目は点になる。」

「俺達は下水道で蜥蜴人一匹にやられちゃったからな、あんなのと何匹も戦うなんてまっぴら御免だ。だから相棒、何も聞かねえでやるからお前がブツ倒してこい。そんで金をよこせ」

僕の首に太い腕を回し、血走った金の亡者の目で笑いかけてくるモルドさんに、笑みを引きつらせる。「せけえ」「汚え」と仲間のスコットさんとガイルさんの言葉が更に汗を誘った。

けれど、そこで僕は気付く。モルドさん以外にもいるこの人達は、みんな……18階層で僕に冒険者の『洗礼』を与えようとした、あのならず者達であるということ。

無法者達の宴を開こうとした彼等が、今はそれを阻んで守ろうとしてくれている。

……とんだ皮肉だ。でも胸が震えるくらいには、僕はどうしようもなく、嬉しかった。

「……すいません、お願いします!」

「おう、行け! モンスターどもをブツ倒してこい!」

乱闘騒ぎを背で聞きながら走り出す僕は、目もとを拭い、笑みをこぼしていた。

女神の衝撃

「闘牛本能」……ベル様の新しい『スキル』」

ベルが「ランクアップ」を遂げたその日。ヘステイアは「ファミリア」の者達に少年の新たな能力を話した。迷宮探索を役立てる上での情報共有である。

居室にベルを除いた全構成員が集まる中、メイド姿の春姫がほえーと感嘆する。

「例の急成長の『スキル』も含めて、これで三つ目か。ベルのやつ」

「戦闘に関わる『スキル』が三つというと、冒険者としてはかなり優秀な『ステータス』になりますね。ベル殿の場合、『発展アビリティ』も順調に発現していますし……」

昇格はもとより、少年の目覚ましい成長に唸るのはヴェルフと命だ。確実に新たな力が身に付いていつに間に喜ぶ半面、このまま置いていかれるわけにはいかないという悔しさと、後は仲間としての自覚と想いを新たに作る。

「まあ、『スキル』の方は限定した状態じゃない発動しないんだけどね。それにしても『闘牛本能』だなんて……ベル君らしいというか、何というか」

「はは、そうですね。あいつは相当猛牛と因縁があるみたいです」

「『異端児』の武人、アステリオス殿はそれほどベル殿に影響を与えたのでしょうか」

やれやれと苦笑するヘステイアにヴェルフも命も笑い返す。都市を今も興奮させている好敵手との一戦を拝めなかったのが悔やまれる、と冗談交じりに言っている、と、

「憧憬一途」……「闘牛本能」……」

春姫がやけに深刻そうな声で、「スキル」の名を並べた。

「どうしたんだい、春姫君？」

「あ、いえ、その……『英雄願望』はともかく……ええつと、なんと言いますか……」

妙に歯切れが悪い狐人の少女に首を傾げるヘステイアの真隣で、それまで一言も喋らず黙っていたリリが、ぼそっと呟いた。

「ヘステイア様に関係する『スキル』が、一つもありませんね……」

居室が凍りつく。

その事実が気付いてしまった女神の顔に、衝撃が走った。

「そ、そういえば……!? 憎きヴァレン何某、あまつさえ牛にも反応しているというのに、ボク由来の『想いの結晶』が一つも……う、うわああああああああああああああああああああああ!? どういうことだッベルくんっ!?」

頭を抱えて絶叫を上げたかと思えば、正気を失った表情で勢いよく部屋を飛び出す幼女神に、ヴェルフ達は手で顔を覆いながらうつむいた。

間もなく、女神にタックルをかまされた少年の悲鳴が、館に木霊するのだった。

恋するエルフ

「べ、ベル君！ 今夜……ご飯、一緒にどうかかな？」

エイナは意を決して、少年を食事へ誘った。

「ヘステイア・ファミリア」が予定している『下層』への遠征前、ギルド本部で取り組んでいるダンジョンの座学が終わった時間帯。本を片付けているその背中に、エイナが上擦った声を投げかけると、ベルは不思議そうに振り向いた。

「今から、ですか？ もう結構遅いですけど……」

「えっと、その、だからってどうか！ このままだと今日は私、一人でご飯食べるようだなって思っ……う、うんっ、それだけだよ？ 他意とかはべべべ、別にないからね!!」

言い訳がましい己の文句に悶え死にそうなりながら、エイナは頬を紅潮させる。

本当に、別にやましい気持ちがあるわけではない。ただ、そう、今日は座学が長引いてしまっ……て、せっかくだしベルとご飯をとものにできたら、それはとても嬉しいことで……何よりここ最近ずっと落ち着かない胸の音も『デート』の真似事をすれば少しは和らぐ気がして……。緑玉色の瞳をぐるぐると回しながら心の中で言葉を重ねていると、ベルは首に手を置いた。

「すいません、エイナさん、気が利かなくて。じゃあ、行きましようか？」

「え……は、本当？」

「はい。長引いたのは僕のせいですし……今日までのお礼も兼ねて、ご馳走させていただきます」
申し訳なさそうに、けれどくすぐったそうに笑いかけてくるベルを見て、「う、うん」とエイナは一気に舞い上がった。

「——いやあ、こうしてギルドの人間と飲むのは初めてだな？」

「そうですねー。ベル様がお世話になってるのに、こういう機会はなかったですしねー」

「うふふ、いつもお店を使ってくれてありがとうございます、ベルさん」

酒場『豊稔の女主人』。人寂しい夜を過ごすエイナのために、ベルは予定が空いていたヴェルフとリリを呼んで楽しく賑やかに大勢で食卓を囲んでいた。注文を運んでくるのはにこやかな笑みを浮かべるウエイトレスのシルである。

「そうだよね、ベル君だもんね……君はとっても優しいもんね……」

「エ、エイナさん？」

ぐずん、と涙を飲み込みながら力なく笑うエイナに、ベルは戸惑うばかりだった。

「それで、お二人で何をするつもりだったんですか？」

そして、満面の笑みで問い詰めてくるリリとシルに、エイナは赤面した顔を背けながらしらばつくれるしかなかった。

冒険者は見た

「あああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

25階層『巨蒼の滝』直下、巨大な湖めいた滝壺。ベルは輝白のナイフで無数の斬閃を描いていた。斬撃の結果に突撃するのは凄まじい速度で飛び交う燕のモンスター『イグアス』の群れである。迷宮の水流によってリリ達パーティから分断された少年はただ一人、下層最速と謳われる閃燕と真つ向勝負に臨んでいた。

冒険者とモンスターの、命を賭した戦いが繰り広げられている。

「……………なんだ、ありゃあ」

——その裏側で。

とある上級冒険者達は、その一部始終を目撃していた。

「白い髪の少年……………【リトル・ルーキー】……………いや、【白兎の脚】」

24階層と繋がる連絡路前、25階層の入り口。階層中央に広がる大空洞を一望できる断崖で、その冒険者達は、何百Mも離れた視界奥の光景に口を半開きにする。

彼等は宿場街を拠点にして『下層』に進攻を仕掛けるLv.3の上級冒険者達、言わばベテラ

ン勢であった。今もこの25階層に辿り着いたばかりで、さあ今日こそは到達階層を増やしてやろうと挑もうとしていたのだが……………閃燕と格闘している少年を見つけてしまい、放心していた。

『閃燕と会ったなら荷物を放り出して逃げる』。上級冒険者達の間では有名な文句である。

それを無視して真つ向勝負という名の奇行を繰り広げているベルに、遠い目をしてしまう。

『閃燕相手に、盾も装備しないで、得物一本……………』

『変態だ……………変態がいる……………』

『俺、【劍姫】があんな風に修行してたの見たことがある……………』

『下変態だ……………』

同業者の間では化物扱いされている『戦姫』が引き合いに出された瞬間、冒険者達は認識を等しくした。

『今日は、帰るか……………』

『ああ、なんかやる気なくした……………ていうか自信なくした……………』

来たばかりだということにすこすこ来た道を逆戻りし始める冒険者達。

幸か不幸か、前代未聞の『強化種』のいるこの場所に彼等は立ち寄らずに済んだ。

当然、この後すぐ少年と人魚が繰り広げる喜劇も目にもすることもなかった。

後日、ベルは『閃燕相手に祭りを繰り広げていた変態』と噂される羽目になる。

ささやかな夏色を

「あー、南国へ行きたいなあ〜」

ぐでー、とソファーに寝転びながら、神様がそんなことをおっしゃった。

「どうしたんですか、神様、いきなり?」

「どうしたもこうしたもないぜ、ベル君。もうすっかり夏だ、毎日熱くて堪らないよ」

珍しく迷宮探索もバイトもなく、気ままにホームで休日を過ごす中。神様は手もとの本から目を離さずに言う。日が暮れるのがすっかり遅くなっている近頃は、神様の言う通り、夏の到来を告げていた。地下にあるこの教会の隠し部屋はまだマシだけど、外に一歩出ればうだるような暑さに襲われる。連日の猛暑に耐えかねているのか、神様はぼやくように喋った。

「避暑地で涼むか、それか南国の海岸にでも行って、思いっきり夏を満喫したいもんだよ」

天上の神様らしからぬ、何だか俗っぽい発言に僕が苦笑していると、神様は本の頁をぺらりとめくる。挿絵付きの本の中には、神様の言う南国の光景が美しい彩りで描かれていた。

「青い海、青い空、白い砂浜……ああ、ベル君と二人っきり、海岸で追いかけてこしたい〜」
青と白の絵の具で塗られる本の世界に、神様は羨望の溜息をついた。

「せめて美味しい果実でも食べたいなあ……」

ヤシの実を始めとした熱帯果実。瑞々しい果物の頁を最後に、神様ははたりとソファーに顔を投げ出した。うつ伏せのまま、力つきたように動かなくなる。

神様の横で本を覗き込んでいた僕は、天井を軽く仰いだ。

小さな寝息が聞こえてくる神様をちらりと確認した後、静かにホームから抜け出した。

そして、一時間ほど経った頃。

僕がホームに戻ってくると、「んあ?」と神様が顔を上げ、ちよんどこ起きるところだった。

「あれ、ベル君どこかに行つて……な、何を買ってきたんだい、それ?」

寝惚け眼をこする神様は、僕が両手で抱えている籠を見てぎよつとした。

籠の中には大きな縞模様様の球形がごろごろと転がっている。

「都市の交易所で、買ってきました。夏の果物らしくて、『スイカ』、つて言うらしいです」
目を丸くする神様に、僕は照れ隠しの笑みを浮かべた。

「南国の果実じゃないかもしませんけど……食べませんか?」

固まっていた神様の顔に、みるみる内に笑みが咲く。頬を染めて、嬉しそうに微笑んだ神様は「ああ!」と大きく頷いた。

地下室から外に出た教会の片隅。井戸の水で冷やした後、縞模様様の分厚い皮を切る。夕焼け空の下で、僕と神様は真つ赤な果実にかぶりつき、笑い合った。

ゴーストスイーパー【剣姫】とお供の兎

【剣姫】、冒険者依頼に失敗する——。

その噂は瞬間に迷宮都市中を駆け巡った。

【ロキ・ファミリア】に所属する第一級冒険者の冒険者依頼達成率はほぼ十割。当然そこに【剣姫】の名も含まれている。手に負えない依頼がある場合、管理機関は【ロキ・ファミリア】あるいは彼女達と同格である【フレイヤ・ファミリア】に名指しで「強制任務」を発令するのが通例だ。何十人もの上級冒険者を皆殺しにした「強化種」の討伐、「深層」で大量発生した軍団の駆除……彼女達が解決してきた未曾有の事件は枚挙に暇がない。

だからこそ、【剣姫】が冒険者依頼に失敗したというその報せは衝撃的なものとなった。

出どころの知らない噂にもかかわらず冒険者達はあの【剣姫】が失敗した冒険者依頼とは一体どんなものかと酒場で頻りに議論したらしい。迷宮の深層域に採取・採掘物の収集を平気で依頼する豪商達もいかほどの無理難題であったのだと連日ざわめいたとか。

冒険者アイズ・ヴァレンシユタインを知る人達は、誰もが浮き足立ったのである。かく言う僕も、そんな一人だった。

「か、神様っ！ アイズさんが冒険者依頼に失敗したって、街で噂が……!?!」

「むくん、ヴァレン何某君が達成できないなんて、どんな冒険者依頼なんだ？ というか、あの娘が手を付けられないんだったら、それこそ第一級冒険者達が協力して当たらないとどうにもならないんじゃないじゃあ……!」

動揺しながら言うと、神様も両手を組んで唸ってしまった。

真偽はわからないけれど、噂の威力は僕達の【ファミリア】でも様々な憶測を走らせる程度には計り知れないものだった。

戦々恐々の感情が三割、あとはアイズさんへの心配の思いが七割を占める僕は人一倍そわそわしてしまふ。リリやヴェルフに呆れられてしまったほどだ。

「うーん、話を聞きに行ってみようかなあ。でも他派閥の僕が迂闊に【ロキ・ファミリア】に尋ねたらそれはそれで問題だし、もし聞いて嘘だったら何かみつともないし……!」

憧れの人物のことが気になりつつも、ダンジョン探索のため本拠の正門を抜ける。

リリ達はそれぞれ用事があるということで、久方ぶりの単独探索に赴こうとすると——。

「——ベル」

「ほわあ!?!」

通りの曲がり角で遭遇した金髪金眼の美少女、アイズさんその人に素っ頓狂な声を上げる。すこぶる仰天していると、アイズさんは見るからに悄然としていた。

散々ためらった後、うつむきがちに口を開く。

「私が今、引き受ける冒険者依頼に……協力、してほしい」

二度目の驚愕が僕を襲った。

まさかという思いで問い返してしまう。

「あのっ、アイズさんが冒険者依頼を失敗したって噂を聞いたんですけど、それじゃあ……」

「うん……本当」

ぎこちなく頷かれ、やはり衝撃に撃ち抜かれる。

とても強いこの人をここまで参らせる冒険者依頼が本当に実在するなんて。何より驚いたのは、そんなアイズさんも手こずる依頼に、僕なんかが協力を求められているってことだ。

「ええっと……何で僕なんかに？ それこそ最大派閥の人達の方が頼りになるんじゃないやあ……」

「ファミリア」のみんなは、駄目。みんなもそうだけど、ロキに事情を知られちゃうと……

絶対にかかわられて、変なこととしてくる……」

襲撃の隙を与えてしまうとのたまうアイズさんの声音は深刻だった。その表情もとても思い詰めていた。面と向き合っている僕が汗を流してしまうほど。

「ベルだったら、このことを、誰にも言わないでくれると思っただから……」

と、そこで、視線を地面に落とすアイズさんが今まで見たことないほどしおらしくなる。年相応の少女のように不安そうに、胸の前で両手をもじもじさせながら、いじらしく。

おずおずと、アイズさんは僕のことを見上げてきた。

「ダメ、かな？」

「——やりませうやらせてください任せてくださいッ!!」

上目がちに懇願してくるアイズさんに、僕は速攻で答えていた。

とてもとても可愛いつ、じゃなくてっ守ってあげたくなくなってしまっその姿に、頬を真っ赤にしながら騎士のごとく誓いを捧げる。もし神様がここにいたら『チヨロ過ぎるよベル君……』と失望されそうだけど、構いやしない!

憧れの人が自分を頼ってくれる、こんな嬉しいことに舞い上がらないなんて嘘だ!!

舞い上がったままじゃ当然いけないし、真摯に受け止めないといけないんだけど……この時の僕は、喜びと興奮のあまり声の上擦ってしまっほどだった。

「それでアイズさん! 僕に手伝ってほしい冒険者依頼って何なんですか!」

昂ったまま僕が尋ねると——アイズさんは暗然とした面持ちで、ぼそりと告げた。

「屋敷に住み着いている……幽霊退治」



「バ、ハハは……」

空が暗闇に閉ざされた、夜。

縛割れて黒ずんだ壁面、割れた上階の窓、住人がいなくなつて久しいことを告げる寂れた外観。周囲にはささくれだつた魔女の指を彷彿させる複数の枯れ木が生えている。

今にも雨が降りそうな不穏な闇夜を背負つて、それは建つていた。

いかにもといった、お屋敷だ。

「ここが、その女の子が言つていたお屋敷なんですか？」

「うん……冒険者依頼を頼まれた場所……」

アイズさんに依頼を出したのは、何と幼いヒューマンの女の子だつたらしい。アイズさんが街をたまたま歩いていたら、出会い頭のことだつたそう。

『冒険者様……お屋敷に出る幽霊をやつつけて』

面識のない無所属の一般人、つまり平凡な年端のない少女に話によると、その娘だけの秘密の遊び場で不穏な影が現れるのだという。黒い襦袢を纏つた亡霊らしき影が。

第一級冒険者の立場もあつて冒険者依頼の安請け合いはしないよう気を付けているアイズさんも、怯えている女の子を気の毒に思ったらしい。ギルドを通していない非公式な依頼、要はただの個人的な願い事を叶えるつもりで現場へ赴いて調査を実行し——街に流れている噂の通り、失敗してしまつた。『幽霊』の正体を突き止められないどころか、目の前の屋敷から敗走してしまつたのだという。そしてそれが噂となつて一人歩きをし、【剣姫】の冒険者依頼失

敗として都市に広まつてしまつたというのがこの顛末だ。

場所は都市の北西、廃墟が連なる街外れの居住区。実は僕達の元本拠『教会の隠し部屋』も存在する区画で、なるほど、子供達の遊び場としては確かにちよつどいいかもしれない。

それにしても……。

「……えっと、何でこんな夜に来たんですか？ 雰囲気的に、まだ昼間の方が……」

「夜にならないと、幽霊は出てこないって依頼人が……」

依頼人って……ああ、さつき言つてた女の子か。

屋敷を見上げるアイズさんの横顔は既に張り詰めていた。やつぱりアイズさんちよつと抜けてる、もとい天然だな、と少々失礼なことを思いつつ、僕も前方に視線を戻す。

「それで、本当に出たんですか？」

「……うん。私が入つて見た時は、上の階の廊下で、黒い影が……」

そう言つて、アイズさんがお屋敷を指差した、その時だつた。

三階の窓辺に、黒い襦袢を被つた影が幽鬼のごとく浮かび上がったのは。

「——」

虚空から滲み出るように突如現れた影は、すーつと窓辺を横切つていた。

ぽつぽつと雨粒が肩に落ち始める中、二人揃つて硬直してしまつた。

アイズさんはあつという間に青ざめ、僕は顔を引きつらせた。

ま、まさか、本当に……？

「……………行こう」

「え、アイズさん、顔が果てしないくらい真っ青……あ、いや、行きます」

悲壮、と見えていて気の毒になるほど血の気の引いた顔のアイズさんとともに、僕は幽霊屋敷へと乗り込んだ。

扉を開け、「こんばんわー……」と呟いてから、身を滑り込ませる。

（うわあ……中もやっぱり、いかにも、っていう感じ）

正面玄関の古びた両扉が閉まると、途端に薄闇に包まれる吹き抜けのエントランス。

天井には蜘蛛の巣が張っており、壁には虚ろな目をしたおどろおどろしい山羊の頭の剣製が。元は立派であっただろう彫像も、顔半分と片腕がなくなった今の姿では周囲の不気味さに一役買っている。

準備しておいた行灯型の魔石灯を掲げながら、確かに一人で来るのは気が引けるかも……なんて僕が感じていると。

隣にいるアイズさんは既に抜剣して、ぱっ、ぱっ、と頻りに体の向きを変えていた。

「……あの、アイズさん？　もしかしなくてもやっぱり、幽霊が怖いんですか……？」

「……………」

「ええつと、でも、モンスターの方が怖くないですか？」

油断なく辺りを警戒する無言の肯定に対し、至極真つ当な疑問を投げかけると。

アイズさんは緊迫しながら、のたまった。

「幽霊は、斬れないッ……！」

ええー。

今にも汗が滲み出しそうな超真剣な横顔に、僕の膝はがくりと力を失いそうになった。

「ベルは、幽霊が平気なの……？」

畏怖の眼差しを向けてくるアイズさんに、何とも言えない表情を浮かべてしまう。

いやまあ、確かに平気ですと言えば嘘になるんでしょうけど……僕は殺意をもって襲いかかってくる怪物の方がよっぽど怖い。迷宮の横穴に入った途端、ウガァー、とか。

憧れの人からよりもよってこんな風に一目置かれるなんて……駄目だ、複雑過ぎる。

「……取りあえず、黒い影がいた三階に行ってみますか？」

「ま、待ってっ。調べるなら建物の端からっ。こういう時は、本丸は最後に残した方がい

い……って、リヴェリアが言った」

こんなにも慎重な第一級冒険者の姿を見たことがあったらうか。

僕は汗を流しながらアイズさんの言う通り、前回調べ切れなかったという二階へと上った。（でも実際、あの黒い影は何なんだろう。単に人が檻を被っている可能性もあるけど……何もないところから現れたように見えたし……本当に幽霊なんじゃあ……）

窓の外ではすっかり雨が降りしきる中、一抹の怖い想像を捨て切れなっていると……不意に僕の右手の袖が、ぎゅっ、と握られた。

「えっ……あ、アイズさん？」

「ふ、二人、離れ離れになるといけないから……その、だから……」

気恥ずかしいのか頬を紅潮させ、ぼそぼそと呟くアイズさんに、急にドキドキしてきた。今更で、しかも不謹慎だけど、これって僕かなり役得なんじゃあ……？

アイズさんに頼られて、距離も近くて、こんな普通の女の子みたいに可愛い姿も見れて。(しまいには、いきなり抱き着かれたり、なあって……)

苦笑しながら僕が邪な想像を働かせていた、その矢先。

空から大きな雷が落ちた。

「っ!？」

轟然と鳴り響く雷鳴に、アイズさんは神速で剣を構えながら、僕の腕にしがみついていた。密着する柔らかい体、胸当て越しだけど肘に当たる胸。金の髪からふわりと漂う香り。

わわわわっ、まさか妄想が現実——。

「つて、アイズさんっ力強っ——ぐああああああああああああああああああああ!!」
次の瞬間、Lv.6の『力』がLv.3の貧相な体から悲鳴を上げさせた!

だ、第一級冒険者の本気の腕力が僕の腕をおおおおおおお——!？」

僕が甘かった。

アイズさんとの接触を楽しみだなんて百年、いや、Lv.3分は早かった!!

それ以降、幽霊屋敷の調査は激しい損耗を強いられた。主に僕の体が。

鼠が廊下を横切ればアイズさんが超速で反応し、物音を察知すれば剣を構え、再び雷鳴が轟けば同じ光景を繰り返し……その度にしがみ付かれては振り回され、とにかく僕はアイズさんに殺されかけた。

『幽霊』という『未知』が、異常事態にも動じない筈の第一級冒険者を過敏にさせ、その行動を過激にさせたのだ。というかきつと恐らく、空回りするばかりで迷宮探索の一割も力を発揮できていない……。同時に憧憬の相棒どころか支援者としても未熟な我が身を痛感する。

僕だけが傷付き、ズタボロになりながら。

ややあつて屋敷最上階、最奥の部屋に辿り着いた。

「あ、あと調べていないのは……こ、こっただけですね……」

「うん……行こう」

満身創痍で声が震える僕の隣で、アイズさんは緊張の面差しを浮かべる。
伸ばされた彼女の手が、ゆっくと重厚な木扉を開ける。

「どうした、フェルズ」

「いや、知っているとは思いますが、手狭になった隠れ家とは別に魔工房アトリエを人気がない場所に設けていたんだがね、それを他者に見られてしまった。また別のところに移らないと」

万神殿バンテオン、地下。

管理機関ドの主神ウラノスが座する『祈禱の間キトウ』で、魔術師フェルズは黒い襪にも見える黒衣を揺らし、嘆息を表現した。

生ける骸骨である己の片腕を尻目に、老神は片手に持っている紙に視線を戻す。

「おや、そういう貴方あなたも情報紙を見ているなんて珍しいね、ウラノス。何かあったのかい？」

「剣姫キリメが冒険者依頼クエストに失敗したらしい」

「ほお、それは確かに珍事を通り越して衝撃だ。しかしまあ、彼女も人間だしね」

そこでふと思いついたように、フェルズは言った。

「剣姫」と言えば、ベル・クラネルと一緒に私の魔工房アトリエでばったりと会ったよ。あつちは驚いて逃げ出しました。単なる肝試しか、はたまた二人だけの逢瀬おうせか。はははは、ベル・クラネルも中々隅すみに置けない——って、どうしたんだい、ウラノス？ そんな頭痛を堪えるような顔をして？」

後日。

屋敷から幽霊がぱたりと出なくなると、幼い依頼人クライアントの少女は冷や汗を称える勇敢な冒険者達の前で感謝したという。

そのまた後日。

「剣姫」がとうとう達成できなかったという冒険者依頼クエストは詳細もわからぬまま、冒険者達を震撼させる都市伝説と化した。

5 YEARS AFTER ~ Side Bell ~

「あれ、ここは……」

僕は辺りを見回した。

白を基調とした潇洒な一室。見覚えのない部屋だ。よく見れば自分も白の礼服タキシードを着ている。一瞬立ち呆はたはけてしまったけれど、

「——ベル？ どうしたの？」

美しい純白のドレスを纏まとい、鮮やかな花束を持った『彼女』を見て、微笑ほほえみを浮かべた。

（ああ、そうだ。僕はとうとうこの人と——）

そう、僕は結ばれようとしているのだ。

初めて『彼女』と出会って五年が経った、今日この日に。

カラアン、カラアン、と鳴り響く鐘カリンの音。窓の外には青空が広がり、鳥達が羽根を散らして飛び立っていく。まるで世界が二人を祝福しているかのようだ。

誓いの言葉を交わすまでもうすぐ。

教会の一室で控えている僕は『彼女』と向き合った。

白の花嫁の衣装。顔を隠すヴェールがほのかに揺れている。

薄布の奥で細められる瞳ひとみに、釣られて笑い返した。繰り返そう。僕は結ばれようとしているのだ。

こんな美しく、可憐かれんで、ずっと憧れていた『彼女』と。

今、目の前にいる、金髪金眼の少女と——

「させるかああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

「ほああ!?!」
が。

凄まじい勢いで扉を蹴破った神様が、僕達の前に参上した。

「べールくんっ!! 二人きりで何い霧ふん囲い気きになってるんだー!!」

「か、神様あ!?!」

仰天しながらヘステイア様の乱入にご乱心しかけて、僕は、そのまま瞳をかつ開いた。

なんと神様の格好も、『彼女』と同じ花嫁衣装だったのだ!

「何なんですか、その格好!? お願いですから空気を読んでくださいー!」

「はあああ? 君達二人の幸せなんてボクが許ゆるす筈はずないだろうー!」

「悪魔ですか神様あ!?!」

不敬と思いがちながらも声を荒げずにはいられない!

神様はそのままだりするようになり、「あつ……」と呟く『彼女』を強引に引き剥がした。更に

●本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその他すべての権利は、S Bクリエイティブ株式会社または正当な権利を有する第三者に帰属します。

●本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

GA文庫

5周年記念 書き下ろし付き スペシャルストーリー集 [本編編]
ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

著：大森藤ノ

イラスト：ヤスダスズヒト

発行人 小川 淳

発行所 SBクリエイティブ株式会社

〒106-0032

東京都港区六本木2-4-5

装丁 FILTH

2018年2月1日 電子第一版発行

©Fujino Omori

【掲載出典一覧】

タイトル		配布店舗
チュートリアル	1巻特典	とらのあな
神サポーター	2巻特典	とらのあな
神楽(じゃんけん)	3巻特典	アニメイト
エピソード・ヘファイストス	3巻特典	ゲーマーズ
ソード・ガール	3巻特典	とらのあな
眷族特効薬	3巻限定版用短編	
エピソード・ミアハ	未発表	未発表
汎用決戦セールスガール・アイズ	4巻特典	アニメイト
祝賀会(パーティー)の裏側にて	4巻特典	ゲーマーズ
白兔の忠誠	4巻特典	とらのあな
ブルートワイライト	4巻限定版用短編	
剣姫親衛隊 ～鮎と鯉～	5巻特典	アニメイト
とある酒場の後日談	5巻特典	ゲーマーズ
男(オトコ)ですから	5巻特典	とらのあな
女神様ご乱心	5巻特典	Amazon
特訓の裏側で	6巻特典	アニメイト
生まれゆく魔剣へ	6巻特典	ゲーマーズ
スパイ・ガール	6巻特典	とらのあな
女神(ボク)と眷族(きみ)の決戦前夜	6巻特典	Amazon
【タイトルなし】	6巻限定版用短編	
お祝い？	7巻特典	アニメイト
哀願(エレジー)	7巻特典	ゲーマーズ
ファミリア入団契約書	7巻特典	とらのあな
円月投(ミカツチ)	7巻特典	Amazon
愉快な鼓動	8巻特典	アニメイト
狐の夜嫁(よめ)入り	8巻特典	ゲーマーズ
全ての元凶	8巻特典	とらのあな
世界最速鬼、再び	8巻特典	Amazon
過ぎ去ったとある日の一幕	9巻特典	アニメイト
追跡者T型	9巻特典	ゲーマーズ
剣姫VS街娘	9巻特典	とらのあな
妖精ロマンチカ	9巻特典	一般書店
長続きしない空気(シリアス)	10巻特典	アニメイト
狐娘の冤罪	10巻特典	ゲーマーズ
異端児達の一幕	10巻特典	とらのあな
家族の形	10巻特典	一般書店
とある魔術師の観察日誌	10巻限定版用短編	
隣(ここ)はリリの特等席	11巻特典	アニメイト
無法者達の悪逆し	11巻特典	ゲーマーズ
怪物は悪い熊がね、そして賢者は新たな悟りを開く	11巻特典	とらのあな
女神インターミッション	11巻特典	一般書店
女神の衝撃	12巻特典	アニメイト
水都(みと)の花嫁は白兔がお好き	12巻特典	ゲーマーズ
冒険者は見た	12巻特典	とらのあな
恋するエルフ	12巻特典	メロンブックス
ささやかな夏色を	2014夏フェア用特典	フェア取り扱い書店
ゴーストスイーパー【剣姫】とお供の鬼	スクウェア・エニックス コミック同時購入特典	アニメイト・ゲーマーズ・とらのあな・ WonderGOO・メロンブックス・アニメガ
5 YEARS AFTER ～Side Bell～	5周年用書き下ろし	